

569-14



1200501516886



岩波文庫

137

974-975

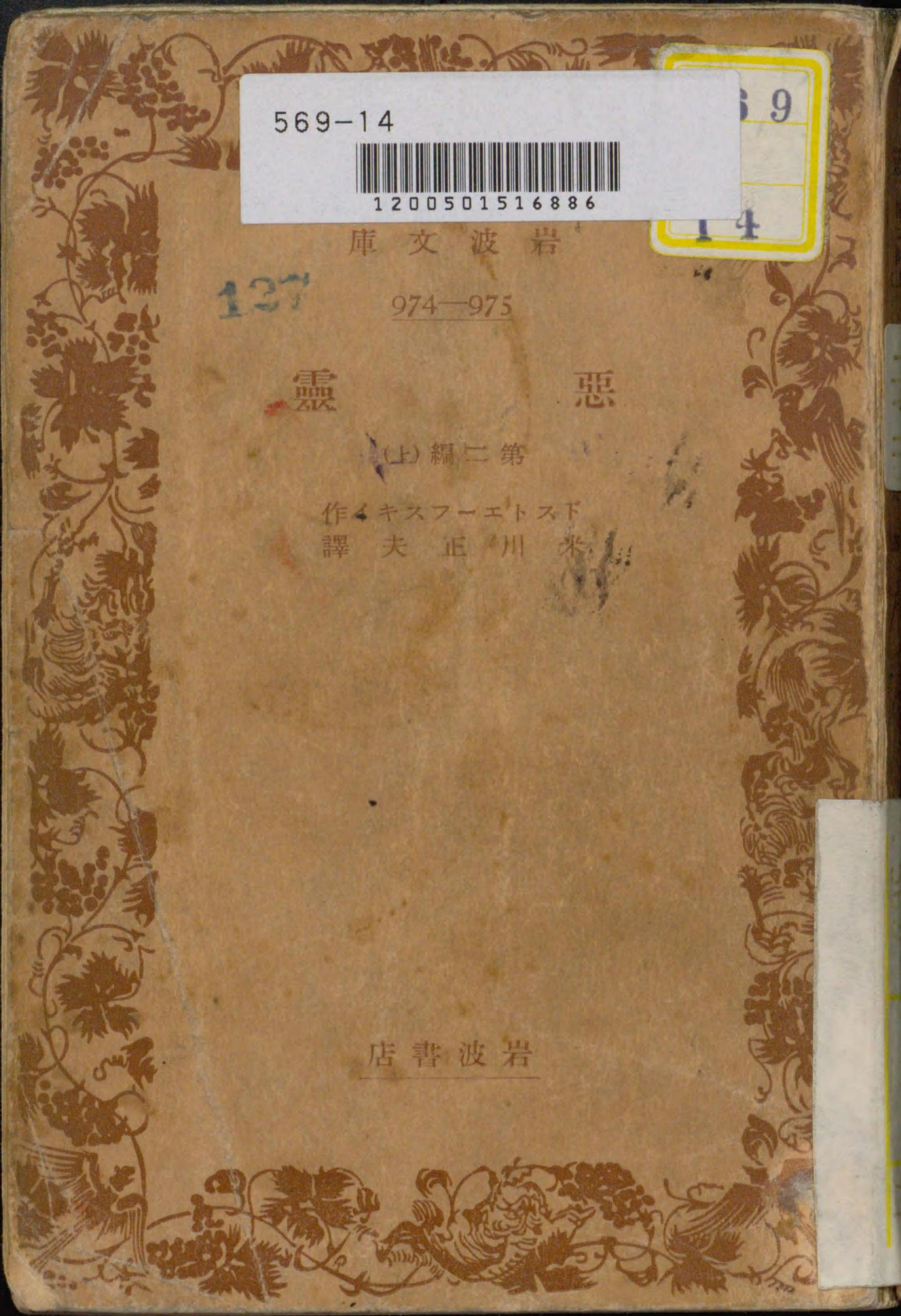
靈

惡

(上) 第二編

作 下エフキス
譯 米川正夫

岩波書店



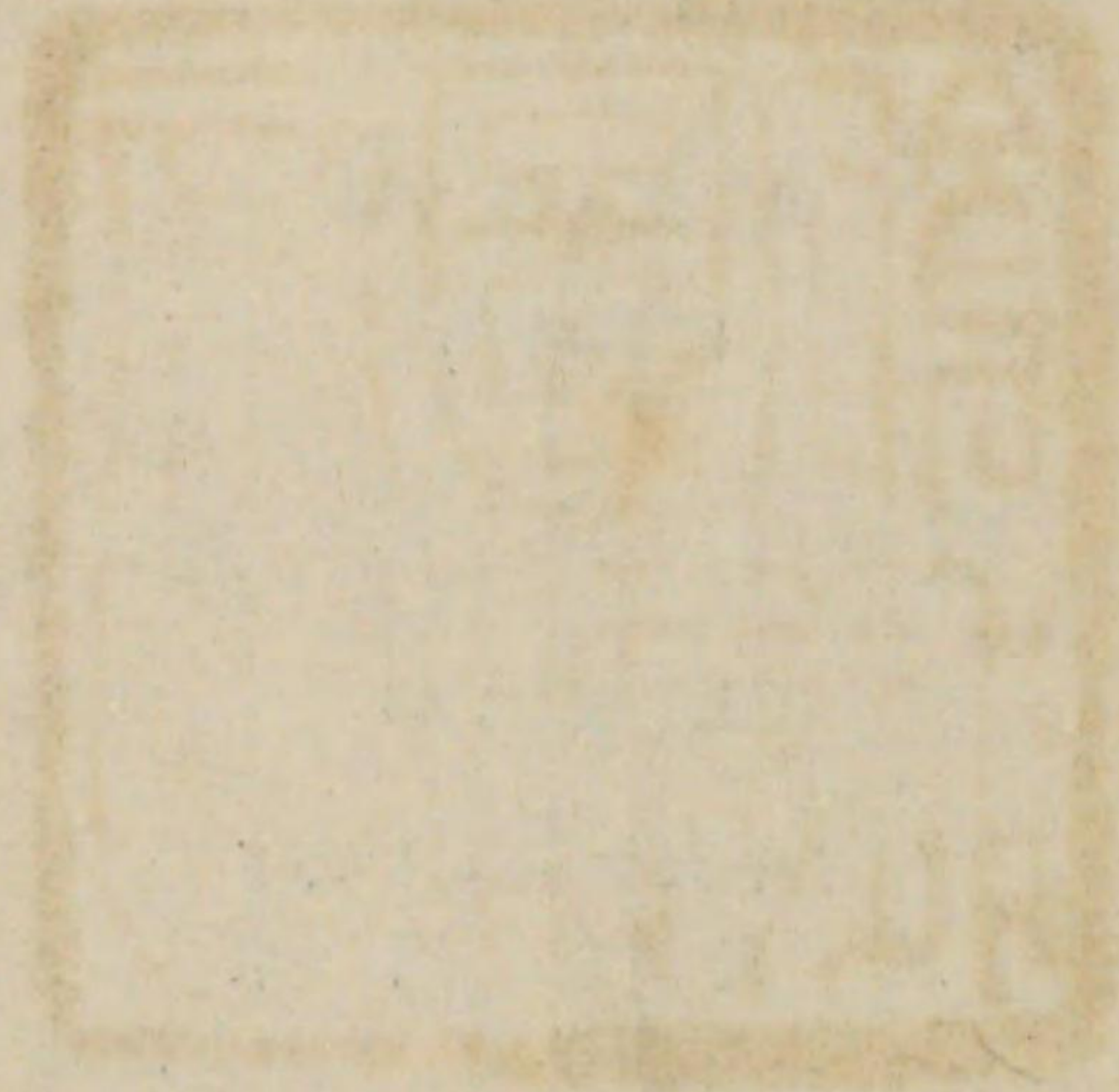
岩波文庫
974—975
靈 惡
第 二 編 (上)
ドストエフスキイ作
米川正夫 譯



569-14

第二編(上)目次

第一章 夜	五
第二章 夜(續)	九七
第三章 決闘	一四
第四章 一同の期待	一六七
第五章 祭の前	二〇八



第二編

第一章 夜

それから八日たつた。もう一切が終りをつけて、わたしがかうして記録を書いてゐる今となつては、事の真相もよく分かつて了つたけれど、當時わたし達はなんにも知らなかつたので、自然の數として、いろんな事が不思議に思はれた。少くもわたしとステュパン氏とは、はじめの中、家にはかり閉籠つて、遠方からびく／＼しながら観察してゐたものである。たゞわたしだけはちよいちよい方々へ出かけて、前の通り色々の報知を齎らしてゐた。實際さうしなくては、一日もたちらかなかつたのである。

町ぢうに區々まち／＼な風説が擴つたのは、もちろん言ふまでもないことである。つまり例の『頼打ち』だの、リザエータの卒倒だの、そのほか、かの日曜日の出來事に關する風説である。たゞどつどつ譯であの出來事が、かうまで迅速正確に表沙汰になつて了つたか、これだけは全く驚くほかはなかつた。當時あの場には合はせた人の中で、事件の祕密を破る必要を感じさうな者もなければ、そんな事をして得の行きさうな者もゐない。召使は一人も合さなかつた。たゞ一人レビヤードキンだけはなにか喋つたかも知れない。しかし腹立ち紛れではない。それはあの時

すつかり懼え上つて、出て行つたのに徴しても明らかである。(敵に對する恐怖は、憎悪の念を消すものである。)だから、たゞ本當に我慢できなくて喋つたかも知れない。レビヤードキン兄妹はその翌日、行きがた知れずになつて了つた。彼等はフィリップの持家に見えなくなつて、まるで消えてでも了つたやうに、どことも知れず姿を晦ましたのである。わたしはシャートフに會つて、マリヤの事を聞いて見ようと思つたが、彼は部屋の戸を閉め切つて了ひ、この八日間、町の方の仕事も抛り出して、家にばかり籠つてゐたものらしい。彼はわたしに會つてくれなかつた。わたしは火曜日、彼の所へ寄つて、戸を叩いて見たが、返事をして貰へなかつた。けれど、ある正確な報知によつて、その所在を信じ切つてゐたわたしは、もう一ど戸を叩いて見た。そのとき彼は寢臺から飛び下りたらしい様子で、大股に戸の方へ近寄ると、ありたけの聲を張り上げて怒鳴つた。『シャートフは留守です』——で、わたしはそのまま立ち去つた。

わたしとステパン氏とは、いくら自分たちの想像の大膽さに恐れを感じながらも、互に相手を激ますやうにして、ある一つの考へを是認せざるを得なかつた。つまり、この風説を觸れ廻した責任者は、ピョートルを措いてほかにないと決めたのである。もつとも、彼は暫くたつて父と談話をまじへたとき、事件後はじめて會つた人々は、誰も彼もみんなその噂をしてゐた、ことに俱樂部ではそれが一さう酷くつて、知事夫人も、知事公自身も、色々こまかな點までも、すつかり知り抜いてゐたのだ——とかう言つて、一生懸命に辯解はしてゐた。なほまだ驚くべき事は、その翌日、即ち月曜日の晩方、わたしがリプーチンに會つたとき、彼はもうなにもかも残る

所なく知つてゐた。とにかくこの男などは、第一番に嗅ぎ附けた方と言はなければならぬ。

婦人連も(ごく上流の人まで)かの『謎の跛』、つまりマリヤの身の上に、好奇心を抱き始めるものが多かつた。そして、ぜひ會つて親しくしり合つて見たい、などと言ひ出すものさへ出て來た。かういふ譯だから、急いでレビヤードキン兄妹を隠して了つた人達の行動は、頗る機敏と言はなければならぬ。しかし何と言つても、いちばん問題になつたのは、リザゼータの氣絶だつた。とにかく事が、親戚たりかつ保護者たる、知事夫人ユリヤに關係してゐるといふ點から見ただけでも、『全社交界』の注意を惹くに十分であつた。人々はありとあらゆる饒舌を逞しうした。この饒舌を助長したのは、如何にも秘密ありげな状態である。兩家の戸はびつたり閉ざされてしまつた。話によると、リザゼータは熱病で倒れてゐるとの事だし、ニコライについてもそれと同様な噂が傳はつた。しかも、齒を一本たゞき抜かれたとか、頬が腫れ上つたとか、いやらしいほどこま／＼した話が附けたりになつてゐた。また隅の方でこそ／＼とこんな話もあつた——事によつたら、この町で殺人があるかもしれぬ。スタヴローギンは決して侮辱を忍んでゐるやうな男でないから、きつとシャートフを殺して了ふに相違ない。しかし公然にはなく、丁度コルシカ島の vendetta(仇討)のやうに秘密の中に行はれるに違ひない——この思ひ付きは町の人の氣に入つたが、社交界の若い人たちは大部分、われ關せず焉と言つたやうな無關心の體を粧つて(無論附け焼刃ではあるが)、さも輕蔑したやうな態度で聞いてゐた。

ひつ括めて言へば、この町の人のニコライに對する舊い敵意が、再び明らかに現れて來たので

ある。身分のある立派な人たちでさへ、自分自身、事の何たるやを解しない癖に、無性に彼を攻撃し始めた。そして陰の方でこそくくと、リザゼータの節操は彼のために穢されてゐるのだ、二人は瑞西で怪しい關係があつただのと、そんな事を囁き合つてゐた。もちろん要心深い人たちは慎んで控へてゐたけれど、しかしみんな悦んでそんな噂を貪り聞くのであつた。そのほかまた別な噂もあつた。それは一般にわたつたものでなく部分的な風説で、ごく時たま内緒のやうに傳へられてゐたが、その内容は恐ろしく奇怪なものだつた。わたしがこんな風説の存在をわざ／＼ここへもち出すのは、たゞ物語の先の方で起る事件の豫備知識として、讀者の注意を促すために過ぎない。それはかうである。何を根據に言ふのか知れないけれど、ニコライは何か特別な用向きがあつて、この縣へ來てゐるのだ。彼はK伯爵を通じて、彼得堡でもごく上流の社會へ入りこんでゐるから、事によつたら、政府に使はれてゐるかも知れぬ。そして、誰かにある特別な任務を授けられてこゝへ來たのだ、とこんな事を、眉を顰めながら、話し合ふ人もあつた。ごく手固い控へ目な人たちが、この噂を聞いて、にやりと笑ひながら、始終いかゞはしい騒ぎを身上しんじやうにして、この町へ來てからも、さつそく頬を腫らしたりなぞする男だ、餘りお役人らしくないぢやないかと、至極もつともな意見をはいたとき、また一方は小さな聲で、ニコライは表向きに勤めてゐるのでなく、言はば内密な任務をしてゐるのだから、従つて、なるべくお役人らしくないのが、都合がいいのではないかと答へた。この答へはかなり効果を奏した。なぜと云ふにこの縣の自治團が、中央で一種特別の注意を受けてゐるといふ事は、土地の人に知れ渡つてゐたからである。しかし

繰返して言ふが、この噂はニコライのやつて來た當時、ちよつと燃え上つたきりで、すぐに跡方もなく消えて了つた。たゞ斷つて置きたいのは、かういふいろ／＼な風説の原もととなつたのは、先頃ペテルブルグから歸つた來た近衛の豫備大尉、アルチェーミー・ガガーノフが、俱樂部で洩らした不明瞭で、簡單で、斷片的な、しかし意地悪い二三の言葉だつた。この人は縣内でも、郡内でも、うんと大きな地主で、しかも都育ちの世馴れた交際家だつたが、これこそニコライが四年前、粗暴かつ奇矯な點に於いて類のない衝突をした、町の長老ともいふべき故パートゼル・ガガーノフの息子だつた。(この衝突の事は、物語の始めに述べて置いた。)

また次の事實も、さつそく世間一般へ知れ渡つて了つた。ほかでもない、ユリヤ・レムブケイ夫人が、ブルグラー夫人のもとへ何か特別の用向きで馳せつけたところ、一氣分が勝れぬからお會ひするわけに行かぬと言つて、玄關拂ひを食つたのである。この訪問から二日たつた後、ユリヤ夫人はわざ／＼使ひをやつて、ブルグラー夫人の容體を訊ねさせた。かうして了ひには到る處で、ブルグラー夫人を辯護するやうになつた。もつとも、それは一ばん高尙な意味、すなはち極めて漠然とした意味に於けず辯護なのであつた。つまりあの日曜の出來事に就いて、まづ最初つたへられた氣の早い當てこすりを、彼女は悉く嚴げんつ冷やかな容子をして聞き流したので、二三日たつ中にはもう彼女のゐる前で、そんな話をもち出すものもなくなつて了つた。かういふ具合なので、ユリヤ夫人はこの神祕的な事件を全部承知してゐるばかりでなく、その裏面の神祕的な意味すらも、微細な點まで了解してゐる。夫人は決してたゞの局外者ではなく、事件の直接關

係者に相違ないといふ考へが、いたる處で確固不易なものとなつて了つた。ついでに言つて置くが、彼女は以前一生懸命に追求渴望してゐた、上流社會に於ける勢力を、次第に獲得しはじめた。そしてだん／＼と多くの人々に『取巻かれた』自分を見出すやうになつた。社會の一部は、彼女の實際的才智と手腕を是認して來た……が、この事は後廻しにしよう。しかし、當時父スチュエバン氏すら驚倒させたほどの、わが社交界に於けるピョートルの目醒しいもて方は、いくぶんレムブケー夫人の引立てによつたのである。

或ひはわたしもスチュエバン氏も、大仰に考へ過ぎたかも知れないが、それにしてもピョートルは第一に、來てからまだ四日ばかりしかたぬ中に、たちまち殆ど町中の者と知合ひになつて了つた。彼が姿を現はしたのは日曜日であるが、火曜日にはもうアルチェーミイ・ガガーノフと、一の馬車に乗つてゐる處を見受けた。このガガーノフは世馴れた人物ではあるけれど、尊大で、癩癩もちで、しかも高慢な性質であるから、この人と親しく附合ふのは至つて困難な事だつた。ピョートルはまた縣知事の家でもなかくいゝ扱ひを受けて、忽ちの中に近しい知人、といふよりは、お氣に入りの青年ともいふべき位置を獲得して了つた。そして、毎日のやうにユリヤ夫人のもとで食事をするのであつた。彼はもと瑞西で夫人と知合ひになつたのだが、それにしても、閣下のもとに於ける彼のかうした破天荒なもて方は、まつたく、何か謎のやうに思はれるくらゐだつた。

その癖、彼はまた以前外國で活動してゐた革命家として、通り者になつてゐた。嘘か本當か知

らないけれど、何か海外に於ける秘密出版事業や、會議のやうなものに携はつてゐたといふ噂もあつた。『それは新聞を持つて來て證明する事も出来る』とアリョーシャ・チェリヤートニコフが、嘗てわたしに出會つたとき、さも憎らしさうに言つた事がある。これはもと舊知事の家でお氣に入りの青年だつたが、無慘やいまや一個の退職官吏にすぎない。しかし、こゝに一つの事實が嚴として控へてゐる。ほかでもない、嘗て革命運動にたづさはつてゐた男が、今この無愛想な祖國へ姿を現はしたのに、少しもうるさい目に會はないばかりか、寧ろ歓迎されてゐるほどであつた。して見ると、或ひは何もなかつたのかもしれない。ある時リプーチンが、わたしにこんな事を内緒で聞かしてくれた——噂に依ると、ピョートルはどこかで、何もかもすつかり懺悔をした上に、二三の仲間の名前を打ち明けて、やつと放免されたとか云ふ事である。つまり、向後は國家有用の人物たるべき事を約して、罪亡しをして了つたらしいと言ふのだ。わたしはこの毒を含んだ言葉をスチュエバン氏に傳へた。彼はたうてい考へ事など出來ない状態だつたけれど、これを聞くと、ひどく考へこんで了つた。

これは後で分かつた事だが、ピョートルは非常に立派な紹介狀を幾通も持つて、この町へやつて來たとの事である。すくなくともその中の一通は、並々ならぬ勢力を持つた彼得堡ペテルブルグのさる老貴婦人から、知事夫人へあてたものだつた。彼得堡でも指折りの名士たる元老を夫にもつたこの貴婦人は、ユリヤ・レムブケーの名付け親になつてゐるが、その紹介狀の中にこんな事が書いてあつた。『R伯爵にニコライ殿の紹介にてピョートル殿に接し、一方ならず愛あでいつくしまれ、か

つて邪路に迷ひ入りたる事こそあれ、將來有望の青年と申し居られ候。『ユリヤ夫人は、つね々々非常な苦心を拂つて繋ぎ止めてゐる、『雲上人の世界』との覺束ない關係を、一方ならず大切がつてゐるので、無論この勢力家の老婦人の手紙に、有頂天になつて了つたのだ。しかしそれでも、やはり何かちよつと妙なところがあつた。彼女は自分の夫までも強ひて、ピョートルとなれくしい關係にして了つたのである。フォン・レムブケー氏も大分こぼしてゐたが……しかし、これもやつぱり後廻しにしよう。

もう一つ忘れないために言つて置くが、かの大文豪もきはめて好意ある態度でピョートルに接し、さつそく自分の處へ招待した。あの高慢ちきな男のかうした早速なやり方は、何よりも一番スチエパン氏の胸にちくりと應へた。しかしわたしは心の中で別様に解釋した。つまり、カルマジノフがこの虚無主義者を誘き寄せたのは、もちろん兩首都に於ける進歩黨の青年たちとピョートルとの交渉を、ちやんと頭に置いてゐたのである。彼は戦々競々として最近の革命青年の鼻息をうかがつてゐる。彼は愚かにも、露西亞の未來の鍵は、彼等の手中に握られてゐるものと考へて、卑屈な媚びを呈してゐるのだ。しかし重なる原因は、彼等が自分に些かの注意も拂つてくれないからである。

二

ピョートルは二度ばかり、父親の所へちらと顔を出したが、不幸にも、二度ともわたしのゐな

い時だつた。はじめて彼が來訪したのは水曜日、即ち最初の會見から四日たつた時で、それもおまけに何か用事のためだつた。ついでに斷つて置くが、領地の方の勘定は妙にこつそりと、目立たぬやうに片付いて了つた。ヴルヴーラ夫人が一さい自分に引受けて、その小かな領地を買取つた上、全部の支拂ひをすましてくれたのである。けれどスチエパン氏には、たゞ一切かたがついたと、知らせたに過ぎない。從僕アレクセイ・エゴールイチが夫人の代理として、何やら書類を持つて來て、署名してくれと言つたとき、彼は無言のままなみくならぬ品位を見せて、言はれるまゝに署名した。品位と言へば、彼はこの三四日の間、これが以前のお爺さんだとは思へないくらゐだつた。態度が前とはがらりと變つて、びつくりするほど口敷がすくなつた。そしてあの日曜以來、ヴルヴーラ夫人にあてて、ふつつり手紙を書かなくなつた（これなどは奇蹟と言つてもいいくらゐだ）。まあ、何よりも落ち着いて來た。彼が最後の異常な想念に固く根をおろして、そのために平靜を得たのは、明瞭だつた。彼はこの想念を探り當てると、ちつと坐り込んだまゝ、何やら待ち受けてゐた。もつとも始めの中、ことに月曜日は體が悪かつた。例の氣鬱症である。それでも、外からの注進を聞かすにはゐられなかつたが、ちよつとわたしが事實の報告をやめて本體論に移り、何か自分の推察でも述べ始めると、すぐに手を振つて、やめさせて了ふのであつた。しかし、わが子との再度の會見は、彼に病的な影響を與へた、もつとも、決心を動揺さすほどの事はなかつたけれど。その時は二日とも話が濟んだ後で、酔を浸した手巾を頭に巻き、長椅子の上に臥せつてゐた。とは言へ、第一義的の意味では、依然として落ち着いてゐた。

しかしどうかすると、彼もわたしに手を振らない事があつた。どうかすると、胸の中へ藏めた秘密の決心も、何だか忘れたやうな具合になつて、また新しい誘惑をおびた想念の奔流と、戦ひ始めたのではないかと思はれる事があつた。それはほんの瞬間の現象だけれど、わたしは特にこゝに記して置く。全く、彼は再びこの隠棲の境を脱して、自己の存在を表明し、争闘を挑みたくなつたのではないか、最後の決戦を試みたくなつたのではないか——かうもわたしは疑つて見た。

「君、わたしはあの連中をこつば微塵にしてやりたい！」彼は覺えず口走つた。それは金曜日、つまりピョートルとの二度目の會見後で、彼は頭を手拭ひで巻いて、長椅子の上に臥そべつてゐた。

この瞬間まで彼は一昨日ひと言も、わたしに口を利かなかつたのである。

「Fils, fils chéris (わが子よ、いとこ) とか何とか言ふ表現は、そりやあ全く馬鹿げてる、飯焚き婆さんの語彙だ、そりやわたしも同意する。だが、あんなやつら、何とでも勝手にさしとくさ。わたしもいま自分で目が開いた。わたしはあれを養はなかつた、乳も飲ませなかつた。まだ乳呑兒の時に伯林からN縣へ『郵便』で送つた。いや、何もかもその通り、わたしも同意だ。『お父さんは僕に乳一つ吞ませてくれないで、郵便で體よく送り出して置きながら、おまけにこゝでは僕のものをつかり横領して了つたぢやないか。』だとき。そこで、わたしも怒鳴つてやつた。お前は不仕合せな子だ、しかしわたしは一生お前の事で胸を痛めてゐたんだよ、やはりそれも郵便

で送つたんだがね！ ところが、*コゴロ* (あいつは笑やがるんだ) しかし、わたしも同意だ、その通り郵便……といふ事にしとくさ。」彼はまるで魔されてでもあるやうな調子で、かう結んだ。

「Passons (それはまあ) 五分ばかりたつて後、彼は更にかう言ひ出した。「わたしはどうもトルゲーネフが腑に落ちない。彼の書いたバザーロフは、何だかまるで實際にゐない架空の人物みたいだ。今の若い連中も當時自分たちの口から、ぜんぜん成つてないもののやうに言つて、その價値を否定して了つたくらゐだ。あのバザーロフといふ人物は、何だかノズドリョーフ (ゴゴリの人物) とバイロンを一緒にしたやうな、譯の分からない代物だ、と云ふ評判があつたが、*West le mot* (言だね) しかし、あの連中を注意して、觀察して見たまへ。あの連中は、まるで犬の子が日向ぼつこでもするやうに、嬉しさうに轉げ廻つて、きやつくと言つてゐる。實に幸福さうだ。全く勝利者だ。ね、一體どこがバイロンに似てるのだらう？……おまけに、まあ何といふ月並みさ加減だらう？ まるで下女か何ぞのやうに、みえ坊の怒りん坊で、そして *Fair en bruit antouire de son nom* (自分の名を響かして) 下劣な慾ばかり張つてゐるんだ。しかも、自分の名が……その、何だと云ふ事にはお氣がつかないのだから、もう實にぼんち繪だよ！ わたしはあいつにかう言つて怒鳴つてやつた——おい／＼冗談ぢやないぜ、一體お前は現在のまゝの自分を、基督の代りに人類へ薦めようと思つてるのか、つてね。II rit. II rit leauncoup, il rit trop (あいつは笑ふ。あいつは程笑ふ) あいつは何だか奇妙な笑ひ方をする。あれの母親はあんな笑ひ方をしなかつた。II rit toujours (あいつは笑つてゐる)」

また沈黙が続いた。

「あいつ等は狡いよ、日曜日には二人で企んで、あんな事をしたんだよ……」と彼はとつぜん正面から切り出した。

「Oh、それさうですとも。」とわたしは耳を時てながら叫んだ。「あれはみんな細工ですよ。しかしその細工が白い糸で縫つてあるもんだから、實にやり方が拙かつたですよ。」

「わたしはその事を言つてるんぢやない。ねえ、君、あれはわざと見透かされるやうに、白い糸で縫つたんだよ……もつとも、必要のある人だけに見透かして貰ひたいんだがね。君、それが分るかね？」

「いや、分かりませんよ。」

「Tant mieux. Passons. (その方から、のだらう。ま)わたしは今日むやみに肝が昂つてるんだよ。」

「ステエバン・トロフィームイチ、どうしてあなたはあの人と口論なんかしたのです？」とわたしは責めるやうに言つた。

「Je voulais convertir (わたしはあいつを改心させようと思つたんだ) まあ君、勝手に笑つてくれ給へ。あの哀れな叔母さんは、Ille entendra de telles choses (まづとていらく、好い話しか聞くだらうよ) ねえ、君、まづたくの話だがね、わたしはさつき、自分で自分が愛國者のやうな気がしたよ！ もつとも、わたしはいつも、俺は露西亞人だと自覺してゐたがね……いや、まづたく正眞の露西亞人といふものは、わたしや君のやうな人間でなくちやならない筈だ。 Il y a là de dans quelque chose d' a. engle et de

Lonche (實際、露西亞人の中にも目くらみや數脱みがあるから)

「そりやそれに違ひありませんよ。」とわたしは答へた。

「君、本當の眞實はいつでも本當らしくないもんだよ、君それが分かつてるかね？ 眞實をより以上本當らしくするためには、どうしても嘘を交ぜなければならぬ。だから、人はいつでもさうして來たものだ。大方そこには、我々の理解できないやうな點があるのだらうよ。君はたゞいどう思ふね、あの勝ち誇つたやうな絶叫の中に、われわれの理解できないやうなものがあるだらうか？ わたしはあつてほしいと思ふんだがね。あつてくれるといふがなあ。」

「よく人は、佛蘭西式の智慧だと、一口に言つて了ふが……」と不意に熱にでも浮かされたやうに、呂律の廻らぬ調子で言ひ出した。「それは嘘だ、それは今までもずうつと續けてさうだつた。何だつて佛蘭西式の智慧に言ひがりをするのだ？ それはたゞ露西亞人の怠け癖なのだ。理想の獲得に對する差づけ無氣力なのだ。各國民の間に介在してゐる露西亞人の、忌まはしい寄生蟲的狀態なのだ。 Ils sont tout simplement des Parasseux (彼等はみんな、單なる怠け者なので) 決して佛蘭西式の智慧ぢやあない。さうだ、露西亞人は全人類の幸福のために、有害な寄生蟲と同じく撲滅されるべきなのだ！ われわれは決して、決してそんな結果に向かつて努力したのぢやない。わたしは何が何やら分からない。まるで分からなくなつてしまつた！ わたしは息子にかう怒鳴つてやつた——いゝかい、こら、いゝかい、もしお前たちが斷頭臺を一番の眼目に置いて、しかも夢中で

得意になつてゐるとすれば、それは決してほかに理由はない、たゞ／＼首を切るのが一ばん容易で、理想をもつのが何より難かしいからに過ぎないのだ！ Vous êtes des paresseux ! Votre drapau est une guenille, une impuissance. (實際たちは怠け者だ、骨格たちの旗印) 例の荷車……ではない何か言つたつけ。『人類に麵麩を運ぶ荷車の響き』とやらが、シクスチンの聖母(マドンナ)よりも有益だとか、まあ何だか、une bêtise dans ce genre (そんな風な話か) しかし、とかうわたしは息子(おいつ)に怒鳴つてやつた——たい貴様は分かつてるかね、人間は幸福のほかに、全然それと同じくらゐる程度に、不幸もまた必要缺くべからざるものだ！ と言ふと、ロゼ(あいつは笑つてゐるんだよ)そして、言ふ事がいゝぢやないか、お父さんはこゝで、『天鵞絨(ヒヨウ)の長椅子に樂々と手足を伸ばしながら』警句(ボンモウ)をはき散らしてゐるんだとさ……ねえ君、親子が敬語ぬきで話し合ふ露西亞の習慣は、二人が仲のいい時は結構だけれど、さあ、一たん喧嘩でもした時にはどんなもんだらう？」

ちよつとの間、彼は言葉を休めた。
「君(シエル)」とつぜん腰を浮かしながら、彼はかう結んだ。「ねえ君、この事件は何とか片がつくと思ふかね？」

「そりや勿論ですよ。」とわたしは言つた。

「Vous ne comprenez pas, passons. (君には分らないよ。まあ)」しかし……普通なら、世間の事はどうといふ事もなしに片がつくが、今度は何か結末があるよ、きつと何かあるに違ひない！」
彼は立ち上がった。そして、恐ろしい昂奮(てい)の體で部屋の中を一廻りしたが、また長椅子の傍ま

で來ると、力抜けがしたやうにその上へぐたりと倒れた。

金曜日の朝、ピョートルはどこか郡部の方へ出かけて、月曜日まで滞在した。その出立の事はリプーチンから聞いたのだが、その時何かの話のついでに、レビヤードキン(キヤウ)兄妹(きやう)がどこか川向うの、壺(ガルショーチナヤ)村邊へゐると云ふ事を知つた。

「しかも、僕が引越させさせたんだよ。」とリプーチンは附け足したが、急にレビヤードキンの話をふつりと切つて了つて、今度は突然こんな事を知らせてくれた。リザゼータはマヴリーキイと結婚する事になつた。まだ公けに披露こそしないけれど、婚約はもうちやんと成立して了つたとの事である。翌日わたしはリザゼータがマヴリーキイと、騎馬で通るのに行き會つた。病後はじめの散歩である。彼女は遠くの方から、目を光らせながらわたしを見たが、急にからくと笑ひだして、非常になれ／＼しくうなづいて見せた。わたしはこれをすつかりステパン氏に傳へたが、彼はたゞレビヤードキンに關する報告に、いくぶんの注意を拂つたばかりである。

今この八日間の謎のやうな状態を、まだ何も知れなかつた時分の心持ちで説明したから、今度はそれに續いて起つた様々な出來事を、もう事情を知り盡したものの心持ちで——つまり何もかも明らかに曝露されて了つた時の心持ちで、描きはじめる事にしよう。まづ例の日曜から數へて八日目、即ち月曜日の晩からはじめようと思ふ。なぜと言つて、實際のところ、この晩が『新しい事件』の發端となつたからである。

晩の七時だった。ニコライはたゞひとり、前から氣に入りの書齋に坐つてゐた——それは様々の絨氈を敷き詰めた、いくぶん重苦しい昔風の椅子テーブルを並べた、天井の高い部屋だった。外出でもするらしい服装をして、片隅の長椅子に掛けてゐたが、どこへも出かけさうな風は見えなかつた。すぐ前の卓上には蓋を被つた洋燈が置いてあつたが、大きな部屋は兩わきも四すみも闇の中に没してゐた。彼の視線は一つものに集中されたやうに、考へ深さうだつたけれど、何となく落ち着かぬ様子であつた。その顔は倦怠の色を帯び、いくらか瘦せて見えた。彼は實際ほゝ腫れに悩んでゐたけれど、齒を叩き折られたといふ噂には誇張があつた。たゞちよいとぐらくしたのは事實であるが、今ではまた元の通りにしつかりして來た。上唇もやはり内側の方が切れたけれど、これも癒つて了つた。頬腫れが一週間も退かなかつたのは、病人が直ぐに醫者を招いて、腫れを切らすといふ事をしないで、自然に口が開くの待つたからに過ぎない。

彼は單に醫者ばかりでなく、ほとんど母夫人さへ傍へ寄せ附けなかつた。まあ一日に一度か二度、それももう大ぶん暗くなつたけれど、まだ燈りはついてゐないと云ふ黄昏ときに、ほんのちよつとの間入れるばかりだつた。ピョートルもまだこの町にゐる間、一日に二度も三度もブルゾーラ夫人の所へ駆けつけてゐたけれど、これにもやつぱり會はうとしなかつた。ところが、この月曜日の朝、ピョートルは三日ばかりの旅行から歸つて來ると、もうさつそく町を一まはり駆け

廻つて、知事夫人ユリヤのところでご馳走になつた後、じり／＼しながら待ちこがれてゐるブルゾーラ夫人の所へ、日暮れがた姿を現はした。久し振りに禁止が解けて、ニコライが會ふとの事だつた。ブルゾーラ夫人は、自分で客を書齋の戸口まで案内した。彼女は久しい以前から、二人の面談を待ちこがれてゐた。しかもピョートルは、ニコライの所からすぐ夫人のもとへ駆けつけて、様子を傳へると約束したのである。夫人はおづ／＼と戸をたゞいて見たが、返事がないので、思ひ切つて戸を二寸ばかり開けて見た。

「ニコラス、ピョートルさんをご案内していゝかえ？」燈火の陰からニコライの顔を見透かさうと努めながら、夫人は小さな聲でひかへ目にかう聞いた。

「いゝですとも、いゝですとも、無論いゝですよ！」とピョートルはこちらから聲高に愉快さうに叫びながら、自分の手で戸を開けて、中へ入つて了つた。

ニコライは敲戸の音を聞かないで、母夫人のおづ／＼した問ひを、始めて聞きつけたばかりであるが、それに對して返辭をする暇がなかつた。丁度このとき彼の前には、たつたいま讀み終つたばかりの手紙が置いてあつた。彼はこの手紙の事で、ひどく考へ込んでゐたのである。思ひ掛けないピョートルの叫び聲を聞きつけると、ぎつくりして、大急ぎで手紙を文鎮の下へ隠したが、それでも手紙の端と封筒のほとんど全部が、まざ／＼と顔をのぞけてゐた。

「僕はあなたに準備の餘裕を與へようと思つて、わざと一生懸命に大きな聲をしたんですよ。」ピョートルは卓の傍へ駆け寄りながら、驚くばかり罪のない調子で、早口にかう囁いた。彼はい

きなり文鎮と手紙の端に目をつけた。

「そして、僕がたつたいま受取つた手紙を、文鎮の下へ隠したのも、むろん見て取つたでせうね。」とニコライはその場を動かうともせず、落ちつき拂つてかう言つた。

「手紙？ あなたが何をしようと、どんな手紙を受取らうと、僕の知つたことですか？」と客は叫んだ。「しかし……肝要な點はですね……」今はもう閉まつてゐる戸の方へ體をねぢ向け、その方を顧でしやくりながらうしろを覗いた。

悪

「母は決して偷み聞きなどしないよ。」ニコライは冷やかにかう注意した。

「しかしもし偷み聞きなすつたら！」ピョートルは肘椅子に座を占めながら、愉快さうに聲を高めて、早速かう抑へた。「が、僕はそんな事別に何とも思やしません。僕はたゞ二人きりで話がつたくて、やつて来たんですからね。いや、やつとの事であなたに會へましたよ！ まづ何よりもお體はいかゞですか？ お見受けしたところ、申し分ないやうですね。もしさうだつたら、明日はたいてい出席して下さるでせう、え？」

靈

「事によつたら。」

「もういゝ加減にして、皆を安心させてやつて下さい、そして僕も安心させて下さい！」と彼はおどけた氣持のいゝ顔つきで、盛んに身振り手眞似をしながら、「まあ、どんな事をあの連中に喋つて聞かせなきやならなかつたか、少しでも察して下すつたらなあ。しかしあなたはご存じでせうね。」

彼は笑ひ出した。

「すつかりは知りませんよ。たゞ君が大いに……活動したといふ事だけは、母から聞いてゐましたがね。」

「と言つても、別に僕が何かはつきりした事を、喋つた譯ぢやないんですがね。」まるで恐ろしい攻撃を防ぎ止めようとしてもするやうに、ピョートルは急に躍り上つた。「實はね、僕はあのシャートフの細君を道具に使つたんですよ。つまり、あなたが巴里であの女に關係したといふ風説を利用してね、それで無論、あの日曜日の出來事を説明したんですよ……あなた怒りやしないでせうね？」

「大分お骨折りだつたとは察してゐます。」

「いや、僕はたゞそればかり恐れてゐたんですよ。しかし、その『だいぶお骨折りだつた』とは、一たい何のこつてせう？ それはつまり、非難の言葉になるぢやありませんか。しかし、あなたは眞正面から打つ突かつて下さる。僕はこゝへ來る途すがら、あなたが眞正面から打つ突かるのを、いやがりにはなさらんかと、それを一ばん心配してたんですよ。」

「僕は何事も眞正面から打つ突かるのはいやですね。」ニコライはちよいといら立たしきうな風でかう言つたが、すぐにたりと笑つた。

「僕が言ふのはその事ぢやありません、その事ぢやありません、誤解しないで下さい、その事ぢやありません！」早速あるじのいら立たしきを見て取つて、悦に入りながら、まるで豆でもま

き散らすやうに、ピョートルは両手を振つて浴びせかけるのだつた。「僕は仲間の問題で、あなたに癪癪を起させなぞはしませんよ、ことに目下のやうな状態に居られる場合ですからね。僕はたゞ日曜日の事件に就いて、お話ししようと思つて飛んで来たのですが、それもほんの必要な程度だけにとどめて置きます。だつて、實際こまりますからね。僕は思ひ切つて打ち明けた相談に來たんですが、それはあなたより、むしろ僕に取つて必要な事件なんです——これはあなたの自尊心を傷けまいために言ふのですが、同時に事實でもあるんですよ。僕は今日から常に開放的にしたいと思つて、わざ／＼やつて來たのです。」

「して見ると、從來は非開放的だつたんですね。」

「それもあなた自身ご承知の筈ですがね。僕は幾度か狡智を弄しましたよ……あなた笑ひましたね。僕はあなたの微笑を事實闡明の緒として、非常に嬉しく思ひますよ。僕はね、わざと『狡智を弄した』なぞといふ自慢さうな言葉を使つて、その微笑を引出したんです。たゞし、あなたがすぐその後で、腹を立てるだらうと豫想してね。『あんなやつが狡智を弄するなんて、よく生意氣な事が考へられたものだ。』といふ譯でさあ。ところが、僕は今すぐ相談にかゝりたいために言つたんですよ。ね、ね、ご覽なさい、今日は僕ずるぶん開放的になつたでせう。どうです、僕の話聞いてくれますか？」

いかにも前から準備して來たらしい、何かたにする所ありげな、無禮なほど罪のない、しかも思ひ切つてづ／＼しい言葉遣ひで、相手の心をいら立たせようとする、客の見え透いた計略

にも拘らず、ニコライは依然として、馬鹿にしたやうな落ち着きと嘲りを見せてゐたが、たうとういくぶん好奇の色を浮かべて來た。

「まあ、聞いて下さい。」ピョートルは前より一さう烈しく活動しながら、かう言つた。「こゝへ來る途中、こゝと言つても、全體にこの町をさすんですよ——十日前にこゝへ來る途中、僕は勿論、一役演じる決心でした。しかし、何よりいゝのは一さい役なしに、素のまゝの自分で行くに限ります。さうぢやありませんか。素のまゝの自分より以上、ずるいものはありませんよ。誰も本當にするものがないですからね。僕は實際の所、のろまの役廻りが引き受けて見たかつたんですよ。なぜつて、のろまの方が、素の自分より樂ですからね。しかし何と言つても、のろまは少し極端でせう、ところが極端といふ奴は、とかく好奇心をひき易いものですから、たうとう僕は素のまゝの自分に決めちやつたんです。さあ、ところが僕の『素の自分』は何でせう？ いはゆる黄金の如き中庸です。馬鹿でもなければ利口でもなく、かなり凡くからでもあるし、おまけにこゝの賢い人達の言ふ所によると、まるで天から降つたやうな人間ださうですからね、ぢやありませんか？」

「さうさねえ、或ひはさうかも知れない。」とニコライは心持ち微笑した。

「あつ、あなたもご同意なんですな——大いに愉快です。僕もこれはあなた自身の考へだと、始めから承知してたんですよ……あゝ、ご心配はいりません。ご心配は僕怒つてやしませんよ。それに、僕が自分自身にあんな定義を下したのは、決してあなたから、『いや、君は凡くからぢやな

い、それどころか大いに賢いよ。』と云つた風な、お返しを頂戴したいからぢやありません……おや、あなたはまたにたつと笑ひましたね……また失敗つたぞ。いや、あなたは『君は利口だ』なんか言はないでせう、まあ、さうして置ませう、僕は何にでも同意しますよ。親爺の言葉ぢやないが、Parsons (止めに) ですよ。しかし、ちよいとお断りして置きますが、僕の口数の多いのに腹を立てないで下さい。ところで、これがまたちやうど都合のいゝ例になるんですよ。僕はいつも餘分な事を言ふでせう、つまり言葉數が多いでせう。僕はあまり急ぎ込むんだから、いつも纏まつた事が言へないんです。一たいどうして僕は言葉數が多くて、そのくせ纏まつた事が言へないんでせう？　ほかではない、話しが下手なからです。話し上手な人は、何でも簡単に言つて退ける。して見ると、實際僕は凡くらに相違ないのです——さうぢやありませんか？　しかしこの凡くらが、僕に取つては自然の賜物なんですから、それを人工的に利用してならないつて法はないぢやありませんか。だから、僕もそいつを利用するんです。實の所こゝへ来る前に、僕はいつそ沈黙を守らうかと思つたのですが、沈黙といふやつは非常な才能だから、僕としては僭越でせう。それに第二として、黙つてばかりゐるのは、何と言つても危険ですからなあ。で、たうとう僕は喋るのが一番いゝときめました。たゞ凡くら式にやるのです。つまり、喋つて喋つて喋り抜くのです。やたらに急ぎ込んで論證しようとするのです。さうして、しまひに自分で自分の論證に間誤つて了へば、聴き手の方でも不得要領で、たゞ呆れて両手を擡げながら(もしべつと唾でもはいてくれれば何よりですがね)、僕の傍を離れて行つて了ひますよ。かうすれば第一、

自分の人の好き加減を吹聴し、相手をすつかり厭がらせ、しかも自分の真相を晦ませるんだから——一舉三得つて譯ぢやありませんか！　どうです、これでも秘密の企らみを持つてゐるなどと、疑ふ人があるでせうか？　もし僕が秘密の企らみを抱いてゐる、などといふ者があれば、世間の人は誰でもその者に對して腹を立てますさあ。おまけに僕はとき／＼、滑稽な事を言つて人を笑はすでせう——これなどは實にまたと得難い武器なんです。だから、今ぢや世間の人も、『以前外國で宣傳びらなんぞ出版した賢人は、自分たちよりもまだ馬鹿だつたのか』と思つて、この理由一つだけでも僕を赦すに決まつてますよ。さうぢやありませんか？　あなたの笑顔でもつて、ご同意だつて事が分かりますよ。」

けれど、ニコライはまるで笑顔など見せなかつた。それどころか、顔を顰めながら、幾分じれつたさうに聞いてゐた。

「え？　何ですつて？　あなたは今『どうでもいゝ』と仰しやつたやうですな？」とピョートルが炒豆のはぜるやうな調子で言ひ出した。(ニコライは決して何も言ひはしなかつたので。)「無論ですとも、無論ですとも、僕は何もあなたを自分の仲間扱ひにして、迷惑を掛けるために言つたんぢやありません。しかしねえ、今日あなたは恐ろしく肝が立つてますよ。僕は打ち開いた、快活な心を抱いて駈けつけたのに、あなたは一々僕の言葉尻を擡げるんですもの。誓つて置きますが、今日は斷じて尻擦ぐつたいやうな事は言ひません、豫め斷つて置きますよ。そして、あなたの提出なさる一切の條件に、前もつて同意を表明しておきます！」

ニコライは執拗く押し黙つてゐた。

「え？ 何ですつて？ あなた何か言ひましたか？ あゝ、分かつた、分かつた、分かつた、僕は一人合點をしてゐたやうですね。あなたはなにも條件など提出されはしなかつたんです、そして、また提出される氣色もない、さうですとも、さうですとも。いや、まあ安心して下さい。僕だつて自分で分かつてゐますよ。つまり僕などを相手に、そんなものを提出する價值がない、さうでせう？ 僕はあなたの代りに、先廻りして答へて置きます、それは——勿論、例の凡くらの所爲です。凡くらす、凡くらすです……あなた笑つてますね？ え？ どうしたのです！」

「何でもありません。」とニコライはたうとうにやりと笑つた。「僕は今始めて思ひ出したが、實際、僕はいつだつたか君の事を、凡くらだと言つた事がある。しかしそのとき君は居なかつた筈だから、きつと誰か君の耳へ入れた者があるんだらう……とにかく、手取り早く用件に取りかかつて貰つたいね。」

「いや、もう用件に取りかからうとしてゐるんですよ。僕はつまり、日曜日の事でやつて来たんです！」とピョートルは囁り出した。「一体あの日曜日の僕は何者だつたのでせう、どういふ役どころだつたのでせう、あなた何とお考へです？ ほかぢやありません、例のせつちちな凡くらだつたのです。僕は極めて凡くらなやり方で、無理に一座の會話を繰つたのです。けれど、人は僕に何もかも赦してくれました。なぜつて、第一に、僕は天から降つた人間でせう。これは今の町でみんなが勝手に決めて了つたやうです。第二には、あの可憐な話をして、あなたがた一同

を救ひ出して上げたからです、違ひますか、違ひますか？」

「ところが、君の話し方は、みんなの心に疑ひを残して、僕らの狂言や細工を打ちまけて了ふやうな話し方でしたよ。しかも、僕等の間には狂言も何もなかつたし、また僕の方から何一つ、君に願ひした事もなかつたんですがね。」

「さうです、さうです！」まるで悦しさに有頂大になつたやうな調子で、ピョートルは引取つた。「僕はつまり、あなたにさういふ細工を、すつかり氣取つて貰はうと思つてしたんですよ。僕は何よりもまづ第一に、あなたを目やすにして、あゝして一生懸命に狂言を書いたんですよ。なぜつて僕はあなたを釣つて、あなたと妥協したいからなんです。まづ何よりもね、あなたがどのくらゐまで恐れてゐるか、それを僕は知りたかつたんですよ」

「不思議ですね、どうして今日君はそんなに露骨になつたんだらう？」

「怒つちやいけません、怒つちや、そんなに目を光らせないで下さい……もつとも、あなたは別に目を光らせてる譯ぢやない。ところで、どうして僕がこんなに露骨なのか、それが不思議だと言ふんですね？ ほかぢやありません、今ではすべてが一變したからです、終りを告げたからです。もうすべてが過ぎ去つて、砂を被つて了つたからです。僕はあなたに對する考へを變へましたよ。舊い手はもうすつかりお了ひです。僕はもう今さら舊い手であなを煩はしなど決してしません、今度は新しい手です。」

「戦法を變へたんですか？」

「戦法などありやしません。今は萬事あなたの自由意志があるのみです。つまり『諾』^{イエス}と言ひたければ『諾』^{イエス}、『否』^{ノー}と言ひたければ『否』^{ノー}と言つて下さい。それが僕の新しい戦法です。我々仲間の事件などは、あなた自身の命令があるまで、嚙にも出しやしません。あなた笑つてるんですか？ どうかご随意に、僕も自分で笑ひますよ。しかし、僕は今まじめです、まじめもまじめ大まじめです。もつとも、こんな急かちは凡くらにきまつてますがね、さうでせう？ なあに、凡くらだつて何だつていゝです、僕はまじめ、本當にまじめですからね。」

彼は實際まじめ腐つた、以前とはまるで別人のやうな調子になつて、一種特別な昂奮を示しながらかう言つたので、ニコライは好奇の色を浮かべて、相手を見つめた。

「君は僕に對する考へを變へたと言ひましたね？」と彼は訊ねた。

「あなたがシャートフに打たれた後で、手を後ろへ引つ込めたあの瞬間から、すっかり考へを變へて了つたのです、いや、それで澤山です、澤山です、どうかなんにも聞かないで下さい。これより以上、今は何も言ひませんから。」

彼はまるで質問を振り落さうとでもするやうに、兩手を振り廻しながら跳び上がったが、べつだん質問も受けなかつたし、それかと言つて、自分の方から出て行く理由もなかつたので、いくぶん落ち着きながら、また肘椅子に腰を下ろした。

「ついでにちよつと言つて置きますが、」と彼はすぐに喋り出した。「この町ではね、あなたがあの男を殺すだらうなぞと言つて、賭けまでしてゐる連中があるんですよ。だもんだからレムブ

ケーなどは、よつほど警察に注意しようとかゝつたんですが、ユリヤ夫人がとめて了つたのです……いや、澤山、こんな事は澤山です。僕はたゞちよつとお知らせしようと思つて……もう一つついでに言つときますが、僕はあの日すぐレビヤードキン兄妹^{キヤウダイ}を、河むかうへ越させて置きましたよ。ご承知でせう。所書のついた僕の手紙は受取りましたか？」

「あの時すぐ受取りましたよ。」

「あれなどはもう『凡くら』のせゐぢやありません、あれは僕心からあなたのためにした事なんです。よし手際は凡くらであらうとも、その代り誠意が籠つてゐます。」

「いや、結構、或ひはあゝする必要があつたかも知れない……」とニコライは打ち案じ顔にかう言つた。「たゞね、願ひだから、もうこれから僕に手紙を寄越さないで下さい。」

「仕方なしだつたのです、もうあれ一つきりです。」

「ぢや、リプーチンは知つてるんですね？」

「仕方なしだつたのです。しかし、リプーチンはご承知の通り、そんな大膽な事の出来る男ぢやありません……ちよつと斷はつて置きますが、ひとつ仲間の所へ出かけなきやなりませんよ。いや、仲間ぢやありません、あの連中の所です。かう言つて置かないと、またあなたに尻尾を掴まへられますからね。しかし、心配しないで下さい、今ぢやありません、いつかの事です。今は雨が降つてますからね。僕がみんなに知らせ置くと、連中あつまつて來ますよ。そのとき二人で晩方出かけませう。あの連中は、まるで巢の中の鴉の子みたいに、大きな口を開けて待つてま

さあ、一体どんなお土産を持つて来てくれたかと思つてね。どうして、熱心なもんですよ。めいめい何か本を持出して、一争論しようと思つて構へてゐます。ギルギンスキイは四海同胞論者で、リプーチンはフリエ派なんです、たゞし、恐ろしく刑事探偵的傾向に富んだ男ですがね。僕に言はせれば、あの男はある一つの點に於いて、非常に貴重な人間ですが、その他の點に於いては嚴重な監視を要しますよ。それから、最後にひかへてゐるのは、あの耳の長い先生で、あれが自家獨特の主義系統を陳べる筈です。所がどうでせう、あの連中は僕がみんなに冷淡で、かへつて水を注すやうな事をすると言つて、憤慨してゐるんですよ、へー！しかしせひ出かけなきやなりません。」

「君はあの連中に、僕を首領か何ぞのやうに吹聴したんでせう？」出来るだけ無造作な調子で、ニコライはかう打つつけた。

「時に、」まるで聞こえないやうな風をして、急いでもみ消さうとするやうに、彼はかう引き取つた。「僕はブルグラー夫人の所へも二三ど顔を出したが、やはりいろんな事を言はなくちやならない始末になりましたね。」

「察してゐます。」

「いや、あまり察しないで下さい。僕はたゞあなたがあの男を殺す氣色はない、と云つたやうな甘い事を、少しばかり言つたきりです。ところが、どうでせう、お母さんは僕がマリヤ嬢を河向うへ越させたことを、翌日さつそく知つて了はれましたよ。一體あなたが話したのですか？」

「思ひもありません。」

「さうでせう、あなたぢやないと思つてました。あなたでなければ、一たい誰でせう？ をかしないなあ。」

「無論リプーチンですよ。」

「ど、どうして、リプーチンぢやありません。」とピョートルは顔を顰めながら口籠つた。「それは今に僕が洗ひ上げますよ。何だかシャートフらしいところもあるな……が、ばか／＼しい、もうこんな事は止さう！ けれど、これでなか／＼大切なこつたからなあ……ときに、僕はいつも待構へてたんですよ——ほかぢやありませんが、いきなりお母さんが僕に面と向かつて、一ばん肝腎な質問を切り出されはしないかと思ひましてね……あゝ、さう／＼、お母さんは始めのうち毎日々々、恐ろしく氣難かしさうな様子をしてをられました、けふ来て見ると、まるでにこにこものでゐらつしやる。これは一體どうした譯なんでせう？」

「それはね、もう四五日たつたら、リザゼータさんに結婚の申し込をする、けふ僕が母に約束したからです。」突然おもひ掛けない露き出した調子で、ニコライはかう言ひ切つた。

「あゝ、なるほど……そりや勿論……」とピョートルはへどもどした様子で口籠つた。「いま町でマヴリーキイ氏とあの女と婚約の噂があるのを、あなた知つてゐますか？ 全く確かな話なんです。いや、しかしあなたの言ふ通りです。あの女は式の間際にでも、あなたが一口聲をかけさへすれば、さつそく逃げ出して來ますからね。ときに、あなたは僕に腹を立てちやしませんね、

僕がこんな口の利き方をするので？」

「いや、腹なんか立ててゐません。」

「僕もさつきから気がついてゐるんですが、今日はあなたを怒らすのが、恐ろしく難かしいやうですね。僕は何だか氣味が悪くなつてきましたよ。しかし、明日あなたがどんな風にして、顔出しをされるだらうかと、それを楽しんでゐるんですよ。きつといろんな事を準備してらつしやるでせう。ときに、あなたは僕に腹を立てちやゝありませんね、僕がこんな口の利き方をするので？」

ニコライはまるで返事をしなかつた。で、ピョートルはすつかりいら／＼して了つた。

「ときに、あなたはリザエータさんの事を、眞面目でお母さんにさう言つたのですか？」

ニコライはちつと冷やかに相手を見据ゑた。

「はゝあ、なる程、たゞちよつと氣休めにね、さうでせう？」

「もし眞面目だつたら？」とニコライはしつかりした調子で聞き返した。

「どうもしませんさ。かういふ場合よく言ふ事ですが、どうなとご随意に。仕事の邪魔にはなりませんさ（いゝですか、僕は今われわれの仕事と言はなかつたですよ、あなたは我々といふ言葉がお嫌ひですからね。）とここで僕は……僕はどうかだつていゝんです。僕はあなたのためには犬馬の勞を厭ひません、それは自分でもご承知の筈です。」

「さう考へますか？」

「僕は何も、決して何も考へてやしません。」とピョートルは笑ひながら、大急ぎでかう言つ



た。「だつて、僕はちやんと承知してゐますもの——あなたは自分の事はすべて前もつて熟考を重ねた上、はつきりした思案がつけてあるに相違ないんですからね。たゞ僕が言ひたかつたのは、何時いかなる場所に於いても、またいかなる場合に當つても、僕は眞面目にあなたのために、犬馬の勞を盡さうと覺悟してゐる、といふ事なんです。いゝですか、いかなる場合に當つてもですよ、分かりますか？」

ニコライは欠伸をした。

「だいぶ倦きられましたな。」不意にピョートルはまだ眞新しい柔帽を取つて、さも出て行きさうな恰好をしながら立ち上がったが、それでもやはりちつと踏みとどまつて、立ち身のまゝしつきりなしに喋り續けた。そして時々部屋の中を歩き廻りながら、興に乗じると、帽子で膝を叩くのだつた。「僕はまたあのレムブケー夫婦の事で、ちとあなたを笑はしてあげようと思つたんですよ！」と彼は愉快げに叫んだ。

「いや、もう澤山、後でまた。しかし、ユリヤ夫人のご機嫌はどうです？」

「あなた方は誰でも實に如才ないですねえ。あの女のご機嫌なんぞは、あなたに取つて、灰色の猫の仔のご機嫌くらゐにしか思はれない筈なんだけれど、それでもちやんとお聞きになるところが感心ですね。達者ですよ。そして、まるで迷信じみるほど、あなたを崇めてゐます、迷信じみるほど多くのものを、あなたから期待してゐます。例の日曜日の一件に就いては、口を緘してゐますが、あなたがちよつと姿を現はしただけで、すべてがあなたの足下に匍伏するものと、固

く信じてゐます。全くのところあの女は、あなたをどんな事でも出来る人のやうに想像してゐますよ。けれど、今あなたはこれ迄にも増して、謎めいた小説的な人物になつてゐるのです。——實に極めて有利な立場と言はなきやありませんよ。誰も彼も本當になりかねるほど、あなたの出現を翹望してゐます。僕はこんど旅行したでせう——その前もやはり熱心なものでしたが、今はまだまだ盛んです。ときに、もう一ど手紙のお禮を言つとききます。あの連中はみんなK伯爵を怖がつてるのです。どうでせう、あの連中はどうもあなたを間諜扱ひにしてゐるらしいですよ！僕はそれに相槌を打つやうにしてゐるんですが、あなた怒りませんか？」

「構ひません。」

「構はないんですよ。これが先で非常に役に立つんですからね。こゝの連中には一種特別な方式があるんですよ。僕は勿論それに賛成でさあ。ユリヤ夫人を始めとして、ガガーノフもやつぱりそれです……あなた笑つてゐますね？ 實際、僕には術があるんですよ。さんざ法螺を吹き散らして置いて、丁度みんなが求めてゐる頃を見計らつて、出し抜けに一つ氣の利いた事を言つてやる、すると奴さんたち、四方から僕を取巻きます。そこで、僕はまた法螺を吹き始める。でたうとうみなが僕に愛想を盡かして、『才能はあるんだが、どうも天から降つたやうな男でね。』てな事を言ふ。レムブケーは僕を匡正しようと思つて、勤めに就くやうに勧めてゐますよ。ところがね、僕あの男をひどい目に會はすもんだから、つまり、うんと恥を搔かせてやるもんだから、奴さん目ばかりばかりさせてますよ。ユリヤ夫人はかへつてそれを賛成してゐるんです。あゝ、

ついでに言つとききますが、ガガーノフは恐ろしくあなたに腹を立ててゐますよ。昨日ドゥホゾ村で僕に向つて、あなたの事を思ひきり悪く言つてましたつけ。僕はすぐに事實ありのまゝを言つてやりました、と言つても、むしろ本當の事實ありのまゝぢやないんですよ。僕は一日ドゥホゾ村のあの男の家で暮らしましたが、なか／＼立派な領地ですね、いゝ家ですよ。」

「ぢや、あの男は今でもドゥホゾにゐるんですね？」突然ニコライは跳り上がつて、烈しく前の方へ乗り出すやうにした。

「いや、今朝ほど僕をこちらへ送つて来てくれました。僕らは一緒に歸つたのです。」ニコライの刹那の惑亂には、まるで氣も附かぬ様子で、ピョートルは言つた。「おや、僕は本を落つとした。」彼は自分が觸つて落とした本を、屈み込んで拾ひ上げた。「バルザックの女性、挿繪入りだな。」と不意に彼は頁を繰つて見た。「讀んだ事がない。レムブケーもやつぱり小説を書いてますよ。」

「へえ？」とニコライは興味を感じたもののやうに、かう聞き返した。

「露西亞語でね、もちろん内密です。ユリヤ夫人は知つてゐながら、大目に見てゐるのです。のろまではあるが、態度だけはなか／＼立派ですよ。なか／＼よく練りあげたもんでさあ。あの嚴めしい形式、あのどつしりと控へ目な事！我々にも、何かあゝいふ風なものが、必要ぢやないか知ら。」

「君は行政官を讚美しますか？」

「どうして讚美せずにはゐられますか？ 露西亞に於いて唯一の自然な物、完成された物ぢやありませんか……もう止めます、止めます。」彼は急に泡を食つた。「僕はあるの事を言つてゐるぢやありません。もうこんな機微な問題は、一ことも口にしない事にしますよ。ぢや、失敬します。しかし、あはたは何て顔色が悪いんでせう。」

「僕は熱があるんです。」

「そりやさうでせう。お休みなさいよ。ときに、この縣にはスコベッツ(肉慾を去りて天國を得べしとの信仰に基き、去勢を行ふ一宗派)があるさうですね、面白い連中ですよ……が、まあ後にしませう。しかし、もう一つ奇談があるんです。やはりこの郡内に歩兵聯隊がありましてね、金曜日の晩、僕はBで將校連と一緒に一杯やつたのです、そこには我々の友達——コムブルネ分かるでせう？——が三人ゐるんですよ。やがて無神論の話になりましてね、だん／＼に神様をこき下ろして了つたもんでさあ。みんな悦んで、きやつきやつといふ騒ぎなんです。話のついでで思ひ出したが、シャートフの説くところに依ると、露西亞で叛亂を起さうと思つたら、ぜひとも無神論から切出さなきやならないさうです。或ひは眞を穿つてるかも知れませんが。ところが、一人ごまほの特進大尉が、いつ迄もいつ迄もぢつと坐つたまゝ、始終だんまりで一口もものを言はないでゐたが、出し抜けに部屋のまん中へ突つ立つて、まあどうでせう、恐ろしい大きな聲をしてさ、しかもまるで獨りごとのやうな調子で、『もし神様がないとすれば、僕だつてもう大尉でも何でもありません。』と言つたかと思ふと、いきなり帽子を取つて兩手を擴げると、そのまゝふいと部屋を出て了つたぢやありませんか。」

「かなり纏つた思想を表白してゐるね。」ニコライはまた三度目の欠伸をした。

「さうかしら？ 僕は合點が行かなかつたから、あなたに聞かうと思つてたんですよ。ところで、まだ何か話す事はなかつたか知らん。あのシュビグーリンの工場は面白い所ですね。あそこにはご承知の通り、五百人の職工がゐますが、まるで虎刺拉菌コレラの繁殖場でさあ。何しろ十五年間、まるで掃除といふ事をしないんですからなあ。あそこぢや職工の工賃をかするんですよ。工場主の商人達は、みんな揃つて百萬長者でさあ。ところで、僕まじめで言ひますが、職工の中にはインターナショナルの何たるやを、解したのもゐるんですよ。おや、あなたにたつと笑ひましたね？ いや、今に分かりますよ、まあもう少し、ほんのもう少し待つて下さい！ 僕は前にも一ど待つて下さいと言ひましたが、今また改めて頼みますよ。その時になつたら……いや、失禮、もう言ひません、僕は何もあの事を言つた譯ぢやありませんよ。さう顔を顰めないで下さい。ぢや、失禮します。おや、僕はどうしたんだらう？」と不意に彼は途中から引つ返した。

「まるでつきり忘れてゐた、しかも一ばん大切な事だ。僕たつたいま聞いたんですが、僕らの箱トランクが、彼得堡から着いたさうですね。」

「と言ふと？」とニコライは合點が行かないで、ぢつと相手を見つめた。

「つまり、あなたの箱トランクです、あなたの荷物です。燕尾服や、洋袴スボンや、肌衣が、着いたさうぢやありませんか？ 本當ですか？」

「さう、さつき何だかそんな事を言つてたつけ。」

「では、今すぐ、いけないですか？」
「アクレセイに聞いてご覧なさい。」

「いや、明日にしませうね、明日に？ あの中にはあなたの物と一緒に、僕の背廣と、燕尾服と、それから洋袴が三着はいつてる筈です。ほら、あなたの紹介で、シャルメルで作った分ですよ、憶えてゐますか？」

「噂によると、君はこゝでだいぶん紳士ぶつてゐるつてね？」ニコライはにやりと笑つた。「調馬師に就いて馬の稽古をするといふのは、本當の事ですかね？」

ピョートルはひん曲つたやうな薄笑ひを浮かべた。

「ねえ。」と彼は妙に慄へを帯びた、とぎれ／＼な聲で、突然せき込みながら、かう言つた。

「え、ニコライ・フセラーロドゴツチ、お互ひに個人的にわたる話は、やめようぢやありませんか、え、今後永久にね？ 勿論、あなたが可笑しいと思つたら、いくら僕を輕蔑なすつてもかまはないですが、しかし暫くの間は個人的にわたる話を、しないやうにした方がよかありませんか、え？」

「よろしい、ぢや僕はもう言ひますまい。」とニコライは答へた。

ピョートルはにこりと笑つて、帽子でぽんと膝をたゞき、足をちよつと踏み變へて、以前と同じ姿勢を取つた。

「だつて、今こゝの人は僕の事を、リザゼータさんに對するあなたの競争者のやうに言つてゐる

んですからね、僕だつてちつとは、様子を構はん譯に行かないぢやありませんか。」と彼は聲を立てて笑つた。「しかし、誰がそんな事をあなたに密告するんだらう。ふむ！ ちやうど八時だ。さあ、そろそろ出かけませう。僕はブルワラ夫人の所へ寄る約束をしたけれど、すつぽかす事にしませう。あなたもお休みなさい。さうすれば、明日はもつと元氣が出ますよ。そとは雨が降つて、まつ暗だけれど、なに大丈夫、僕には馬車があります。だつて、こゝは夜になると、往來が物騒ですからね……あゝ、それはさうと、ちか頃この町の近邊を、囚人のフェーヂカといふのがうろ／＼してゐるんですよ。西伯利から逃げ出したんですがね、十五年まへ、うちの親父が兵隊に擲き賣つて、金を取つた下男なんですよ。なか／＼面白い代物しろものでしてね。」

「君は……その男と話して見ましたか？」ニコライは急に視線を上げた。

「話しましたよ。僕が目をつけたら、隠れつこはありませんよ。何でも平氣と言つた代物です、全く何でもね。勿論ぜに金づくですが、それでも一種の信念を持つてゐるんですよ、無論、人物相當のものですがね。あゝ、さう／＼、もう一つついでに言つときますが、もしあなたがさつき仰しやつた計畫、あのリザゼータさんに關係する計畫が、眞面目な話でしたら、僕もやはり何事も辭せずといふ代物です。もう一ど念のために言つときます。どんな性質の仕事だらうと、あなたのためには悦んで引き受けます……え、どうしたのです？ あなた棒でも引つ擱まうとなさるんですか？ あゝ違つた、棒ぢやなかつた……まあ、どうでせう、僕はあなたが棒を捜してゐられるのかと思ひましたよ。」

ニコライはべつに何も捜しもせず、何一つ言ひもしなかつたが、實際、一種奇怪な痙攣を顔に浮かべながら、突然ひよいと腰をあげたのである。

「それから、もしガガーノフに就いても、何かあなたに必要な事があつたら、」今度はもう露骨に文鎮を願でしやくりながら、ピョートルはたゞき附けるやうに言った。「その時は僕が一切ひき受けていゝです。大丈夫、僕を出し抜くやうな事はなさらんでせうね。」

彼は返事も待たないで、出し抜けにふいと出て行つた。が、またもう一ど戸の隙間から頭を突き出した。

「僕がこんな事を言ふのは、」と彼は早口に言つた。「たとへば、例のジャートフです、あの男だつてこの間の日曜に、あなたの傍へのごくやつて来て、命賭けの危い仕事をする権利なんか、決して持つてゐないと思ふからです、さうぢやありませんか？ 僕はこれをあなたに承認して貰ひたいんですよ。」

彼は再び答へを待たないで、消えて了つた。

四

事によつたら、彼は自分の姿を消す時に、「きつとニコライは一人きりになつたとき、兩の拳を固めて、壁をどん／＼擲り始めるに相違ない」とこんな事を考へて、出来る事なら、ちよいとその様子がのぞいて見たい、くらゐに思つたかも知れない。もしさう思つたとしたら、彼は非常な

失望を感じたに違ひない——ニコライは依然として落ち着き拂つてゐた。二分間ばかり、彼は元のまゝの姿勢で、卓の傍に立つてゐた。見たところ、非常に考へ込んでゐるらしい。が、間もなく弛緩した冷たい微笑が、その口邊に壓し出された。彼は元の席——片隅の長椅子へ腰を下ろすと、疲れ切つたやうに目を閉ぢた。手紙の端は相變らず文鎮の下からのぞいてゐたが、彼はそれを直すために、身じろぎさへしなかつた。

間もなく、全く彼は忘我の境へ落ちて了つた。

ブルグーラ夫人、はこの數日來心配のあまり、身も細るやうな思ひをしてゐたが、もうたうと我慢がし切れなくなつた。ピョートルが寄つて行くと約束しながら、その約束を守らないで去つて了つた後、指定されてゐる時間とは違ふけれど、勇を鼓して、自分からニコラスの様子を見に行かうと決心した。もういゝ加減にして、何かきつぱりした事を言つてくれさうなものだ、かういふ心持が絶えず夫人の頭に浮かぶのであつた。彼女はさき程と同じやうにほと／＼と靜かに訪つたが、今度もやはり返事がなかつたので、自分で戸を開けた。ニコラスが何だかあまり靜かに坐つてゐるので、夫人は胸を轟かしながら、そうつと長椅子へ近づいて見た。ニコラスがこんなに早く寢入つた上、かうしてきちんと身動きもせず、坐つたまゝ寢てゐられるのが、何だか妙に感じられた。そればかりか、寢息さへほとんど分らないくらゐだつた。彼の顔は蒼ざめて、険しい表情を帯び、凍りついたやうにびくりともしなかつた。少し眉根を寄せて、八の字に顰めてゐるところなど、まるで息の通つてない蠟細工にそっくりだつた。夫人は呼吸さへも憚りなが

ら、二分間ばかりわが子の傍に立ち盡くしてゐたが、とつぜん恐怖の情が彼女の全身を襲うた。彼女は爪立ちで部屋を出ながら、戸口のところで立止つて、手早くわが子に十字を切ると、誰の目にも觸れないで、その場を去つて了つた。また新たな重苦しい感觸と、異つた憂愁を抱きながら。

彼は長い間——一時間以上も眠り通した。しかも始めから了ひまで、この痲痺したやうな状態が續いた。顔面筋肉一本うごくでもなければ、體ぢうどこ一つぴくりとする様子もなかつた。眉は依然として氣難かしげに、八の字に寄せられたまゝだつた。もし假りにブルグーラ夫人が、もう三分間こゝに残つてゐたら、必ずやこの昏睡病的な不動の齋らす、壓しつけられるやうな印象に堪へ切れないで、わが子呼び醒ましたに相違ない。けれども、彼は不意に自分ではつと目を開けた。そして、やはり身じろぎもしないで、さももの珍しげに、まじく／＼と部屋の一隅を見つめながら、十分間ばかりぢつと坐つてゐた。その様子は、何か非常に變つたものが目に止つたか何ぞのやうだつたが、そこには格別これといふ珍しいものも、變つたものもなかつたのである。たうとう大きな掛時計が靜かな、厚みのある音を立てて一つ鳴つた。彼はいくぶん不安げな面もちで、首をねぢ向けて文字盤を見ようとしたが、ちやうどそのとき廊下へ通ずる後ろ側の戸が開いて、侍僕のアレクセイが姿を現はした。彼は片手に冬の外套と、襟巻と、帽子を持ち、いまま一方の手に手紙を載せた銀盆を捧げてゐた。

「九時半でございます。」と彼は靜かな聲でかう言つて、持つて來た衣類を片隅の椅子の上に乗せ、手紙の載つた盆を差し出した。それは、鉛筆で二行ばかり走り書したまゝ、封もしてない小さな紙きれだつた。この手紙にざつと目を通すと、ニコライもやはり卓から鉛筆を取り、手紙の端に二字ばかり書き添へて、また元の盆へ戻した。

「僕が出たらすぐ渡すんだよ。さあ着せてくれ。」長椅子を離れながら、彼はかう言つた。ふと軽い天鵞絨の背廣を着てゐるのに氣がつくと、彼はちよつと考へた後、別な羅紗のフロツクを出すやうに云ひつけた。それは、少し改つた夜分の訪問に用ひる物だつた。漸くすつかり着替へを終つて帽子を被ると、彼は母夫人の入つて來た戸口を鎖して、文鎖の下に隠してあつた手紙を引き出し、アレクセイを従へて、無言のまま廊下へ出た。さうして、その狭い石の裏梯子から眞つすぐに、庭に面してゐる出入り口へ下りた。その隅には、角燈と大きな蝙蝠傘が用意してあつた。

「どうも恐ろしい大雨で、どの町もどの町も、大變なぬかるみでございますが。」主人の夜歩きを、遠廻しに思ひ止らせようとする、最後の試みと言つた體裁で、アレクセイはかう注意した。

けれど主人は傘を擲げて、穴藏のやうに暗い、底まで濕り氣の浸み込んだ、ぐしよ／＼の古い庭へ、言葉もなく出て行つた。風はごろ／＼と鳴つて、半分裸にされた立木の梢を揺すぶつてゐた。細い砂利路はふは／＼して、迂りさうだつた。アレクセイは今まで着てゐた燕尾服のまゝで、

帽子も被らずに、角燈をかざして、三步ばかり前を照らしながらついて行つた。

「見つかりやしないかね？」突然ニコライはかう聞いた。

「窓から見えは致しません、それに、もう前からよつく見て置きましたで。」と下僕は小さな聲で、正確に間を置きながらかう答へた。

「お母さんはお休みかね？」

「二三日この方のお習慣で、正九時に部屋しむらの戸をかけてお了ひになりました。でございますから、奥様に知れる氣づかひは決してございません。いく時ころにお待ち申したら宜しうございませう？」彼は思ひ切つて、つけ足りにかう聞いた。

「一時か一時半だ、二時より遅くはならない。」

「承知いたしました、」

二人とも誦誦そらで覚えてゐる庭を、うねりくねつた細徑つたひに、ぐるりと廻つて、石塀の傍まで辿り着いた。そして、塀の一番はじめのところに、小さな耳門みみどを捜し出した。これは狭い淋しい横町へ通ずる出口で、ほとんどいつも閉めきりになつてゐたが、その鍵は今アレクセイの手にあつた。

「戸が軋みはしないだらうね？」再びニコライがかう聞いた。

けれど、アレクセイの報告するところによると、戸にはきのふ油を注したばかりだし、『今日もやつぱり注して置いた』との事だつた。彼はもう今の間に、ぐつしより濡れて了つてゐた。戸を

開き終ると、アレクセイは鍵をニコライに渡した。

「もしあまり遠方へお越しになるのでございましたら、ちよつとご注意申し上げますが、こゝの人間どもはなかく油断がなりませんでな、殊に淋しい横町をお通りになる時は、一層ご用心が肝要でございます。それに、河向うと來たら、なほ更でございますよ。」彼は我慢し切れなくなつて、も一度かう言つた。彼は昔ニコライのおもひ役として、抱き歩きした事のある老僕だつた。人間が眞面目で厳格な性質なので、好んで聖書の類を人に讀んで聞かせて貰つたり、自分でも讀んだりしてゐた。

「大丈夫だよ、アレクセイ。」

「どうか神様が、あなたにお恵みを垂れて下さいますやうに……と申しても、たゞあなたが善い事をなさる時だけの話でございますよ。」

「何だつて？」もう横町へ一步ふみ出しながら、ニコライはかう言つて、足を止めた。

アレクセイはきつぱりと今の言葉を繰り返した。彼は今まで決して自分の主人に向つて、こんな言葉づかひをする男ではなかつたのである。

ニコライは戸を閉めて、鍵を衣囊へ入れ、一步ごとに三四寸づゝもぬかるみへ踏み込みながら、横町を向うの方へ歩き出した。やがて石を登んだ、長いがらんとした通りへ出た。町の案内は掌たしなを指すやうに明かだつた。けれども、ボゴヤーヴレンスカヤ街はまだ遠かつた。やつとの事で、彼が黒く古びたフィリップポフの持家の、閉め切つた門の外へ立止つた時は、もう十時を

過ぎてゐた。階下の部屋は、レビヤードキン兄妹の引越しと共に空家になつて、窓はすつかり釘づけになつてゐたが、シャートフの住んでゐる中二階には、灯影がさしてゐた。門に呼鈴がなかつたので、彼は手で門の戸をたゞき始めた。と、窓が開いて、シャートフが往來へ首を出した。しかし恐ろしい闇なので、黑白もわかぬくらゐだつた。シャートフは長いあひだ、一分間ぐらゐちつと見透かしてゐた。

「あゝ、あなたですか？」不意に彼はかう訊ねた。

「僕です。」と待ちも設けぬ客がかう答へた。

シャートフはばかりと窓を閉ぢて、下へおり、門の鍵をはづした。ニコライは高い閤を跨ぐと、一こともものを言はないで、その傍を通り抜け、眞つすぐにキリーロフの住まつてゐる、離れの方へ通つて行つた。

五

離れの方は、どこもかしこも鍵が掛かつてゐないばかりか、ろく／＼閉めてもなかつた。玄關もその次の二間も眞暗だつたが、キリーロフの借りてゐる一ばん奥の部屋には（そこで彼はいつも茶を飲んでゐた）、灯がさしてゐた。そして、何だか奇妙な叫びや笑ひ聲が洩れて来る。

ニコライは灯りのする方へ歩いて行つたが、中へ入らないで、閤の上へ立止つた。茶の道具が卓の上に置いてあつた。部屋の眞ん中には家主の親類にあたる老婆が立つてゐた。頭には帽子も

頭巾も被らないで、着物もたゞちよつとした袴の上に、兎の短衣を着込んでゐるばかり、靴も素足にひつ掛けてゐた。老婆の手には、シャツ一枚きりで、小さな足を剥き出しにした、生後一年半ばかりの赤ん坊が抱かれてゐた。たつたいま揺り籠から下ろしたばかりらしく、頬がかつかと赤く火照つて、白つぽい髪がくしゃ／＼に亂れてゐる。つい今しがた大泣きに泣いたと見えて、まだ涙が目の下に溜まつてゐたが、丁度この瞬間、小さな兩手を伸して、ぱちりと鳴らしながら、幼い子供が誰でもするやうに、しゃくり上げて笑つてゐた。その前でキリーロフが大きな赤い護謨毬を、床へ抛りなげてゐるのだつた。毬が天井まで跳ね上つて、また下へ落ちて来ると、子供は『まい、まい。』と叫んだ。キリーロフは『まい』を掴まへて、子供へ渡した。すると、こちらには覺束ない小さな手で、今度は自分で投げるのであつた。キリーロフはまた駈け出して、それを拾つてやつた。その中にたうとう『まい』は戸棚の下へ轉がり込んだ。

「まい、まい！」と子供は叫んだ。

キリーロフは床へ坐つて、腹這ひになりながら、戸棚の下から手で毬を取り出さうと努めた。ニコライは部屋の中へ入つた。子供は彼の姿を見ると、老婆にひしと獅噛みつきながら、いきなり子供らしい長い泣き聲を立て始めた。老婆はさつそく部屋の外へ連れ出して了つた。

「スタヴローギンさん？」手に毬を持つて、床から起き上がりながら、些かも驚く色なくキリーロフはかう言つた。「お茶を飲みますか？」

彼はすつかり體を起こした。

「結構ですね、もし冷たくなかつたら。」とニコライは言つた。「僕すつかりびしよ濡れだ。」
 「濇いですが、いや、熱いくらゐるです。」とキリーロフは得意さうにかう引取つた。「まあ、お
 掛けなさい。君、泥だらけですね。いや、構はない、僕あとで床ゆかを濡れ雑巾で。」

ニコライは席に着いた。なみ／＼と注いだ茶碗を、ほとんど一息に飲み干した。
 「まだ？」とキリーロフが聞いた。

「有難う。」

今まで坐つてゐなかつたキリーロフは、早速むかひ合せに座を占めると、問ひを發した。

「君は何用で來たのです？」

「ちよつと用事があつて。君この手紙を讀んで見てくれ給へ、ガガーノフから來たんです。覺
 えてゐますか。いつか彼得堡で君に話した事があつたでせう。」

キリーロフは手紙を取つて讀み了ると、また元の卓へ載せて、待ち設けるやうに相手を見つめ
 た。

「このガガーノフといふ男は。」ニコライは説明にかゝつた。「君もご承知の通り、一月ばかり
 前に、生れて始めて彼得堡で會つたんです。僕らは二三ど集りの席で、顔を會はしたばかりな
 んですがね、紹介もされなければ、言葉を交はした事もない癖に、何と思つたか、僕に思ひきり
 失敬な眞似をするんです。この事は當時君に話したけれども、たゞ一つ君の知らない事がある。
 あの男は僕よりさきに彼得堡を立つたが、その時だし抜けに一通の手紙を寄越した。もつとも、

この手紙のやうな事はないけれど、やはり思ひきつて無作法きはまるものなんです。第一、そん
 な手紙を書く氣になつた動機が、まるで説明してない。それが何より奇妙なんです。僕はその
 時さつそく返事をやつた、やつぱり手紙でね。そして、極めて腹藏のない調子で、かう言つてや
 つた——あなたはたぶん四年前こゝの俱樂部で起つた、ご尊父に關する出來事を根にもつて、わ
 たしに腹を立ててるんでせう。その事ならば、出来る限り謝罪の方法を講ずる覺悟です。もつと
 も、僕の行爲がべつに悪意あつての事ではなく、單に病氣のさせた業に過ぎない、といふ事を前
 提にしたのです。どうか自分の謝罪を聞いた上で、思案をしてくれと頼んでやりました。けれど
 あの男は返事もよこさないで、立つて了つたのです。ところが、今こゝであの男の噂を聞いて見
 ると、まるで氣違ひのやうになつてるさうです。あの男が衆人稠座の前で發した僕に對する評言
 を、三つ四つ耳にしたが、もう純然たる悪罵で、おまけにびつくりするやうな言ひがよりなん
 ですからね。ところが、たうとう今日の手紙が來ました。こんな手紙を貰つた者は、今までかつて
 一人もないだらう、罵詈雑言を盡した上に、『貴様の擲られたしやつ面』と言つたやうな文句まで
 使つてあるんだからね。僕は、君が介添人たるの勞を煩わづらはれないだらうと思つて、やつて來たん
 ですよ。」

「君は、こんな手紙を貰つたものは一人もないと言ひましたが、」とキリーロフが言つた。「誰
 でも夢中になつたら、やり兼ねませんよ。こんな事を書いたのは、二人や三人ぢやない。プーシ
 キンもヘッケルン(プーシキンを決闘で倒した佛國の外交官)にあてて書きました。宜ろしい、行きませう。で、どうするん

です？」

ニコライの説明によると、彼は明日にもさつそく決行したいと望んでゐる。が、その前に是非もう一ど謝罪を申し込んでほしい。いや、もう一ど謝罪の手紙を約束しても構はない。たゞしがガーノフの方からも、今後二度と手紙を寄越さない、といふ約束をしなければならぬ。今まで受け取つた手紙は、まるでなかつたものと見なして置かう、とかう云ふのであつた。

「それぢや讓歩し過ぎる。あの男が承知しないでせう。」とキリーロフが言つた。

「僕がこゝへ來たのは、何よりも第一に、君がかういふ條件を先方へ傳へてくれるかどうか、それを聞きたいがためなんですよ。」

「僕は傳へます、人の事ですから。しかし、あの男が承知しません。」

「承知しない、それは僕も知つてゐます。」

「あの男は決闘したいのです。で、どうして闘ふんです？」

「つまり、そこなんです。僕は是非あす中に、すつかり片をつけて了ひたい。朝の九時ごろ君あすこへ行つてくれ給へ。あの男は君の言ふ事を聞いて、不同意を唱へる。そして、自分の方の介添人に君を引き合わせる——それがまあ、十一時になるでせう。君はその男と、萬端の手筈を決めて下さい。それから一時か二時には、双方指定の場所へ出合はなくちやならない。君お願ひだから、さういふ風にしてくれ給へ。武器は無論ピストル。そして、特にお願ひがあるんです。二つの發射線の間は十歩として、われ／＼二人をその線からおの／＼十歩の距離に立たして下さい。」

い。われ／＼は一定の合圖で近づく事にしませう。勿論、どちらも發射線へ行き着かなくちやならないけれど、發射はその前に、歩きながらやつても構はない。まあこれくらゐなもんです。僕のお考へてるのは。」

「發射線間十歩の距離は近すぎます。」とキリーロフが言つた。

「ぢや十二歩、それ以上だめです。君にも分かるでせうか、あの男は眞面目に決闘を望んでゐるんです。君、裝填が出來ますか？」

「出來ます。僕ピストルを持つてゐます。僕は、君が一度も僕の拳銃を使つた事がないといふ事を、先方へ誓つて置きます。先方の介添人にも、やはり自分の拳銃の事をね——さう誓はせませう。そこでこの二組の拳銃の中から、丁半をやつて見て、先方のかこつちのか決める。」

「結構。」

「拳銃を見ますか？」

「さうですね。」

キリーロフはまだ片づけないうで、片隅に置いてある鞆の前へ蹲んで（彼は必要に隨つてこの中から、いろんな物を引つ張り出すのだつた。）内部に紅い天鵞絨を張つた棕櫚の箱を、底の方から引き出した。中からは洒落た、恐ろしく高價い拳銃が一對でて來た。

「すつかり揃つてる。火薬も、彈丸も、彈藥筒もね。僕はまだ連發拳銃を持つてますよ。ちよつと待つて下さい。」

彼はまたもや鞆の中へ手を突つ込んで、亜米利加製の六連發銃の入つた箱を引き出した。

「君はずるぶん拳銃ピストルを持つてますね、しかも立派なのばかり。」

「全く。非常に。」

ほとんど乞食のやうな貧しい境涯にゐるキリーロフが（もつとも、自分の貧しさに一度も気がつかないでゐたけれど）、今夜はさも自慢さうに、高價な武器を持出して見せるのだつた。それは言ふまでもなく、非常な犠牲を拂つて、手に入れたものに相違ない。

「君は今でもやはり、あの通りな考へでゐるんですね？」東の間の沈黙の後、スタヴローギンはいくぶん大事を取るやうな調子で、かう聞いた。

「あの通りです。」とキリーロフはすぐに聲の調子で、問ひの意味を察して了つたので、言葉みじかにかう答へながら、卓から拳銃を片づけにかゝつた。

「いつ？」再び幾分の間を置いて、前よりも一さう大事を取りながら、スタヴローギンはかう訊ねた。

キリーロフはその間に、箱を兩方とも鞆へしまつて置いて、もとの席へ腰を下ろした。

「それはご承知の通り、僕の意志できまる譯ぢやない。人がきめてくれます。」いくぶん問ひを持つてあますやうな風つきだつたが、それと同時に、この先どんな事を問ひ掛けられても、躊躇なしに答へさうな様子を示しながら、彼はかう呟いた。

彼は何となく穩かな、人のいゝ、優しい感情を抱きながら、光りのない黒い目で、あからめも

せずスタヴローギンを見つめるのであつた。

「僕にも無論わかります——ピストル自殺。」長いこと三分ばかり、もの思はしげに黙り込んでゐた後、ニコライは心もち眉を顰めながら、再びかうきり出した。「こいつは僕もときどき自分で考へて見ましたよ。するとね、いつも何かかう、新しい考へが湧いて来るんですよ。つまり非常に凶悪な事、でなければ非常に恥づかしい事……と言つて、非常な恥辱になる事なんだね。しかも思ひきつて陋劣な、そして滑稽な事をやつつけるんだね。そして……人がそのために千年萬年も覚えてゐて、千年萬年も爪弾きする、と假定させよう。そのとき忽然として『顯顯こゝろにどんと一つ打込んだら、もう何一つ残りやしないぢやないか。』と、かういふ想念が浮かんだらどうでせう。さうしたら、人が何と思はうと、千年萬年つまはじきしようと、一向かけ構ひはないぢやありませんか、さうでせう？」

「君はそれを新しい思想と言ふんですか？」ちよつと考へた後、キリーロフはかう言つた。

「僕は……敢てさういふ譯ぢやない……たゞ嘗てこの事を考へた時に、全く新しい思想だと感じたのです。」

「新しい思想だと感じた？」キリーロフは鸚鵡返しに言つた。「それはいゝ事です。さういふ思想は澤山あります。いつでもある、それがとつぜん新しくなる——それは本當です。僕もこの頃いろんな事が、まるで始めて見るやうに目に入りますよ。」

「假りに君が月の世界に住んでゐて、」相手の言ふ事には耳を假さず、自分の思想の糸を手繰り

ながら、スタヴローギンはかう遮つた。「まあ、假りに君が月の世界で、ありとあらゆる滑稽醜悪な事をし盡くしたとする……ところが、君はこの地球に居を移しながら、月の世界で君の名を千年も万年も、永久に月の存在の續く限り、笑つたり爪弾きしたりしてるのを、ちやんと百も承知してると假定しよう。しかし、君はもうこゝにゐて、こゝから月の世界を眺めてるんだからね、君が向うで何をしたにしろ、また向うの人間が千年万年つまはじきするにしろ、そんな事はここにある以上、何の懸けかまひがあるものですか、さうぢやありませんか？」

「知りません。」とキリーロフは答へた。「僕は月の世界にゐた事がありませんからね。」いささかの皮肉もなく、たゞ單なる事實表白のために、彼はかう言ひ足した。

「あのさつきの誰の子ですか？」

「あの婆さんの姑がよそから來たんです。いや、姑ぢやない、嫁だ……まあ、どつちでもいゝ。三日まへにね。ところが、子供と一緒に病氣して臥てるんです。子供は夜になると、無性に泣くんですよ、腹痛でね。母親は寝てる、せう事なしに婆さんが連れて來るんです。で、僕は毬をもつてね……毬は漢堡から持つて來ましたよ。漢堡で買ったんです、投げたり、つかまへたりしようと思つて……脊中を丈夫にしますからね……女の子です。」

「君、子供は好きですか？」

「好きです。」とキリーロフは答へたが、それはかなり氣のない調子だつた。

「ぢや、君は生活も愛してますね？」

「えゝ、生活も愛してます、それがどうしたのです？」

「でも、自殺を決心してるとすれば。」

「それがどうしたんです？ なぜそれを一緒にするんです？ 生活は生活、あれはまたあれです。生活はあります。しかし、死といふものはまるでありやしない。」

「君は未來の永世を信じるやうになつたんですか？」

「いや、未來の永世ぢやない、この世の永世です、一つの瞬間がある、その瞬間へ到達すると、時は忽然と止つて了ふ、それでもう永世になつて了ふのです。」

「君はさういふ瞬間へ到達し得ると思ひますか？」

「えゝ。」

「それはどうも現代ぢや不可能らしいね。」同じく些かの皮肉もなく、ニコライはかう答へた。「黙示録の中で、一人の天使が、時はもはやなかるべし、と誓つてゐますがね。」

「知つてゐます。あれは全く非常に正確な言葉です。明晰で的確です。完全な一個の人間が幸福を獲得した場合、時は最早なくなつて了ひます。必要がないですものね。非常に正確な思想です。」

「一体どこへ隠すんでせう？」

「どこへも隠しやしない。時は物件ぢやなくて、思念ですからね。心の中で消えて了ふ。」

「古い哲學の決り文句だ、開闢以來、相も變らないもんだね。」何だか氣難かしげな憐憫の色

を浮かべながら、スタヴローギンはかう呟いた。

「相も變らない！ 開闢以來、相も變らない、ほかに決してありやうがないです！」まるでこの観念の中に、立派な勝利でも含れてゐるやうに、キリーロフは目を輝かせつつかう遮つた。

「キリーロフ君、君は非常に幸福らしいですね？」

「ええ、非常に幸福です。」まるで平凡な日常茶飯事か何ぞのやうに、彼はかう答へた。

「しかし、君はつい近ごろ非常に悲觀して、リプーチンの事で腹をたててたぢやありませんか？」

「ふむ！……しかし、今は人を罵倒したりなんかしませんよ。あの時はまだ自分が幸福な事を知らなかつたんです。君は葉を見た事がありますか、木の葉を？」

「ありますよ。」

「僕はついこのあひだ黄色いを見ましたよ。もう青いところは少なくなつて、周圍が腐れかゝつてるんです。風に飛ばされたんですね。僕は十才ばかりの頃、冬わざと目を塞いで、葉脈の青とくつきりした、木の葉を想像して見た。太陽がきら／＼照つてるんです。それから目をあけて見たとき、何だか本當にならないやうでした。だつて、實にいゝんですものね。で、僕はまた目を塞ぐ。」

「それは何です、譬喩でもあるんですか？」

「い……いや、なぜ？ ぼく譬喩なんか。僕はたゞ木の葉……ほんの木葉の事を言つただけ

です。木の葉はいゝもんです。何もかもいゝです。」

「何もかも？」

「何もかも。人間が不幸なのは、たゞ自分の幸福な事を知らないからです。それだけの事、斷じてそれだけです、斷じて！ それを自覺した者は、すぐ幸福になる、一瞬の間に。あの姑が死んで、女の子がたつた一人取り残される——それもすべていゝ事です。僕は忽然としてそれを發見した。」

「人が饑ゑ死しても？ 女の子を辱しめたり、けがしたりしても——それでもやつぱりいゝ事なんですか？」

「いゝ事です。人が子供の敵打に脳味噌をたゞき潰しても、それでもやつぱりいゝ。また脳味噌をたゞき潰さなくても、それもやはりいゝ事です。すべてがいゝ、すべてが！ すべてがいゝと云ふ事を知つてる者は、すべてがいゝのです。もし世の中の人、自分たちに取つてすべていゝといふ事を知つたら、すべてがよくなるんだけれど、彼等がすべて善なりといふ事知らない中は、彼等に取つてもいゝ事はないでせう。それが全部の思想です。もうその上ほかの思想なんかありやしない！」

「君はいつ自分がそんなに幸福だつて事に気がつきました？」

「先週の火曜日、いや、水曜日です。あの時はもう水曜になつてたつけ。夜中だつたから。」

「どういふ動機で？」

「憶えてるませんか。たゞひよつこり。何でも部屋の中を歩き廻つてゐたつけ……まあ、そんな事はどうでもいい。僕は時計をとめちやつた。何でも二時三十七分のところでしたつけ。」

「時は止まらざるべからず、といふ象徴ですか？」

キリーロフは黙つてゐた。

「世間の人は好くない。」とつぜん彼はまたかう言ひ出した。「それは、自分たちのいゝ事を知らないからです。もしそれを悟つたら、娘の子を辱しめなどしなくなるでせう。みんな自分のいゝ事を知らなくちやならない。さうすれば、みんなよくなるです、みんな一人残らず。」

「ところが、君はそれを悟つたから、君はいゝ人なんですか？」

「僕はいゝですよ。」

「もつとも、それは僕も同意ですね。」とスタヴローギンは眉を顰めながら呟いた。

「すべて善しといふ事を教へる人は、この世界を完成する人です。」

「それを教へた人は磔刑はりつけにされたつけね。」

「その人は必ずやつて来る。その名は人神じんじん。」

「神人？」

「人神、そこに區別がありますよ。」

「ときにこの燈明をつけるのは、君ぢやありませんか？」

「さう、これは僕がつけたんです。」

「信心してるんですか？」

「あの婆さん、燈明をあげるのが好きで……ところが、今日ひまがなかつたもんだから。」とキリーロフは呟いた。

「君は自身で祈禱しませんか？」

「僕はすべてのものに祈禱します。ほら、蜘蛛が壁を這つてゐるでせう。僕はぢつと見てるうちに、その這つてゐるのが有難くなる……」

彼の目は再び燃えてきた。彼は始終しつかりした撓みのない目つきで、ぢつとスタヴローギンを見つめてゐた。スタヴローギンは眉を顰めながら、氣難かしさうに相手を注視してゐたが、その目つきにはいささかの冷笑も見えなかつた。

「ぼく誓つてもいゝですよ、今度ぼくが来る時には、君はもう神を信じるやうになつてゐるか。立ち上つて帽子を取りながら、彼はかう言つた。

「なぜ？」キリーロフも腰を浮かした。

「もし君がね、自分で神を信じてるといふ事を悟つたら、君は實際信じたでせうよ。しかし、君はまだ神を信じてるといふ事を悟らないから、つまり信じてゐない。」とスタヴローギンはにやりと笑つた。

「それは違ふ。」ぢつと考へ込んだ後、キリーロフはかう答へた。「それは僕の思想を逆にしたので。才子流の駄洒落です。スタヴローギン、君が僕の生涯にどんな意義をもつてゐるか、

それを思ひ出して下さい。」

「失敬、キリーロフ。」

「夜分にまた来て下さい。いつ？」

「一たい君は明日の事を忘れてやしませんか？」

「あゝ、忘れてた。大丈夫、寝すごしやしません。九時ですね。僕はいつでも、自分の起きた時に起きられます。寝る事に、七時だぞと言つて置くと、七時に目が醒める。十時といふと、十時に目が醒める。」

「君は風變りな特色をもつてますね。」スタヴローギンは相手の蒼ざめた顔を見つめた。

「ぼく行つて門を開けませう。」

「それには及びません。シャートフが開けてくれます。」

「あゝ、シャートフ。ぢや、左様なら。」

靈

悪

六

シャートフの住んでゐるがらんとした家の上り口は、鍵が掛けてなかつた。けれど廊下へ入つて見ると、まるで眞の闇だつた。スタヴローギンは手探りで、中二階へ登る階段を捜し始めた。と、急に上の方の戸が開いて、灯がさした。シャートフは自分では出て来ないで、部屋の戸だけ開けたのである。ニコライが部屋の闕に立つたとき、片隅の卓の傍に、待ち心で立つてゐる主人

を見つけた。

「用事があつて来たんですが、會つてくれますか？」と彼は闕の上から聞いた。

「入つてお坐んなさい。」とシャートフは答へた。「まあ、戸を閉めて下さい。いや、僕自分でませう。」

彼は戸に鍵を掛けて、卓の傍へ引つ返すと、ニコライの眞正面に腰を下ろした。彼はこの一週間にだいぶ瘦せが見えた。そして、今は熱でもありさうな風であつた。

「君は僕を苦しめましたね。」と彼は伏し目勝ちで、なかば囁くやうにかう口をきつた。「どうして来なかつたんです？」

「ぢや君は、僕がこゝへ来るものと確信してたんですか？」

「いや、ちよつと、僕は讒ごつたんです……事によつたら、今も讒ごつたのかも知れない。……ちよつと待つて下さい。」

彼は立上がつて、三段になつてゐる本棚の中で、一ばん上の端に載せてある一物を取りおろした。それは拳銃だつた。

「ある晩、僕は熱に浮かされてね、君が殺しに来さうに思はれて仕方がないんです。で、翌朝はやく例ののらくら先生のリヤムシンを訪ねて、なけなしの金を抛り出して、この拳銃を買つたんですよ。僕は君に後れを取りたくなかつた。ところが、後で氣がついて見ると……火薬も弾丸も持つてないぢやありませんか。それ以來、そのまゝ棚の上にならうつちやらかしたまゝなん

です。ちよつと待つて下さい……」

彼は立上つて、窓の通風口を開けようとした。

「抛るのはお止しなさい、何だつてそんな事を？」とニコライは押し止めた。「それだつて賣れば金になる。それに、明日になつたら、人がいろんな事を言ひ出しますよ——シャートフの窓の下に拳銃が轉がつてゐるつて。さ、もとの所へ載つけて置きたまへ。さうく。ところで、早速お訊ねしますが、いま君は、僕が殺しに来るだらうと考へたのを、何となく濟まなと思つて居られるやうだが、一たいそれはどういふ譯です？ 僕は今だつて何も和睦に来たのぢやない、ただ必要な事を話しに来ただけですからね。まづ第一にはつきりしてほしいのは、あのとき君が僕を擲つた原因ですよ。まさか君の奥さんと僕との關係ぢやないでせう？」

靈

悪

「そのためでないと言ふ事は、君自身も知つてゐるでせう！」とシャートフは再び目を伏せた。

「ぢや、ダーリヤさんの事に關したばかりしい謠言を、信じたためでもないでせうね？」

「違ひます、違ひます、むしろ違ひます！ ばかな事を！ 妹は最初から僕にうち明けてゐますよ……」ほとんど地團太ふまなないばかりの勢で、シャートフは自烈たさうに聲を尖らせた。

「ぢや、僕の想像は當つてゐた。そして、君の想像も當つてゐたのです。」とスタヴローギンは落着き拂つた調子でかう言つた。「君の想像の通りです。マリヤ・レビヤードキナは、僕の正妻です。四年半ばかり前に、彼得堡で立派に僕と結婚式を擧げたのです。ねえ、君は彼女のため僕を擲つたんでせう？」

シャートフはまるで雷にでも打たれたやうに、一言も發せずには聽いてゐた。

「ぼく想像はしてゐたけれど、本當に出来なかつた。」奇妙な目つきでスタヴローギンを見つめながら、たうとうシャートフはかう呟いた。

「それで擲つたんですか？」

シャートフは急にかつとなつた。そして、ほとんど脈絡もなく、しどろもどろに呟き始めた。

「僕は君の墮落のために……君の虚偽のために擲つたのです。しかし、僕が君の傍へ近寄つたのは、敢て君を罰しようといふ積りぢやなかつた。出て行つた時には、擲らうなどと考へてもゐなかつた……僕があんな事をしてのは、君が僕の生涯に於いて實に意味ぶかい人だつたからなんです……僕は……」

「分かつた、分かつた。どうか言葉を節して貰ひたいですな。君が熱に浮かされてゐるのは残念だ。實はごく大切な用件があるんですがね。」

「僕は只ふん長く君を待つたですよ。」まるで全身を慄はしながら、シャートフはかう言つて、また腰を浮かせかけた。「早く君の用件を話して下さい。僕もやはり言ひますから……後で……」

「その用件はまるで範疇が違ふですよ。」とニコライは好奇の色を浮かべて、相手の顔をのぞき込むやうにしながら、かう言ひ出した。「僕は止むを得ない事情のために、今かういふ時を選んで、君のそこへやつて来て、是非とも注意して置かねばならなくなつたのです。ねえ、君は

事によつたら殺されるかも知れませんか。」

シャートフはけうとい目をして、彼を見つめた。

「さういふ危険が僕を威嚇する虞れがあるのは、僕も知つて居ます。」と彼は坦かに言つた。

「しかし——君がどうしてそれを知り得たのです？」

「それは、僕もやつぱり君と同様に、あの連中に加はつてゐるからです。君と同様に、あの會の會員だからです。」

蕙

「君が……君があゝの會の會員だつて？」

「僕は君の目つきでちやんと分かります。君は僕をどんな事でも仕兼ねない人間と思つてゐたけれど、こればかりは思ひもかけなかつたのでせう。」とニコライはあるかないかの薄笑ひを洩らした。「しかし、ちよつと聞きますが、ぢや、なんですか、君は自分が狙はれてる事を、もう知つてたんですか？」

靈

「考へた事ありません。今だつて、現在君にさう言はれても、やつぱり本當と考へられませんか。しかし……しかしあの馬鹿者どもにかゝつたら、どんな事をしでかさないと限りやしなはい！」拳固で卓を擲りつけながら、不意に凄じい勢で彼はかう叫んだ。「僕はあんなやつら恐ろしくない！僕はあいつ等と縁を切つたんだ！もつとも、あの男が四遍も僕のところへ駈け着けて、大いに……」と彼はスタヴローギンを見やつた。「あり得る事だとは言つてたけれど、一體この事に就いて、君はどういふ事を知つてゐるんです？」

「大丈夫です、僕は君を騙したりなんかしやしません。」單に自分の義務のみ果たさうとする人のやうに、かなり冷淡な調子でスタヴローギンは言葉を續けた。「君は僕がどういふ事を知つてるか、それを試験しようとするんですか？僕はこれだけの事を知つてゐます——君は二年前外國であの會へ入つたでせう。それはあの會の組織が變らない先の事でした。ちやうど君の亞米利加ゆきの前から、例の僕ら二人が話し合つてから間もなくですよ。あの話の事は、君が亞米利加から寄越した手紙にも、ずるぶん書いてありましたね。あゝ、手紙と云へば僕はあのとく同じやうに手紙で答へないで、たゞ單に……」

「送金だけで済ましたんですか。お待ちなさい。」とシャートフは相手をおし止めた。そして、忙しげに卓の抽斗をあけて、書類の間から一枚の虹色紙幣(百留)を取り出した。「さあ、受取つて下さい。君の送つてくれた百留です。君といふ人がなかつたら、僕はもう駄目になるところでした。この金はまだ近い中に返せる筈ぢやなかつたけれど、幸ひ君のお母さんのお蔭でね。十箇月まへ僕の病後に、困るだらうと云つて恵んで下さつたのです。しかし、どうか、どうか次を話して下さい……」

「亞米利加で君は思想を一變して、瑞西へ歸つて來ると、退會を申込んだのです。ところが、會の方ではうんともすつとも答へないで、かへつて露西亞へ歸つたらこの町で、ある人からある活版の器械を受取つて、會から人が引取りに來るまで、預つてゐるやうに命ぜられた。僕はすべてを完全、正確に知つてゐる譯ぢやないが、大體こんな風だつたのでせう？君はこれが彼らの最

後の要求で、これがすんだら、綺麗に放してくれるだらうと當にして（或はさういふ條件だつたかも知れない）、とにかく引受けたのです。今いつた事は、みんな本當か嘘か知らないが、それを僕が知つたのは、あの連中の口からではなく、全く偶然な事だつたのです。しかし、たつた一つだけ、君も今まで知らない事があるらしい——あの先生たちはまるで君と別れる氣なんかありません。」

「それは馬鹿げた話だ！」とシャートフは叫んだ。「僕はすべての點で彼等と見解を異にしてゐると、立派に宣告したぢやないか！ これは僕の權利だ、良心と思想の權利だ……僕はもう我慢が出来ない！ もうこの上……」

「ねえ君、そんなにど鳴るもんどやありませんよ。」とニコライは大眞面目で彼を押し止めた。「ゼルホーゼンスキイはあゝいふ質の人間だから、自分で來るか人の耳を借りるかして、今も僕等の話を立ち聴してるかも知れませんか。事によつたら、君の家の廊下でね。あの飲んだくれのレビヤードキンでさへ、君に對する監視の義務をもつてゐた、と言つてもいゝくらゐなんですから。しかし君もあの男に對して、さういふ地位に立つてたんどやありませんか、さうでせう！ それよりまあ伺ひませう、ゼルホーゼンスキイはいま君の論點に同意してゐるんですが、どうです？」

「同意してゐるんです。あの男はそれは出来る、君には權利がある……とさう言つてみました。」

「ふん、それはたゞさう言つて、君を騙してゐるんです。僕の知つてるところでは、ほとんどこ

の事に無關係なキリーロフでさへ、君に關する報告を提供してゐるんですからね。あの連中には手先が澤山あります。中には、あの會のご用を勤めてゐる事を、自分で知らないやうな間諜さへあるんですよ。君はいつも監視を受けてたんです。ゼルホーゼンスキイがこゝへ來たのは、いろいろ用事のあるうちでも、君の事件をすつかり片づけるのが主なのです。そして、それに對する全權を帯びてゐるのです。つまり、ほかぢやありませんが、都合のいゝ時機を見計らつて、あまりに多くの事を知り、かつ密告の虞れある人物として、君を殺して了はうといふのです。繰り返して言ひますが、これは確かな事實ですよ。それから、もう一つつけたさして戴きませう。あの連中はなぜだか君が間諜で、たとへ今まで密告しなかつたにせよ、將來かならず密告するものと、堅く信じきつてゐます。一たいそれは本當ですか？」

かういふ平氣な調子で發せられたこの問ひを聞いて、シャートフは口を曲げた。

「もし僕が間諜だとすれば、一たい誰に密告するんだ？」直接問ひには答へないで、彼は憎々しげにかう言つた。「いや、もう構はないで下さい、僕の事なんかどうだつていゝです！」不意にまた最初の想念に跳りかゝりながら、彼はかう叫んだ。あらゆる徴候から察するところ、この想念は自分自身の危険に關する報知よりも、さらに烈しく彼の心を震撼したものでらしい。「君、君、スタヴローギン、一たい君はどうしてあんな破廉恥で無能な、下司びた、ばか／＼しい仕事にかゝり合ふ氣になつたんです？ 君があゝの會の會員ですつて！ それがまあニコライ・スタヴローギンの仕事ですか？」と彼はほとんど絶望したやうに叫んだ。

彼は手さへばちりと鳴らした。まるで自分にとつて、これ以上悲しい、いたましい發見はないかのやうに。

「いや、ご免ください。」と實際ニコライは面くらつて了つた。「しかし、君はまるで僕を太陽か何ぞのやうに考へて、君自身といふ人を僕に比較すると、ほとんど蟲けら扱ひにしてるやうぢやありませんか。この事實は、君が亞米利加から寄越した手紙によつても、明らかに見てとる事が出来ましたよ。」

「君……君はご承知でせうか……いや、もう僕の事なんかすつかり、すつかりやめて了つた方がいゝ！」と不意にシャートフは語をきつた。「もし君が、君自身に就いて何か説明が出来たら、早く説明して下さい……僕の問ひに答へて下さい！」彼は熱に浮かされながら、かう繰り返した。

「いゝですとも。まづどうして僕があんな穢らしい仲間にかゝり合つたか、とかういふ質問なんですかね？ 僕もあゝいふ事實を君に通告した上は、多少ともこの件に就いて打明けたお話をするのが、義務だとさへ考へてるんですよ。いゝですか、僕は嚴正な意味に於いて、全然あの會に屬してゐないんです。また以前とても屬してゐなかつた。だから君より以上に、脱會の權利を持つてゐます。なぜと言つて、始めから入會しなかつたんだから。それどころか、僕は始めからちやんと宣言してあるんです——僕はあの連中の仲間ぢやないつてね。たま／＼手を借した事があるとするれば、それはたゞ閑人としての仕事だつたのです。僕は、あの會が新しい計畫によつて

組織の變更をした時、ちよつとそれに關係しただけなんです、それつきりです。ところが、今あの連中は考へをかへて、僕といふ人間もやはり手放しては危険だと、ない／＼決議したのです。だから、僕も同じ宣告を受けてゐるらしいんです。」

「おゝ、やつ等は何でもかでも死刑です、何でもかでも指令で決るんです。何かの紙つ切れに印を捺して、三人半ばかりの人間が署名するんだ！ で、君はやつ等にそんな事が出来ると思ひですか？」

「君のいふ事はなかば正しく、なかば違つてゐますね。」スターヴローギンは相變らず氣のない調子で、むしろ大儀さうに言葉を次いだ。「そりや、いつでもかういふ場合に見受けられるやうに、愚にもつかない空想が多分に含まれてるのは勿論です。一塊りぐらゐの人間がその發達や勢力を、誇張して考へてるんですよ。遠慮なく言はして頂けば、あの連中の仲間は、ピョートル・エルホーエンスキイ一人きりなんです。ところが當のあの男さへ、自分はある會の代表者に過ぎないと、こんな事を考へてるほどのお人好しなんですからね。しかし根本の理想は、他の同種類のものに比較すると、いくぶん氣が利いてゐるやうです。あの連中は萬國労働同盟インターナショナルと連絡を保つて、露西亞各地へ巧みに代表者を置いたものです。しかも、ずるぶん奇抜な方法を考へついたやうですが……しかし勿論、理論のみに止まつてるんですよ。ところで、この土地に於ける彼等の計畫はどうかと言ふと、わが露西亞では、さうした結社の運動が實に曖昧で、人の意表外に出るから、全くのところ、露西亞では何でもやつてみる事が出来ますよ。君も氣がついたでせうが、

「ゼルホーゼンスキイは執念ぶかい男ですからね。」

「あいつは南京蟲だ、下司だ、露西亞の事をなになつ知らない馬鹿者だ！」とシャートフは毒しく叫んだ。

「君はあの男をよく知らないのです。そりや全體として、あの連中が露西亞に就いて知るところが少いのは事實だが、しかし君や僕よりほんの少しばかり、知り方が少ないといふだけのこつてすよ。それに、ゼルホーゼンスキイは熱情家ですよ。」

「ゼルホーゼンスキイが熱情家ですつて？」

「ええ、さうですとも。ある一つの點ポイントがあつて、それを踏み越えると、もうあの男は道化ぢやなくなつて、その……半狂人はんきちやうじんになるのです。憶えてみますか、これは君自身の言つた言葉なんですよ。『一人の力がいかに偉大なるかを君は知り給ふや？』どうか笑はないで下さい。あの男はいざとなつたら、引金を下ろす力を十分もつてるんだから。あの連中は僕を間諜まはしものと信じ切つてゐます。あの連中は誰も彼も、自分で巧く仕事を運ぶ腕がないものだから、人を間諜よばはりするのが、恐ろしく好きなんなんですよ。」

「しかし、君は恐ろしく怖いですか？」

「い、いや……僕は決して恐ろしく怖いではありません……しかし、君の場合は全然べつです。とにかく、僕は君がこの事を頭に置くやうに、前もつて注意して置きますよ。僕に言はせれば、馬鹿者どものために危険が迫つたからつて、憤慨する必要は少しもありません。問題は彼等の賢愚いかに

あるのぢやないですからね。君や僕どころぢやない、まだく立派な人たちにも、彼等は謀計をめぐらしてゐるんですよ。あつ、もう十一時十五分だ。」彼は時計を眺めて立上つた。「しかし、僕は一つ君に、まるつきり筋の違つた質問を提出したいですがね。」

「どうかお願ひです！」と叫んでシャートフは、凄じい勢ひで跳り上がった。

「といふと？」ニコライはげんさうに見やつた。

「提出して下さい、君の質問を提出して下さい、お願ひです。」名状し難い昂奮の體で、シャートフは繰り返した。「たゞし僕も君に別な質問を提出する、といふ條件つきですよ。お願ひだから、そいつを許して下さい……あゝ、僕は駄目だ……早く君の質問をして下さい！」

スタヴローギンはちよつと控へてゐたが、やがてかう口をきつた。

「僕の聞いたところでは、こゝで君はあのマリヤに一種の感化力を持つてゐて、あれも君に會つて話しを聞くのを楽しんでゐたさうですね。本當ですか？」

「ええ、聞いてみましたよ……」とシャートフはちよつと間諜ついた。

「僕は二三日のうちに、あれと僕との結婚を、この町で公けに披露しようといふ目算つもなんです。」

「一たいそんな事が出来るものですか？」シャートフはぎよつとしてかう呟いた。

「といふと、どういふ意味で？ 何も難かしい事はないでせう。結婚の證人はこゝにゐるぢやありませんか。それはあのとき彼得堡でゆつくりと落ち着いて、ぜんく公定の手を踏んでやつ

た事ですからね。今までそれが世間へ知れなかつたのは、この結婚のたつた二人の證人、つまりキリーロフとエルホーエンスキイ、そしていま一人當のレビヤードキン（これが今あり難い事には、僕の親戚といふことになつてゐるのです）、この三人が當時沈黙を守ると、約束したために過ぎないのです。」

「僕が言ふのはそれぢやない……君はよくそんなに落ち着き拂つて言へますね……しかし次ぎを仰しやい！ いや、ちよつと、君は何もこの結婚を、力づくで強制されたんぢやないでせう、ね、さうぢやないでせう？」

「違ひます、誰も僕を力づくで強制したものはありません。」 シャートフの突つかゝるやうな急ぎ込み方を見て、ニコライはにやりと笑つた。

「ぢや、どういふ譯である女は、自分の生んだ赤ん坊の事なんか言つてゐるんです？」 熱に浮かされて脈絡もなく、シャートフは急ぎ込んでから訊ねた。

「自分の生んだ赤ん坊の事を言つてゐる？ へえ！ あれには赤ん坊なぞなかつた、またあるべき筈がない。マリヤは處女ですからね。」

「あゝ！ 僕もさうだらうと思つた。まあ、聞いて下さい！」

「シャートフ、君は一たいどうしたんです？」

シャートフは両手で顔を蔽ひながら、くるりと横を向いたが、出し抜けにしつかりとスタヴロ一ギンの肩を掴んだ。



「ねえ君、ねえ、何と言つても、君自身には分かつてゐるでせう。」と彼は叫んだ。「何のために君はこんな事を仕出かしたんです。そして、何のために今そんな刑罰を受けようと、決心したのです？」

「君の質問は氣が利いて、皮肉だね。しかし、僕もやはり君をびつくりさして上げるつもりです。えゝ、何のために僕があのと結婚したか、また何のためにいま君のいはゆる『そんな刑罰』を受けようと決心したか、僕には大抵わかつてゐます。」

「いや、この事は止めませう……この事は後にしませう。ちよつと話すのを控へて下さい。それより肝腎の事を話させう、肝腎の事を。僕は二年のあひだ君を待つてゐました。」

「さうですか？」

「僕はもうずつと前から君を待つてゐました、絶えず君の事を考へてゐました。君はその……あれを成し遂げ得る唯一の人です。僕はまだ亞米利加にゐた頃、このことを君に書いて上げました。」

「僕も君のあの長い手紙の事は、よく覚えてゐます。」

「了ひまで讀み通すのに長すぎる？ もつともです。書翰紙六枚ありましたからね。黙つてらつしやい、黙つてらつしやい！ 一つお訊ねしますが、君はもう十分の時を僕に割く事が出来ますか、今、今すぐに……僕はあまりに長く君を待つてたのです！」

「さあどうぞ。もう三十分割愛させう。しかしそれ以上は駄目ですよ。もしそれでお間に合

へば。」

「たゞし、」シャートフは猛然としてかう引き取つた。「君のその調子を變へて頂きたいのです。いゝですか、僕は實際哀願しなくちやならない地位にありながら、これを要求するのです……え、分かりますか、哀願しなくちやならないのに、要求するといふ事は、一たい何を意味するのですか？」

「分かりますよ。さういふ風にして、君は一切の日常茶飯事から、超絶しようと言ふんでせう。より高遠な目的のためにね。」ほんの心持ニコライは微笑した。「同時に、君が熱に浮かされてるのを見て、僕は甚だ悲しく思ひますよ。」

「君は自分に對して尊敬を求めます、いや、強要します！」とシャートフは叫んだ。「しかし、それは僕の人格に對してぢやありません——そんなものはどうだつていゝ——まるで別なものです。今かうしてゐる間だけでいゝです、僕のある言葉に對してね……われ／＼は二つの存在です、それが無限の中に相會したのです……宇宙あつて以來、最後の會見です。さあ、君のその調子を捨てて、人間らしい調子でお話しなさい！ せめて一生に一度でも、人間らしい聲でものをお言ひなさい。僕は決して自分のためぢやない、君のために言つてゐるんですよ。僕が君の頬を打つたとき、自分の無限な力を感じる機會を君に與へた、この一つの理由だけでも、君は僕を赦してくれるべきです……また君は例の氣難かしさうな、社交紳士的な笑ひ方をしてますね。おゝ、いつになつたら僕を了解してくれるんです！ 若様根性は斷然すててお了ひなさい。僕がこれを要求

してるといふ、心持を了解して下さい。でなくちや、僕はもう話すのも厭だ、どんな事があつたつて言やしない！」

彼は激昂のあまり、ほとんど魔されてでもゐるやうな有様だつた。ニコライは眉を顰めて、いくぶん大事をとり始めた風だつた。

「ねえ、いま僕にとつて非常に大切な時を割いて、」と彼は言ひ含めるやうな、眞面目な調子でかう言ひ出した。「もう三十分君のところに残らうと決心したのは、實際すくなくも、興味をもつて君の話聞く意志があるからですよ。そして……そして、いろ／＼君から珍しい事が聞けると、信じてゐるからですよ。」

彼は椅子に腰を下ろした。

「お坐んなさい！」とシャートフは怒鳴つて、妙に出し抜けに自分でも腰を下ろした。

「失禮ですが、ちよつと注意しますよ、」スタヴローギンは、また急に思出してから言つた。「僕はマリヤの事に就いて、君に一つ依頼を持ち出しかけたんですがね。少くとも、あの女に取つて非常に重大な事です……」

「で？」とシャートフは不意に顔をしかめた。一ばん肝腎なところで話の腰を折られたので、相手を眺めてはゐるけれど、まだその間の意味を會得する暇がない、と云つたやうな顔つきをしてゐた。

「ところが、君はそれを了ひまで言はしてくれなかつたのです。」ニコライは微笑を浮かべな

がら、かう言ひ足した。

「え、詰らん事を、後でいゝ」やつとのことで相手の要求を了解すると、シャートフは氣難かしさうに片手を振つた。そして、さつそく自分の話の眼目に移つた。

七

「あなた分かりますか、」目をぎら／＼と輝かしながら、右手の人さし指を目の前にさし上げて（自分でもこれに氣がつかないらしい）、椅子に腰掛けたまゝ前へ乗り出しつゝ、彼はほとんど威嚇するやうな調子で言ひ出した。「あなたは分かりますか、今この地上に於いて、新しき神の名によつて世界を更新し救済すべき、唯一の『神を姪める』國民は誰でせう？ 命と新しき言葉の鍵を與へられた唯一の國民は誰でせう……君はこの國民が何者か分かりますか、そしてその名を何と云ふか分かりますか？」

「君の態度からして察すると、僕は是非とも、そして出来るだけ迅速に、それは露西亞國民だと、結論しなくちやならないやうですね……」

「君はもう茶化してゐるんですね、おゝ、何といふ情けない人たちだ！」とシャートフは猛り始めた。

「まあ、落ちついて下さい、後生だから。それどころか、僕は始めから、そんな風の話の話を期待してたんですよ。」

「そんな風の話の話を期待してた？ 一たい君自身この言葉に憶えはないのですか？」

「大いにあります。君が何を言はうと思つてゐるかは、僕には明瞭すぎるくらい見え透いてゐます。君の文句は『神を姪める』國民といふ表現に到るまで、二年あまり前、君が亞米利加へたつ間際に、外國で交換した二人の議論の、單なる結論に過ぎないんですよ。少くも、いま僕の思ひ起し得る限りではね。」

「あれは君のいつた言葉そつくりそのまゝなんです。僕の言つた事ぢやありません。みんな君一人の言つた事で、二人の話しの結論ぢやありません。二人の話などはてんでなかつた。偉大な言葉を告げる師匠と、死から甦へつた弟子があつたばかりです。僕がその弟子、君がその師匠だつたのです。」

「しかし、今おもひ出せる限りでは、君があゝの會へ入つたのは、僕の話しを聞いてからで、亞米利加へ渡つたのはその後でせう。」

「さうです、だか僕らもその事を亞米利加から、手紙で君に知らせたんです。全く子供の時分から根を下ろして育つた地盤を、血の慘むやうな思ひをしてまで、拗ぎ放すことが容易に出来なかつたのです。何しろ僕の希望の歡びも僕の憎惡の涙も、それ一つに懸つてたんですからね……神を變へるのは難かしい事です。僕はあゝのとき君の言葉を信じなかつた。信じたくなかつたからです。そしてこゝを最後とばかり、あゝの腐つた溝とどろにしがみついてゐたのです……しかし、種は残つて生長しました。眞面目に、本當に眞面目に言つて下さい——君は亞米利加から送つた僕の

手紙を、了ひまで讀まなかつたのですか？ 事によつたら、まるつきり讀まなかつたかも知れませんか？」

「僕はあるうち三頁だけ讀みましたよ。初め二頁と了ひの一頁と……それに、中の方もざつと目を通したつけ。もつとも僕は始終……」

「え、どつちだつて同じこつてす、やめて下さい、勝手になさい！」とシャートフは手を振つた。「もし君が今になつて、あの時の國民に關する言葉を否定してるとすれば、どうしてあの時あんな言葉を發する事が出來たのでせう、それがいま僕の心を壓してやまない問題なのです。」

「僕は決してあのとき君を擱まへて、冗談を言つたのぢやない。君を説伏しようとすると同時に、僕は寧ろ自分の事を心配してたかも知れませんよ。」とスタヴローギンは謎めいた調子で言つた。

「冗談を言つたのぢやないつて！ 僕は亞米利加で三箇月間ある一人の……不幸な男と枕を並らべて、藁の上に寝てたのです。その男の口から聞いたのですが、君は僕の心に神と故郷ふるさとを植ゑつけたと同じ時に、いや、ことによつたら、同じ日かも知れない——その男の、つまりあの氣ちがひのキリーロフの胸に、毒を注ぎ込んでゐたのです……君はあの男の心に虚偽と讒誣とを植ゑつけて、理知を狂はして了つたのです……まあ行つて、今のあの男の様子をご覽なさい、あれが君の創造物です……もつとも、君はもう見たんでせうね。」

「僕は斷はつて置きますが、第一に、あのキリーロフはたつたいま自分の口から、自分は幸福だ、美しい人間だ、と僕に言ひましたよ。あれがほとんど同時に行はれたらうといふ事の想像は、

ほど正確に近いです。しかし、それが一たいどうしたのです？ くり返して言ひますが、僕は君達のどちらにも、嘘をつきはしなかつた。」

「君は無神論者ですか？ いま無神論者ですか？」

「さうです。」

「ぢや、あの時は？」

「今もあの時も同じ事です。」

「君は會話を始めるに當つて、尊敬を要求しましたね。あれは君自身に對するものぢやない。君の頭腦でそれくらゐの事がわからない筈はありません。」シャートフは憤懣の語氣でかう言つた。

「僕は君の最初の一言とともに席を立つて、この話に蓋をしなかつた。そして君のところを去らないで、今までぢつと坐つたまゝ、君の質問……と言ふより、むしろ怒號に對して、おとなしく答へをしてるぢやありませんか。して見ると、まだ君に對する敬意を失つてない筈ですよ。」

シャートフは手を振つて遮つた。

「君はかういふ君自身の言葉を憶えてゐますか。『無神論者は露西亞人たり得ない。』『無神論を奉ずるものはたゞちに露西亞人でなくなる。』とかういふ言葉を憶えてゐますか？」

「さう？」とニコライは問返すやうにかう言つた。

「君は僕に聞いてるんですか？ 忘れたんですか？ ところが、これは露西亞精神の最も重要

な特性を明示した、最も正確な意見の一つなのです。これは君が自分で発見したんですよ。僕がそれを忘れるといふ法はない！ 僕はもつと思ひ出さして上げますよ——君はあの時かうも言ひました。『希臘正教を奉じないものは露西亞人でない。』

「どうもそれは汎スラヴ主義者の思想らしいですね。」

「いや、今の汎スラヴ主義者なら、こんな思想はご免蒙ると言ひますよ。今の人はもう少し惻巧になりましたからね。君はもつと深入りしてゐたのです。羅馬カトリックはもう基督教でない、とかう君は信じてゐました。君の説によると、羅馬は悪魔の第三の誘惑に陥つた基督を宣傳したのです。地上の王國なしには、基督も自己の地歩を保つ事が出来ない、とかういふ思想を宣傳した加特力教は、この宣傳によつて反基督を普及し、ひいて西歐全體を亡ぼした事になるのです。いま佛蘭西が苦しんでゐるのは、ひとへに加特力教の罪だけだ。何となれば、佛蘭西は穢れた羅馬の神を斥けながら、新しい神を発見する事が出来ないからだ——かう君は明瞭に指示してくれました。君はあの時かういふ言葉を吐く事が出来たのです！ 僕はその時の二人の話をよく覚えてゐます。」

「もし僕が信仰を持つてゐたら、きつと今でもそれを繰り返したらう。僕があのとき信あるもののやうに話したからつて、決して嘘をついた譯ぢやない。」とニコライは恐ろしく眞面目に言つた。「しかし、全くのところ、自分の過去の思想を繰り返すのは、非常に不愉快な印象を僕に與へるのです。もうやめて貰ふ譯にゆかないでせうか？」

「もし信仰を持つてゐたらですつて?!」相手の乞ひにはいさゝかの注意も拂はないで、シャートフはかう叫んだ。「あのとき僕にこんな事を言つたのは、君ぢやなかつたでせうか——たとへ眞理は基督以外にあるといふ事を、數學的に證明してくれるものがあつても、自分は眞理と共にあるより、むしろ基督と共にどまるを潔しとする——かう言つたのですか、言はないですか？」

「しかし、僕も一つ質問を提出していゝ頃でせう」とスタヴローギンは聲を張り上げた。「この急つかちな、そして……意地の悪い試験は、一たい何のためになるんです？」

「この試験は永久に消えて了ひます、そして、二度と再び思ひ出させるものはありません。」

「君はやつぱり、人間は時間と空間の外にある、といふ持論を主張してゐるんですか？」

「お黙んなさい！」と不意にシャートフは怒鳴りつけた。「僕は馬鹿で聞ぬけです。しかし、僕の名は滑稽なものとして、亡びて了つても構やしない！ 僕はいま君の前で、當時の君の主な思想を繰り返して見たいのですが、許してくれますか……えゝ、たつた十行ばかり、たゞ結論だけ……」

「やつてご覧なさい、結論だけなら……」

スタヴローギンは時計を見ようとしかけたが、我慢して止めた。

シャートフはまたもや椅子に坐つたまゝ、前の方へ屈み込んで、またちよつと指を上げようとした。

「いかなる國民と雖も、」まるで書いたものでも讀むやうに、とは言へ相變らず、物凄い目つ

きで、ちつと相手を見めながら、彼はかう切り出した。「いかなる國民と雖も、科學と理智を基礎として、國を建設し得たものは、今日まで一つもない。たゞ、ほんの一時的なばか／＼しい、偶然によつて成つたものは別として、さういふ例は一つもない。社會主義はその本質上、無神論たるべきである。なぜなれば、彼らは劈頭第一に、自分たちが無神論的組織によるもので、絶対に科學と理智を基礎として、社會建設を志すものだ」と、宣言してゐるからである。理智と科學は國民生活に於いて、常に創世以來今日に到るまで第二義的な、ご用聞き程度の職務を司どつてゐるに過ぎない。それは世界滅亡の日まで、そのまゝで終るに相違ない。國民は全く別な力によつて、生長し、運動してゐる。それは命令したり、主宰したりする力だ。けれど、その發生は誰にも分らない、また説明する事も出来ない。この力こそ最後の果てまで行き着かうとする、飽く事なき渴望の力であつて、同時に最後の果てを否定する力だ。これこそ撓む事なく不斷に自己存在を主張して、死を否定する力である。聖書にも説いてある通り、生活の精神は『生ける水の流れ』であつて、黙示録はその涸渴の恐ろしさを極力警告してゐる。それは哲學者のいはゆる美的原動力であつて、また同じ哲學者の説く倫理的原動力と同一物なのだ。が、僕は最も簡單に『神を求め、たゞ／＼神の探求のみに存してゐた。それは必ず自分の神なのだ、是非とも自分自身の神でなくちやならない。唯一の正しき神として、それを信仰しなければならぬ。神は一民族の發生より終滅に到るまでの、全部を抱含した綜合的人格なのである。すべての民族、もしくは多數の民

族の間に、一つの共通な神があつたといふ例は、これまで一度もなかつた。如何なる時もすべての民族は、自分自身の神をもつてをつた。神々が共通なものになるといふ事は、取りも直さず國民性消滅の徴なのだ。神々が共通なものとなる時、神々も、またそれに對する信仰も、國民そのものと共に死滅して行く。一國民が強盛であればあるほど、その神もまたますます／＼特種なものとなつて行く。宗教——すなはち善惡の觀念を持たぬ國民は、かつて今まで存在した事がない。すべての國民は自己独自の善惡觀念を有し、自己独自の善惡を有してゐる。多くの民族間に、善惡觀念が共通のものとなり始めた時は、その時は民族衰滅の時である。そして、善惡の差別感そのものまで、次第に磨りへらされて消えて行くのだ。理性はかつて一度も、善惡の定義を下すことが出来なかつた。いな、善惡の區別を近似的にすら示すことが出来なかつた。それどころか、惘れにも見苦しくも、この二つを混同してゐたのだ。科學に至つてはこれに對して、拳固で撲るやうな解釋を與へてゐた。殊に、著しくこの特長を備へてゐるのは、半科學である。これは現代に至るまで、人に知られてゐないけれど、人類に取つて最も恐るべき鞭だ。疫病よりも、饑ゑよりも、戰爭よりも、もつと悪い。半科學——これは今までかつて人類の迎へた事のない、殘虐きはまりなき暴君だ。この暴君には祭司もあれば、奴隸もある。そして、今まで夢想だもしなかつたやうな愛と迷信をもつて、すべてのものがその前に跪づいてゐる。科學でさへその前へ出ると、戦々競々として、意氣地なくその跋扈に任せてゐる。スタヴローギン、これはみんな君自身の言葉です。しかし、半科學に關する事は違ひます、あれは僕の言葉です。僕自身が半科學そのもの

なんですからね、取りわけこいつを憎んでる譯なのです。君自身の思想に至つては、言ひ表はし方さへも何一つ變へてゐません、一語たりとも變へてはをりません。」

「君が變へてゐないとは考へられないね。」スタヴローギンは用心ぶかい調子でかう言つた。「君は熱烈な態度で受け容れたけれど、また同時に、熱烈な態度で改造して了つたのです、しかも自分でそれと氣が附かないでね。たゞ單に、君が神を國民の屬性に引き下ろした、といふこと一つだけ取つて見ても……」

とつぜん彼は特に注意を緊張させて、シャートフを注視し始めた。それは彼の言葉といふより、むしろ彼自身に對する注意なのであつた。

「神を國民の屬性に引き下すつて！」とシャートフはさげんだ。「まるで正反對だ、國民を神へ引き上げたのです。第一、たゞの一度でもこれに反した事實がありますか？ 國民——それは神の肉體です。どんな國民でも、自己獨特の神をもつてゐて、世界に於けるその他のすべての神を、少しの妥協もなく排除しようとするやうと努めてゐる間だけが、本當の國民であり得るのです。自己の神をもつて世界を征服し、その他の神を一切この世から驅逐する事が出来る、とかう信じてゐる間のみが、本當の國民と言へるのです。少くも人類の先頭に立つて、いく分たりとも頭角を現はしたすべての國民は、創世以來かう信じて來たのです。事實に逆ふわけにはゆかない。猶太國民は、眞の神の出現を見んがためのみに生存を續けた。そして、世界に眞の神を遺して行つた。希臘人は自然を神化して、世界に自己の宗教を遺した。哲學と藝術がそれである。羅馬は帝國內の

國民を神化して、多くの民族に帝國を遺した。佛蘭西はその長い歴史の繼續せるあひだ、單に羅馬の神の理想を體現し、發達させたに過ぎなかつた。彼が遂にその羅馬の神を深淵の中へ抛つて、目下のところ、自ら社會主義と稱してゐる無神論に逢着したのは、無神論の方が羅馬加特力教よりまだしも健全だからに過ぎないのだ。もし偉大なる民にして、己れの中のみ眞理ありと信じなかつたら（實際その中のみあるべきだ、斷じてほかにあつてはならない）、もしその偉大なる國民が、われこそ自己の眞理をもつて萬人を蘇生させ、救濟するの使命を有し、かつそれをなし遂げる力があるといふ信仰を缺いてゐたら、その國民は直ちに人類學の材料と化して、偉大なる國民ではなくなるのだ。眞に偉大なる國民は、人類中に於いて第二流の役所やくどころに甘んじる事が、どうしても出来ない。いや、單に第一流といふだけでは足りない。是非とも第一位を占めなくては承知しない。この信仰を失つたものは、もう既に國民ではなくなつてゐるのだ。しかし、眞理に二つはない。従つて、たとへ幾つもの國民が自己獨特の、しかも偉大なる神を有するにせよ、眞の神を有してゐる國民はたゞ一つしかない。「神を妊める」唯一の國民——これは露西亞の國民なのだ、そして……そして……一體、一體まあ、君は僕をそんな馬鹿者と思つてゐるんですか、スタヴローギン？」とつぜん彼は兇暴な叫びを上げた。「今この瞬間自分の言つてゐる事が、莫斯科あたりの汎斯拉ヴ派の水車小屋で、さんぐ搗いて搗き潰された、古い黴の生えさうな世迷事よめごとか、それともぜん／＼新しい最後の言葉か——更新と革生の言葉か、それさへ區別のつかないやうな、馬鹿者だと思つてゐるんですか？ それに……それに今の瞬間、僕に取つて、君のた／＼笑ひな

んか、少しも用はありません！ 君が僕の言ふ事をまるつきり理解しないからと云つて——たつた一つの言葉、たつた一つの響さへ理解できないからと云つて、僕は全く風馬牛です！……お、僕は今この瞬間、君のその高慢な笑ひ顔と目つきを、心底から輕蔑する！」

彼はたうとう席からおどり上つた。その唇には泡のやうな唾さへ見えてゐた。

「それどころぢやない、シャートフ、それどころぢやない。」とスタヴローギンは席を立たうともしないで、ごく眞面目な抑へつけたやうな調子で、かう言つた。「それどころぢやない、僕はその熱烈な言葉で、非常に強い多くの記憶を、僕の胸中に甦らせてくれた。僕は君の言葉の中に、二年前の僕自身の心持を認めることが出来ます。今こそ僕もさつきのやうに、君が當時の僕の思想を誇張してゐるなどは、もう決して言やしませんよ。むしろ當時の僕の思想はもう少し排他的で、もう少し專斷的だつたやうな氣がするくらゐです。もう一度、三度目に繰り返して言ひますが、僕はいま君の言はれた事を、一言もろさず裏書きしたいのは山々だが、しかし……」

「しかし君には兎が要るんでせう？」

「なあんですつて？」

「これは君の言つた下劣な言葉なんですよ。」再び席に着きながら、シャートフは意地悪い薄笑ひを浮かべた。「兎汁を作るためには兎が要る、神を信ずるためには神が要る。」これは君がまだ彼得堡ペテルブルグにゐる時分に、言つたことださうですね。ちやうど兎の後足を掴まへようとしたノズドリョフのやうに。」

「いや、ノズドリョフはもう掴まへたと云つて、自慢したね。ついでに失敬ですが、ちよつと一つ君にご返答を煩はしたい事があるんですよ。まして僕は今さうする權利を、十分もつてゐるやうに思はれるんでね。ほかぢやありませんが、君の兎はもう掴まりましたか、それともまだ走つてゐますか？」

「そんな言葉で僕に訊ねる權利はありません、別な言葉でお聞きなさい、別な言葉で！」シャートフは不意に全身をがた／＼慄はし始めた。

「いやどうも。ぢや、別な言葉にしませう。」とニコライはきびしい目つきで相手を眺めた。「僕はたゞかう聞きたかつたのです——君自身は神を信じてゐますかどうかどうです？」

「僕は露西亞を信じます、僕は露西亞の正教を信じます……僕は基督の肉體を信じます……僕は新しい降臨が露西亞の國で行はれると信じてゐます……僕は信じてゐます……」とシャートフは夢中になつて、しどろもどろにかう言つた。

「しかし神は？ 神は？」

「僕は……僕はきつと神を信じます。」

スタヴローギンは顔面筋肉の一本も動かさなかつた。シャートフは燃ゆるが如き目つきで、挑むやうに彼を眺めた。ちやうどその目つきで相手を焼き盡さうとするかのやうに。

「僕は敢てぜん／＼信じないと云つた譯ぢやありません！」遂に彼はかう叫んだ。「僕はたゞ自分が運の悪い、退屈な一冊の書物であつて、當分の間それ以上何ものでもないといふ事を、ち

よつと知らせたに過ぎないのです。え、當分の間……しかし、僕の名は朽果てようともうだ！ 肝腎なのは君だ、僕ぢやない……僕は才も何もない男だから、自分の血潮を捧げるほかに藝はありません。才も何もない十把一からげの仲間で、決してそれ以上なにもありません。僕の血潮も滅びようとまうだ！ 僕は君の事を言つてゐるのです。僕は二年間こゝで君を待つてゐたのです……僕は君のために、いま三十分のあひだ裸踊りをしたのです。君です、君だけです、この旗印を擧げる事が出来るのは……」

彼は了ひまで言はなかつた。そして、絶望したもののやうに、卓の上へ肘突きして、両手で頭を抱へて了つた。

「僕はちよつとついでに、一つの奇妙な現象として、君に注意して置きますがね、」不意にスタヴローギンはかう遮つた。「どうしてみんなが妙な得體の知れぬ旗印を、僕に押しつけようとするんでせう？ エルホーエンスキイも、僕が『彼らの旗印を掲げる』ことの出来る男だと信じてゐるんです。少くも、あの男の言葉として、人がかう取り次いでくれました。あの男は僕が生來の『異常な犯罪能力』によつて、彼等のためにスチェンカ・ラージン(魯國民衆叛逆史中の一英雄)の役廻りを演じ得るものと、固く信じ切つてゐるんですからね。『異常な犯罪能力』といふものも、やはりあの男の言葉です。」

「何ですつて？」とシャートフが聞いた。「異常な犯罪能力？」
「その通り。」

「ふむ……一體あれは本當ですか？」と彼は毒々しくほくそ笑んだ。「君が彼得堡で畜生同様な、祕密の好色會に入つてゐたといふのは、本當ですか？ 公爵マルキサードでさへ、君に教へを乞ひ兼ねないほどだつた、といふのは一たい事實ですか？ 君が多くの幼者を誘惑して、墮落の淵へ陥れたといふのは、事實ですか？ さあ、返事をなさい、嘘なぞつくと承知しませんよ！」もうまるで我を忘れて了つて、彼はかう怒鳴つた。「ニコライ・スタヴローギンは、自分の面をぶらん撲つたシャートフの前で、嘘をつくことは出来ない筈です！ さあ、みんな言つておしまひなさい。そして、もし本當のことだつたら、僕はすぐに今こゝで、この場を去らず君を殺してしまふ！」

「さういふ事は僕も言ひました、しかし子供を辱しめたのは、僕ぢやありません。」とスタヴローギンは口を切つた。けれども、それはだいたふ長い沈黙の後だつた。

彼の顔はまつ蒼になつて、目はばつと燃え立つた。
「しかし、君は言つたんですね！」ぎら／＼と光る目を相手から放さないで、シャートフは威を帯びた調子で語を續けた。「それからまた、君は何かその、淫蕩な獸のやうな行爲も、何かかう非常に立派な働き、つまり人類のために生命を犠牲にすると云つたやうな行爲も、美の見地から見ると、ほとんど差別を認め難いと斷言したさうですが、それは全く本當ですか？ この兩極に於いて美の合致、快樂の均等を發見したと云ふのは、事實ですか？」

「どうもさう聞かれると、返事が出来ない……僕が答へたいと思つてゐるのは……」とスタヴ

ローギンは呟いた。彼は今すぐにも立ち上がつて、歸つて行く事が出来るにも拘らず、立ち上がらうともしなければ、歸つて行かうともしなかつた。

「僕自身もなぜ悪が醜くて、善が美しいかといふ事が、よく分からない。しかし、僕はどういふ譯でこの差別感が、スタヴローギンのやうな人に於いて、特に著しく磨滅され、消耗されてゆかといふ事を、ちやんと知つてゐます。」シャートフは全身をわなくと慄はせながら、どこまでも追窮するのであつた。「ねえ、君はどうしてあの時、あゝまで醜悪な無意味な結婚をしたか、その譯が分かつてゐますか？　ほかぢやありません、あの場合この醜悪な無意味といふやつが、ほとんど天才的ともいふべき程度に達したからです！　おゝ、どうか端の方をおつかなびつくりためです、良心の苛責に對する愛のためです、精神的情慾のためです。あの場合、神経性の發作が働いたので……つまり、常識に對する挑戦が、強く君を誘惑したのです！　スタヴローギンと跛つづこの女——醜い半きちがひの乞食女！　あの縣知事の耳を噛んだとき、君は何か情慾を感じましたか？　感じたでせう？　え、感じたでせう？　こののらくらの極道若様！」

「君は心理學者だ。」いよく顔を蒼くしながら、スタヴローギンはかう言つた。「もつとも、僕の結婚の原因に就いては、君もいくぶん思ひ違ひをしてゐますがね……しかし、一たい誰が君にそんな事を知らせたんだらう、」と彼は苦しうな薄笑ひをした。「キリーロフかな？　いや、あの男は仲間に入つてなかつたつけ……」

「君あをくなりましたね？」

「ところで、君は一たいどうしようと言ふんです？」たうとうニコライは聲を激ました。「僕は三十分間、君の鞭の下に坐つてたんだから、君も禮をもつて僕を釋放してくれていゝ時でせう……もしさういふ風に僕を扱ふについて、別に合理的な目的がないならば。」

「合理的な目的？」

「當り前ですよ。もういゝ加減にして、自分の目的を話すといふ事は、少くも君の義務ぢやありませんか。僕は、君がさうしてくれる事と思つて、待つてたんですが、要するにたゞ昂奮した憎惡を見いだしたばかりだ。ぢや、一つ門を開けて下さい。」

彼は椅子を立つた。シャートフは兇猛な態度で、その後ろから跳りかゝつた。

「土を接吻なさい、涙でお濡らしなさい、赦しをお求めなさい！」相手の肩を掴まへながら、彼はかう叫んだ。

「しかし、僕はあの朝……君を殺さないで……両手を退いて了ひましたよ……」ほとんど痛みを忍ぶやうな調子で、スタヴローギンは眼を伏せながら、かう言つた。

「しまひまでお言ひなさい、しまひまで！　君は僕に危険を知らせに来て、僕に言ひたい事を言はしてくれたぢやありませんか。君はあす自分の結婚の事を、世間へ發表しようと思つてゐるんでせう！……一たい僕に分らないと思ひますか？　君が何かしら新しい、しかも恐ろしい思想に征服されてゐるのは、君の顔でちやんと分かつてゐます……スタヴローギン、何のために僕は、

永劫君といふ人を信じなきやならない運命を持つて、生まれたんでせう？ 一たい僕がほかの人を掴へて、今のやうなことが言へたでせうか？ 僕だつて童貞の心は持つてゐるけれど、僕は自身を裸を恐れなかつた。なぜつて、相手がスタヴローギンだからです。僕は偉大な思想に手を觸れて、それを戯^{カウカニヤ}畫化するのを恐れなかつた。なぜつて、聴き手がスタヴローギンだからです。君が歸つた後で、僕が君の足あとに接吻しないと思ひますか？ 僕は自分の胸から君といふ人を、どうしても掻き放すことが出来ないのです、ニコライ・スタヴローギン！」

「僕はどうも残念ながら、君を愛する事が出来ないですよ、シャートフ。」とニコライは冷やかに事つた。

「君に出来ないのは分かつてゐます。君が嘘をついてないのも分かつてゐます。ねえ、君は一切を正すことが出来ますよ。ぼく君のために、兎を手に入れて上げませう！」

「君が無神論者なのは、君が貴族の若様だからです、屑の屑の若様だからです。君が善悪の差別感を失つたのは、自國の民衆を見分ける事が出来なくなつたからです……新しい時代は直接人民の胸から流れ出てゐる。けれどそれは君にも、エルホーエンスキイ親子にも、また僕自身にも分からない。なぜと言つて、僕もやつぱり貴族の若様ですからね、君の家で奴隷づとめをしてゐた、下男パーシカの息子ですからね……ねえ君、労働で神を獲得なさい、要はすべてこれ一つにあるのです。でなければ、醜劣な穢のやうに消えて了ひますよ。労働で獲得するんです。」

「神を労働で？ どんな労働です？」

「百姓の労働です。斷然出てお了ひなさい、君の富を抛つてお了ひなさい……あゝ！ 君は笑つてゐるんですね、君は手品に終るのを恐れてゐるんですね？」

けれども、スタヴローギンは笑はなかつた。

「君は労働によつて、しかも百姓の労働によつてのみ、始めて神を得ることが出来ると思つてゐるんですか？」實際なにか相當に思慮を費す價值のある、新しい重大なものでも發見したやうに、ちよつと考へてから、彼はかう問ひ返した。「ついでに言つときますがね、」出し抜けに彼は別な想念に移つて了つた。「いま君の言葉で思ひ出したんだが、實はね、僕まるで富も何もないんです。従つて、抛たうにも物が無い。僕はほとんどマリヤの將來を保證するだけの力もないんです……そこで、いま一つ言つて置く事がある——僕がこゝへ來たのは、もし出来ることなら、今後とてもマリヤの面倒をお頼みするためなんです。その譯は君だけがあの女の憫れな心に、ある種の感化力を持つてゐられたからです。僕は萬一の場合を豫想して言ふのです。」

「いゝです、いゝです、君はマリヤの事を言つてゐるんでせう？」とシャートフは片手に蠟燭を持つたまゝ、いま一方の手を振つた。「いゝです、それは後で自然と……ねえ君、チーホンのところへ行きませんか。」

「誰のところへ。」

「チーホンのところへ。元の僧正のチーホンですよ。いま病氣のために靜養かたぐ、この町

に住んでゐます。あのエフィーミエフの聖母寺院に。」

「一たいそれは何のために？」

「何でもありません。みんなその人のところへ出かけてますからね。まあ、行つてご覧なさい。君に取つて何でも無い事ぢやありませんか？」

「はじめて聞いた、それに……今まで一度もさういふ種類の人を見た事がないから……いや、有り難う、行つて見ませう。」

「こつちです。」とシャートフは階段を照らした。「さあ、お出なさい。」彼は耳門を往來へさつと開け放した。

「僕はもう君のところへ來ませんよ、シャートフ。」耳門を跨ぎながら、スタヴローギンは小聲でかう言つた。

闇と雨は依然として變らなかつた。

第二章 夜（續）

彼はボゴイヤヴレン街を通り抜けて、たうとう坂道を下り始めた。足は泥の中をひとりで行つて行つた。と、急に廣々と霧がかつた、原つばのやうなものが眼界に展けた——河だ。家並みはまるで堀つ立て小屋のやうなものに變つて、往來は秩序のない無数の露路の中に隠れて了つた。ニコライは河岸から遠く離れないやうにしながら、長いあひだ垣の傍を辿つて行つた。しかし、道に迷ふ氣色がないばかりか、そんな事はろく／＼考へもしないやうな風だつた。彼は全く別なことに心を奪はれてゐた。で、ふと深いもの思ひから醒めて、あたりを見廻したとき、雨に濡れた長い船橋の、ほとんどまん中に立つてゐるのに氣がついて、思はず愕然としたくらゐである。周りには人氣とて更になかつたので、とつぜん肘の下あたりから、思ひがけなく慇懃な、なれなれしい聲が聞こえたとき、彼は何だか奇妙な感じがした。それはかなり氣持のいい聲だつたが、この町でも厭にはいかつた町人や、髪を渦巻かした勸工場あたりの若い手代が伊達に使ふやうな例のわざとらしく甘つたるい、厭味な抑揚アクトセントを帯びてゐた。

「え、旦那、失禮でござんすが、一つその傘の中へご一緒に出來ませんかねえ。」

實際、誰かの影が彼の傘の下へ潛り込んだ。（或ひは潛り込むやうな眞似をしただけかも知れない。）浮浪人は彼とおし並んで、『肘で相手を探りながら』——これは兵隊の言ふ事なので——

ついて来た。ニコライは歩調をゆるめながら、くら闇の中で出来る限りこの男を見分けようとした。男はあまり背の高い方でなく、ちよつとその邊で遊んで来た町人者、と云ふやうなところがあつた。服装はうそ寒さうで、さつぱりしてゐなかつた。ぼう／＼と渦を巻いた頭には、庇の半分はなれかゝつた、びしよ濡の羅紗帽が、ちよこなんとしてゐる。見たところ、この男は瘠せた、色の浅黒い、極度な黒髪フリユネイト兒らしい。目は大きかつたが、きつとジプシイのやうにまつ黒で、ぎらぎらと光つて、黄がかつた底つやがあるに相違ない。闇の中ながら、これだけは想像がついた。年はどうやら四十前後らしく、別に酔つてはゐなかつた。

「お前はおれを知つてるのか？」とニコライは聞いた。

「スタヴローギン様——ニコライ・フセヴォードギッチでございませう。わつしは前の日曜日に停車場でね、汽車が着くとすぐ教へて貰ひましたんで。そればかりぢやありません、前からお噂は承知してをりましたんで。」

「ピョートル・エルホーゼンスキイからだらう？ お前……お前かね、懲役人のフェーデカは？」

「洗禮の時にや、フョードル・フョードロギッチといふ名を貰ひましたがね。生みの母親は今でもやつぱり、この近在にをりますんで。神様と仲よしのお婆さんでしてね、腰が曲つて行く一方でござんすよ。毎日、晝となく夜となく、わつし共の事を神様に祈つてをります。さういふ譯でござんすから、何も暖爐ベイザカの上で、ぼんやり閑を潰してばかりゐる譯ぢやありませんので。」

「お前は懲役から逃げ出したんだらう？」

「へえ、少々運勢を變へました。聖書も鐘も教會のお勤めも、すつかり抛り出してしましました。なぜつて、わたしはずつと一生涯、懲役の宣告を受けてたんですが、それぢやあどうもあまり待遠すぎますんで。」

「こゝで何をしてる？」

「朝から晩まで何と云ふことなしに、一日ぶらく／＼してをります。伯父の奴が賈金の事で、やつぱりこゝの監獄に食らひ込んでましたが、先週たうとう亡くなりましたのでね、わつしもその供養を營むために、石を二十ばかり犬にくらはしてやりましたが……まあ、わつし等のする事と言つちや、今のところ、それくらゐなものでございませう。そのほかにピョートルの旦那が、ロセヤ全國を渡つて歩くことが出来る、商人の旅行免狀を手に入れてやると仰しやつたので、かたがたそのご親切を待つてゐますんで。『實際うちの親爺は英吉利俱樂部で歌留多に負けて、それでお前を擲き賣つたんだからなあ。どうもこれは不公平な人情を缺いた仕うちだよ。』とかう仰しやいましてね。いかゞでせう、旦那、お茶の一杯も飲んで、暖まりたいのでござんすが、あなたもどうか三留ばかり恵んでやつて下さいませんか。」

「ぢや、貴様はこゝで待ち伏せしてゐたんだな。俺はそんなこと嫌ひだ。一たい誰の云ひつけなのだ？」

「云ひつけなんかと仰しやいまして、そんな事は決してありや致しません。わつしはたゞ、

世間に知れ渡つた旦那様のお情け深さを、承知で参りましたんで。わつし等の収入と申しちや、旦那もご承知の通り、ほんの蚊の涙くらゐなものでございますからねえ。ついこのあひだ金曜日
にや、饅頭にありつきましてね、まるでマルティンが石鱈でも喰べるやうに、うんと腹一杯つめ
込みましたよ。ところが、それ以來なんにも喰べない始末なんで。次の日は辛抱しました。その
次の日もまた喰べず了ひでございました。で、川の水をもうたらふく飲みましたから、まるで腹
の中に魚でも飼つてるやうで……かういふ譯でござんすから、一つ旦那様のお情けでいかゞでせ
う。實はつい丁度そのところで、仲よしの小母さんが待つてをりますが、そこへは金を持たず
に行く譯にや参りませんでねえ。」

「一體ピョートルの旦那は俺に代つて、何を貴様に約束したんだい？」

「別に約束なすつたといふ譯ぢやありませんが、もしかしたら、その時の都合次第で、何か旦那
のお役に立つ事があるかも知れんと、これだけのお話しがあつたので。どういふ仕事か、そり
や明ら様に聞かして下さいませんでしたよ。なぜつてピョートルの旦那は、わつしに哥薩克みた
いなつらい辛抱が出来るかどうか、試してごらんなさるきりで、ちつともわつしといふ人間を信
用して下さらないんで。」

「なぜだい？」

「ピョートルの旦那は豪い天文学者で、空をめぐる星を一つ／＼そらで知つてをられますが、
あの方でも難を言へばあるんでございますよ。ところが、わつしは旦那の前へ出ると、まるで神

様の前へ出たやうな気が致しますんで。なぜつて、旦那、あなたの事はいろ／＼と伺つてをりま
すものね。ピョートルの旦那はあゝいふ人、旦那は旦那でまた別な人でござんすからね。あの方
は人の事でも、あれは極道だと言つたら、もう極道者よりほかなんにも分かりやしません。また
あいつは馬鹿だと言つたら、もう馬鹿のほかにはその男の呼び方を知らない、といった風でござ
います。しかし、わつしも火曜水曜は、たゞの馬鹿かも知れないが、木曜日にやあの方より伶俐
になるかも知れませんからね。ところで今あの方は、わつしが一生懸命に旅行免状をほしがつ
てる事だけ知つて（全くロセヤではこの免状なしぢや、どうにも仕様がありませんからね）、まる
でわつしの靈でも生捕つたやうに思つてゐらつしやる。旦那、わつしは遠慮なく申しますがね、
ピョートルの旦那なんざあ、世渡りは樂なもんでございますよ。なぜつてあの方は、人間を自分
一人でかうと決めて了つて、さういふものとして暮らしてをられるんですからねえ。その上に、
どうも恐ろしいしみつたれでございますよ。あの方はよもや自分を出し抜いて、わつしが旦那と
お話をしようとは、夢にも思つてゐらつしやらないが、わつしはねえ、旦那、旦那の前へ出たら、
神様の前へ出たのも、同じやうな氣でゐますんで。もうこれで四晩もこの橋に立つて、旦那のお
いでを待つてるんでございますよ。あの方の力を借りなくつたつて、こつそり自分のすべき事を
しようと思ひましてね。考へて見ると同じことでも、草鞋より靴に頭を下げる方が、餘つほど氣
が利いてますからね。」

「おれが夜中にこの橋を通るなんて、一たい誰がお前に言つたんだ？」

「それは白状いたしますが、わきの方からひよつくり小耳に挟みましたんで。つまり、レビヤードキン大尉の迂濶から出た事なんで。何しろあの人は、腹ん中にもものを藏つて置くつて事が、どうしても出来ない性分でございますね……で、三日三晩つらい目をした駄賃に三ルーブリだけ、且那樣のお情けに預る事が出来ませんでせうか。着物の濡れた事などは、もう諦めて何も申しませんよ。」

「おれは左だ、貴様右へ行くんだらう。橋はもうお了ひだ。いゝか、フォードル、おれは自分の言つた事を、一度ですつかり呑み込んで貰ふのが好きな質なんだ。おれは一哥だつて貴様にやりやしない。今後橋の上だらうがどこだらうが、おれの目にかゝつたら承知しないぞ。おれは貴様なんかには用はない、また今後だつてありやしないんだ。もし言ふ事を聞かぬけりや、ふん縛つて警察へ突き出すぞ。とつと行つちまへ！」

「えゝまあ、せめてお伴の駄賃でも投げて下さいませんか、少しはお氣晴らしになりましたらうに。」

「行かんか！」

「ですが、且那はこゝの道をご存じでございますか？ あそこら邊は全くひどい露路つゞきでござんしてね……何ならご案内いたしまするか。本當にこの町は、もうまるで悪魔が籠の中へ入られて、振り廻したやうなところでございますよ。」

「えゝつ、ふん縛つて了ふぞ！」 ニコライは恐ろしいし權幕で振り返つた。

「まあ且那、考へても下さいまし。頼りのない人間を苛めるくらゐ、雑作もない事ぢやござんせんか？」

「いや、貴様はなか／＼自信が強いらしいな！」

「なに、且那、わつしはあなたを信じてゐるので、決して自分を信じてる譯ぢやござんせん。」

「おれは貴様なんぞにまるで用はありやしない、一と言つたら分かるだらう！」

「ところが、わつしの方はあなたに用があるんで、へえ。ぢや且那、お歸り道を待つてをりますよ、もう仕様がなない。」

「おれはぢやんと言つとくぞ——今度あつたら、ふん縛つてやるから。」

「それぢや一つ繩でも用意して置ませう。ぢや、且那ご機嫌よろしう。お傘の中へ入れて頂きまして、どうも有り難うござんした。これ一つだけでも、且那の事は棺へ入るまで忘れは致しません。」

彼はやつと傍を離れた。ニコライは不安げな様子で、目ざすところまで辿り着いた。まるで天から降つたやうなこの男は、自分がニコライになくてならぬ人間だ、とかう信じ切つて、どこまでも剛々しく、この事を知らせようと焦慮つてゐる。それに全體として、この男は彼を恐れ憚る様子がなかつた。しかしこの浮浪漢も全然でたためを言つたのではないらしい。實際、彼はピョートルに内緒で自分の一量見で、ニコライのご用を勤めさして貰はうと、ねだつたのかも知れない。これは何より注目すべき事實だつた。

ニコライの辿り着いた家は、兩側から垣根に挟まれた、淋しい横町にあつた。垣根の向ふには菜園が續いて、全く字義通りに町外れだつた。それは全く孤立した、小さな木造の家で、まだほんの建てたばかりらしく、羽目板も打つてなかつた。一つの窓はわざと鎧戸を開け放して、窓じきりには蠟燭が立ててあつた——それは今夜おそく来る筈になつてゐる客人のため、燭臺の代りにしようといふ積りらしい。まだ三十歩ばかり手前の邊から、入り口に立つてゐる脊の高い男の姿を見わけることが出来た。多分これはこの家の主が待遠しさの餘り、往來の様子を見に出たものであらう。そればかりかその男の自然たさうな、その癖おづ／＼したやうな聲さへ聞こえた。

「そこにいらつしやるのは、あなたですか？　あなたですか？」

「僕です。」家の入口まで辿り着いて傘を窄めた時、ニコライは初めてかう答へた。

「まあやつとのことで！」とレビヤードキン大尉は（これが男の正體だつた）急に足踏みして、騒ぎ出した。

「さあ、お傘をこつちへ下さい。おや、大變ぬれてをりますなあ。一つこの隅の床に擴げときませう。さあどうぞ、さあ。」

廊下から、二本の蠟燭で照された部屋に通ずる戸口は、一ぱいに開け擴げてあつた。

「本當にぜひ來るといふあなたのお言葉がなかつたら、とても本當にしなかつたかも知れませ

んよ。」

「十二時四十五分だね。」ニコライは部屋へ入りながら、ちよつと時計を眺めた。

「しかも、おまけに雨まで降つてをりますし——それに、なか／＼道のりがありますでなあ……わたしは時計を持つてをりません。ところで、窓の外を見ても野菜畑ばかりで、全くその……うき世から遠ざかつて了ひますな……しかし何も敢て不平を言ふ譯ぢやありません。どうして、どうしてそんな僭越な事を……たゞ一週間といふもの、ひたすら待ち侘びてをつたものですから……それに、すつかり解決をつけて了ひたいと思ひましてね。」

「何だつて？」

「自分の運命が聞きたいのでございますよ。さあどうぞ」

彼は卓の傍らなる長椅子を示しつつ、小腰を屈めてかう言つた。

ニコライは邊りを見廻した。部屋は狭苦しくて、天井が低く、道具類もほんのなくてかなはぬものばかりだつた——幾つかの椅子と一脚の長椅子（これはみな木造りで、やはり拵へたばかりらしく、皮も布も何にも張つてなく、肘も附いてゐなかつた）、二脚の菩提樹の卓（一脚の方は長椅子の傍に据ゑてあり、いま一脚は隅の方に置いて、卓布を掛けてあつたが、何やら一杯ごたごたと載つけた上から、素晴らしく綺麗なナプキンが被せてある）——これだけがすべてだつた。しかし、全體として部屋の内は、驚くばかり清潔に手入れがしてあるらしかつた。レビヤードキン大尉は、もう八日ばかり酒を飲まなかつた。彼の顔は何だかげつそりして、黄色みを帯び、目

つきはきよとくして、好奇の色を浮かべ、いかにも何か腑に落ちないやうな表情を呈してゐた。彼はどんな調子でニコライに話しかけたものか、またいきなりどういふ調子を擱んだらより多く有利なのか、それがまだ自分にもはつきり分かつてゐなかつた。これはもうあり／＼と面に現はれてゐた。

「ご覧の通り、」と彼は邊りを指さした。「まるでゾシマ長老のやうな暮らしをして居ります。禁欲、孤獨、缺乏——まるで古の騎士が、誓ひでも立てたやうですよ。」

「古の騎士がそんな誓ひを立てたと思ひますか？」

「いや、或ひは出たら目を言つたかも知れません。どうも悲しい事に、わたしは十分の教育を受けて居りませんのでね！ あゝ、わたしは一切を亡ぼして了ひました？ 實はね、ニコライさん、わたしはこゝで初めて覺醒して、愧づべき欲望を抛ちました。盃一杯は愚か、一つ滴も飲みません！ この一隅に蟄居して、この六日間、良心の安らかなになつたのを感じます。部屋の壁さへも、ちやうど自然を連想させるやうに、松脂の香りがしてをりますよ。あゝ、わたしは何といふ人間だつたのでせう、何をしてをつたのでせう？」

夜は吐息す泊りさへなく

晝は晝とて舌を吐きつゝ……

天才詩人の言葉を借りると、全くこの通りですよ！ しかし……まあ大變ぬれておしまひになりましたなあ……お茶を一杯いかにですか？」

「構はないで下さい。」

「湯沸は七時すぎから煮立つてをりましたが、しかし……消えて了つたのです……この世に於けるすべての物のごとく。太陽でさへそのうちに順が廻つて来れば、自然に消えて了ふと言ひますからなあ……もつとも、お入用でしたらまた拵へますよ。アガーフィヤはまだ寢て居りませんから。」

「ときに君、マリヤは……」

「こゝです、こゝです。」とレビヤードキンはすぐに小聲で引き取つた。「ちよつと覗いてご覧になりますか？」彼は次の部屋との境になつてゐる、閉めきつた戸を指さした。

「寢てやしないかね？」

「おゝ、どうして／＼、そんな事があつてよいのですか！ それどころか、もう夕方から待ち兼ねて居ります。そして、先刻おいになつた事が知れると、早速お化粧をしたくらゐですかなあ。」と彼を口を歪めて、巫山戯た薄笑ひを浮かべようとしたが、すぐにまた引つ込めて了つた。

「全體として？ どんな風だね？」ニコライは顔を顰めながら聞いた。

「全體として？ それはご自分でご承知の通りです。（と彼は氣の毒さうに肩をすくめた。）ところで今は……今はちよつと坐つて、歌留多の占ひをして居ります……」

「よろしい、後にしよう。まづ君の方から片づけなきやならない。」

ニコライは椅子に腰を据ゑた。

大尉はもう長椅子に坐る勇氣がなくて、すぐに自分も別な椅子を引き寄せた。そして、びくびくもので、相手の言葉を待ち設けながら、體を屈めて謹聽の態度を取つた。

「あの隅つこの方に卓布クローズが被せてあるのは、一たい何です？」突然ニコイラは氣がついて、かう訊ねた。

「あれでございませうか？」レビヤードキンも同じく振り向いた。「あれはあなたご自身のお恵みで出来たものでございませう。言はばまあ、引つ越し祝ひといつたやうな譯で……それに、遠路のところをわざわざ、お運び下さる事ですし、また自然それに伴なふお疲れなども考へましてな。」と彼は恐悦げにひひと笑つた。それから席を立つて、爪立ちで片隅の卓に近寄り、そうつと恭クローズしげに布を取りのけた。

その下からは用意の夜食が現はれた。ハム、犢肉、鰯、チーズ、緑色がかつた小さなウオートカの壘、長いポルドー酒の壘——かういふものがすべて小綺麗に、順序をわきまへて、手際よく配列してあつた。

「これは君のお骨折りかね？」

「わたしでございませう。もう昨日からかゝつて、出来るだけの事をしましたので……あなたに敬意を表しようと思つて……マリヤはかういふ事になると、ご承知の通り無頓着でございませうからなあ。まあ、とにかく、あなたご自身のお恵みで出来たもので。あなたご自身のものでござい

ます。なぜと言つて、この家の主おまじはあなたでして、わたしぢやありませんからね。わたしなんぞはまあ、あなたの番頭と云つたやうな格でございませう。しかし何と言つても、何と言つても、ニコライ様、何といつても、わたしは精神的獨立をもつてをります！ どうかたつた一つ残つたわたしのこの財産を、取り上げないで下さい！」彼は一人で悦よろこに入りながら、かう結んだ。

「ふむ！……君はまた坐つたらどうだね。」

「いや、どうも有り難うございませう。有り難うはございませうが、それでも獨立性をもつた人間です！（彼は坐つた。） おゝ、ニコライ様、わたしこの胸は煮えくり返るやうで、とてもご光來が待ちきれないだらう、と思はれるくらゐでございませう！ さあ、今こそ運命を決して下さい、わたしの運命とそして……あの不幸な女の運命を……その上で……その上で昔よくやつたやうに、あなたの前にすべてを吐露してしまひます、ちやうど四年以前と同じやうにね。あの時分あなたは、わたしのやうな者のいふ事でも聞いて下さつたし、また詩も讀んで聞かして下さいましたよ……あのころ人がわたしの事をあなたのファルスタッフ——沙翁の書いたファルスタッフだと言つてをりましたが、それは言はれても構はんです。あなたはわたしの運命に甚大なる影響を與へた人ですからなあ！……わたしはいま非常な恐怖を抱いてをります。そして、たゞ／＼あなた一人から、助言と光明を待つて居るのです。ピョートルさんがわたしに恐ろしい仕向けをされるので！」

ニコライはもの珍らしげに耳を傾けながら、ぢつと相手を見つめるのであつた。見たところ、

レビヤードキン大尉は、酒に食らひ酔ふことだけは止めたけれど、しかしなかく調和の取れた状態に戻つてゐる様子はなかつた。かういふ風な病ひ膏盲に入つた酒飲みは、結局どこなくがたびしした、ぼうつと煙のかゝつたやうな處が出来て、何かしら傷やけどなはれたやうな感じのする、氣違ひじみた傾向が、次第に明瞭になつてゆくものである。もつとも、必要な場合には人並みに嘘もつくし、狡智も弄するし、悪企みもするには相違ないけれど。

「大尉、僕の見たところでは、君はこの四年間少しも變らないね。」前よりいくぶん優しい調子で、ニコライはかう言ひ出した。「ふつう人間の後半生は、たゞ前半生に蓄積した習慣のみで成り立つといふが、どうやら本當の事らしいね。」

「何といふ高遠な言葉でせう！ あなたは人生の謎をお解きになりましたよ！」なかば悪く巫山戯ながら、なかばわざとならぬ感激に打たれて（彼はかうした警句が大好きだったので）、大尉はかう叫んだ。「ニコライ様、あなたの仰しやつたお言葉の中で、後にも先にもたつた一つ覺えてをるのがあります。これはあなたがまだ彼得堡にゐらつしやる時分の事で、『常識にすら反抗して立つためには、眞の偉人となるを要す』とかう云ふのでございます！」

「ふん、それと同じやうに『或ひは馬鹿者たるを要す』とも言へるね。」

「さやう、まあ馬鹿者でもいゝでせう。とにかくあなたは一生を警句で埋めてゐらつしやる。ところが、あの連中はどうでせう？ リプーチンにしろ、ピョートルさんにしろ、せめて何か似たやうな事でも言へますか？ あゝ、ピョートルさんは實に慘酷な仕向けをなさいますよ……」

「しかし、君はどうだね、大尉、君は何といふ行爲をしたのだ？」

「酒の上でございます。それにわたしは無限に敵をもつてをりますのでね！ しかし今はもうすつかり、何もかも済んで了ひました。で、わたしも蛇のやうに更新してゐるところでございませう。ニコライ様、實はわたしは遺言狀を書いてをります。いや、もう書いてしまつたので。」

「それは珍聞だね。一たい何を遺さうといふんだね、そして誰に？」

「祖國と、人類と、大學生に。ニコライ様、わたしは新聞である亞米利加人の傳記を讀みましたが、その男は莫大な財産を工業と積極的科學に、また自分の遺骨を學生に——つまり彼地じほうの大學へ寄附した上、皮を太鼓に張らしたのです。たゞし、夜晝なしにその太鼓で、亞米利加の國歌を奏するといふ條件でね。あゝ、悲しい哉、北米合衆國の奔放な思想にくらべたら、われ／＼は全く一寸法師も同然ですなあ！ 露西亞は自然の戯れです、理性の戯れぢやありません。まあ、假りにわたしが自分の皮を、初めて軍務に服した阿克モーリンスキイ聯隊へ、太鼓の張代しやうだいに寄附して、毎日隊の前で露西亞の國歌を奏してくれ、と言つてご覧なさい、忽ちこれは自由思想だと言つて、皮は差し止めになつて了ひますから……それであ、大學生の方だけにして置いたのです。わたしは自分の骨を大學へ遺すつもりでございませう。但し、その額へ永久に『悔悟せる自由思想家』といふ文字を入れた札を、立派に貼り附けるといふ條件つきでございませう。まあ、かういふ譯なんぞ！」

大尉は熱くなつて喋り立てた。勿論、今はすつかり、亞米利加人の遺言の美しさを信じきつて

みたが、しかし彼は何と言つても、ずるい根性の男だから、もう長いあひだ道化役に廻つて仕へてゐる、ニコライを笑はさうと云ふ了簡も、大いにあつたのである。しかし、こちらはにこりともしなかつた。それどころか、妙にうさん臭さうな調子で訊ねた。

「して見ると、君は生きてる中に遺言を発表して、褒美にありつかうと思つてるんだね？」

「まあ、さうしといつても宜しうございます、ニコライ様、さうしても構ひませんか？」とレビヤドーキンは大事を取りながら、顔色をうかぶつた。「實際わたしの運命はどうでせう！ 今では詩を書く事さへ止めて了ひました。いつかの頃は、あなたもわたしの詩を興がつて、聞いて下すつたものですがねえ。ニコライさん、お憶えですか、ほら酒の席などでね？ しかしわたしの筆にも終りが來ました。ところで、たゞ一つの詩を作りました。丁度ゴーゴリが『最後の物語』を書いたやうにね。憶えておいでですか、ゴーゴリは露西亞の國に向つて、この物語は自分の胸から『絞り出された』ものだ、とかう宣言したぢやありませんか。わたしもそれと同じで、こんど書いたのが絶筆でございます。」

「どんな詩だね？」

「『もしも彼女が足を折りなば』と云ふので！」

「なあんだつて？」

大尉はたゞこれのみ待ち受けてゐたのである。彼は自分の詩を無限に尊重して、高い評價を抱いてゐたが、それと同時に、一種狡猾な心の分裂作用のために、以前ニコライがよく彼の詩に興

がつて、時とすると腹を抱へて笑ふのを、ない／＼悦んでゐたのである。かういふ次第で、同時に二つの目的——自分の詩的満足とご機嫌とり——が達せられる譯だつた。けれども、今日は第三の目的も潜んでゐた。これは一種特別な、しかも極めて尻こそばゆい目的だつた。ほかでもない、大尉は自分の詩を舞臺へ持ち出して、自分が何よりも險呑に感じ、かつ何よりも失策を自覺してゐる一つの點に關して、自己辯護を企てたのである。

「『もしも彼女が足を折りなば』、つまり馬から落ちた場合なので。いや、夢ですよ、ニコライさん、謔言ですよ。しかし詩人の謔言です。實はあるとき通りすがりに、一人の騎馬の美人に出會つて、その美に打たれた。そして、この實際的な疑問を起しました。『一たいその時はどうだらう？』——つまり、その今のやうな場合ですな。なあに、分かり切つた事です。崇拜者どもはみんな尻ごみして、花婿の候補者もどこかへ行つて了ふ。急に朝寒が來て、水つ涕を駈らぬばかり、その時たゞ一人の詩人のみが、壓し挫がれた心臓を胸に抱きながら、變らぬ愛を捧げてゐる、とかういふ譯なんです。ねえニコライさん、たとへ風のやうな蟲けらでも、戀する事は出來ますよ。決して法律で禁められてはをりません。ところが、それ令嬢はわたしの手紙や詩を讀んで、腹を立てられたのでございます。あなたまで憤慨なすつたといふ事ですが、一たい本當なのでせうか？ 實に悲しむべき事です。わたしはほとんど信じ兼ねたくらゐるのでございますよ！ ねえ、ただほんの想像ばかりで、人に迷惑の掛けやうがないぢやありませんか？ おまけに正直なところ、これにはリプーテンが關係してゐるのでございます。『送るがいく、送るがいく、人間といふ者は、

誰でも通信の特権を持つてゐるんだ』などといふものですから、それでわたしも出して見たやうな譯で。」

「君は確か自分で自分を、あの女の花婿に推薦した筈だね？」

「敵です、敵です、敵の企みです！」

「その詩を言つて見給へ！」ニコライは酷しい調子でかう遮つた。

「謔言です、もうまるつきり謔言です。」

けれども、やはり彼は身を反らして、片手を差し伸ばしながら、吟じ始めた。

美しき人の中にも美しき

君は圖らず足折りて

前に倍して魅力を増しぬ

前に倍して想ひを増しぬ

既に烈しく戀へる男は

「もう澤山だ！」とニコライは手を振つた。

「わたしは彼得堡を空想してをるのです。」とレビヤードキンは、まるで詩なんか讀んだことは夢にもないやうな口調で、大急ぎで話頭を轉じた。「わたしは更生を夢見てをるのです……恩人！ニコライさん！あなたはわたしに路銀を恵むのを、厭だとは仰しやらんでせうね。あなたに望みをつないで構はんでせうなあ？わたしはこの一週間まるで太陽か何ぞのやうに、あな

たを待ち焦れてをつたのです。」

「いや、駄目だよ。もう眞平ご免蒙る。僕は金なんかほとんど失くなつて了つた。それに、どうしてさうく君に金を上げなくちやならないのだ？……」

ニコライは急に腹を立てたらしい。彼は言葉みじかに素つ氣ない調子で、大尉の不行跡——亂醉、放言、マリヤに宛てられた金の浪費、それから妹を僧院から奪ひ出したこと、秘密發表の脅し文句を並べた手紙を送つた事、ダーリヤに不正な行動を敢てした事などを、一つ／＼數へ立てた。大尉は體を揺すぶつたり、手眞似をしたりして、言ひ譯を試みようとしたが、ニコライはその度に高壓的な態度で押し止めるのであつた。

「まあ、聞き給へ。」と彼は最後にかう言つた。「君は始終『一家の恥辱』てな事を書いてゐるが、君の妹がスタヴローギンと正當の結婚をしてゐるといふ事に、一たいどんな恥辱があるんだい？」

「しかし、秘密の結婚ですからなあ、ニコライさん、秘密の結婚、永久に秘密の結婚ですからなあ。わたしはあなたから金を頂いてをりますが、もし人から出し抜けに『それはどうした金だ？』と聞かれたら、何と返答します。わたしは束縛を受けてをりますから、それに返答が出来ないぢやありませんか。それが妹のためにも、また一家の名譽のためにも、非常な損害を來しますので。」

大尉は聲を高めた。これは彼の十八番で、彼はこれに固く望みをつないでゐた。しかし悲しい

哉！ 彼はそのとき、どんな恐ろしい報知が待ち設けてあるか、少しも豫想できなかつたのである。ニコライは、極めて些細な日常茶飯事でも語るやうに、近いうちに——事によつたら明日か明後日あたり、自分の結婚を一般に公表しようと思つてゐる。『警察へも社會全體へも知らせる積りだ。』従つて一家の恥辱といふ問題も、また同時に補助金といふ問題も、自然消滅すべきだと告げた。大尉は目を剝くのみで、相手のいふ事が合點できなかつた。で、ニコライはもう一度、よく分かるやうに説明を餘儀なくされた。

「でも、あれは……氣ちがひぢやありませんか？」

「それはまた相當の方法を講じるさ。」

「けれど……お母様は何と仰しやいますかしらん？」

「なあに、そりやどうとも勝手にするだらうよ。」

「しかし、奥さんをお宅へお入れになるのでせう？」

「或ひはさうするかも知れん。しかし、それは全く君の知つた事ぢやないのだ。君にはまるつきり關係のない事だよ。」

「どうして關係のない事ですか？」と大尉は叫んだ。「わたしがどういふ譯で……？」

「ふん、あたりまへぢやないか。君なんか僕の家へ入れやしないよ。」

「でもわたしは親戚ぢやありませんか？」

「そんな親戚は誰だつて眞つ平だよ。ね、さうなつて了へば、君に金を上げる必要がどこにあ

るだらう、考へても見給へ。」

「ニコライさん、ニコライさん、そんな事があつてよいものですか。まあ、よく考へてご覽なさいまし。まさかあなただつてその……我とわが身を亡ぼすやうな事を、なさりたくはありませんまい……第一、世間が何と思ふでせう、何と言ふでせう？」

「君の世間ならさぞ恐ろしいだらうよ。僕はあのとき酒もりの後で、ふいと氣が向いたものだから、酒の飲みくらをして、それに負けて君の妹と結婚したんだ。だから、今度はこの事を公然と披露するのだ……それが今の僕に取つて慰みにもなるかと思つてね。」

かう言つた彼の調子は殊にいら／＼してゐたので、レビヤードキンはぞつとしながら、その言葉を感じ始めた。

「しかし、それにしてもわたしは、わたしは一たいどうなるんです。この場合わたしのことが一ばん肝腎ぢやありませんか！……大方それはご冗談でせう、ニコライさん？」

「いや、冗談ぢやない。」

「ぢや、どうともご勝手に。しかしわたしは仰しやる事を本當にしませんよ……わたしは訴訟でも起しますから。」

「大尉、君はざるぶん馬鹿だねえ。」

「構ひませんよ。わたしとしては、それよりほかにしやうがないんです！」と大尉はすつかり脱線して了つた。「以前は何と言つても、あれがいろんな手傳ひなどしてゐたので、隅つこの方

に寝る所だけでも宛がつて貰へましたが、今あなたに捨てられたら、一たいどうなると思ひです？」

「だつて、君は彼得堡へ出かけて、何とか方法を變へると言つてるぢやないか。あゝさうだ、ついでに聞いて置くが、君が彼得堡へ行くのは、密訴のためだとか聞いたが、それは一たい本當なのかね？ つまり、ほかの者を賣つた褒美に、お赦しを頂かうといふ心算かね。」

大尉は口をばくりと開けて、目を剥き出したまゝ、とみに答へも出なかつた。

「ねえ、大尉。」急に恐ろしく眞面目な調子になつて、卓の上へ屈みながら、スタヴローギンはかう言つた。

これまで彼は妙にあやふやな調子で話してゐたので、道化の役廻りではかなり経験を積んだレビヤードキンも、今の今まで、果たして主人公が怒つてるのか、それともちよつと冗談を言つてるのか、本當に結婚發表などといふ奇怪な考へを抱いてゐるのか、或ひはたゞ自分をからかつてゐるのか、その邊がちよつと怪しく感じられた。しかし今といふ今は、スタヴローギンのなみなみならぬ嚴つゝい顔つきが、相手を説伏せねばやまぬ強い力を持つてゐたので、大尉は背筋に冷水を浴びせられたやうな氣がした。

「ねえ、大尉、よく聞いてまつ直ぐに返事をし給へ。君はもう何か密告したのか、それともまだなのか？ 本當に何もかもやつつけて了つたのかい？ まつ直ぐに返事し給へ。何か下らん事で、妙な手紙を出しやしなかつたかい？」

「いゝえ、まだ何も致しま……そんな事は考へもしませんでした。」と大尉は身じろぎもせず、に相手を見つめた。

「ふん、考へもしなかつたなんて、そりや、君、嘘だよ。君が彼得堡へ行きたがるのも、つまりそれがためなんだ。もし手紙を出さなかつたとすれば、この町の誰かに口を辻らしはしなかつたかね？ まつ直ぐに返事し給へ、僕もちよつと聞き込んだ事があるんだから。」

「酔つた勢ひでリプーチンにその……リプーチンの裏切り者め、おれは自分の心臓を明けて見せてやつたのに……」哀れな大尉はかう呟いた。

「心臓は心臓として置いてさ、そんな馬鹿な眞似をする必要はないぢやないか。君に何か思案があつたら、ちやんと腹の中に藏つとくがいゝぢやないか。いま時の惻巧な人はそんなにべらべら喋らないで、ぢつと黙つてるよ。」

「ニコライさん、」と大尉はぶる／＼慄へ出した。「だと言つて、あなたご自身、何一つかゝりあつてゐらつしやらないぢやありませんか。わたしは何もあなたの事を……」

「まさか君だつて、自分の米櫃を訴へる勇氣はなかつたらうよ。」

「ニコライさん、まあお察しを願ひます、お察しを……」

大尉は自暴自棄になつて、涙ながらに、この四年間の身の上を早口に語り始めた。それは柄にもない仕事に引き摺り込まれながら、しかも淫酒放埒に氣を取られて、つい今の今までその仕事の重大な意義を悟り得なかつた馬鹿者の、思ひ切つて間の抜けた物語だつた。彼の話しによると、

まだ彼得堡にゐた頃から、『最初はたゞほんの友達に對するお付き合ひとして、大學生ではないけれど、思想に忠實な大學生といふ心持で、夢中になつてその運動に没頭』した。そして、何が何だか譯は分からず、たゞ『なんの罪もなく』色んな紙きれ(譯者註：革命の宣言書)を、よその階子段へ撒き散らしたり、一時に何十枚と固めて戸口の呼鈴の傍へ置いて來たり、新聞の代りに振ぢ込んだり、芝居へ持つて行つたり、帽子の中へ突つ込んだり、衣囊(かぶ)の中へ落したりした。その後、かういふ仲間から金さへ貰ふやうになつた。『だと言つて、わたしの収入がどんなものか、大抵ご承知でせうからなあ！』かうして二縣にわたつて各郡々々へ、『ありとあらゆる紙くづ』を撒いて歩いたのである。

「お、ニコライさん、」と彼は叫んだ。「何より一ばん氣がさしたのは、それがぜんく民法に——といふより、寧ろ國法に背いてゐる點でした！ 何が刷つてあるかと思ふと、まるで藪から棒に、股木(藪草の取)を持つて出て來いだの、朝すかんびんで家を出ても、晩には金持ちで歸れる事を記憶せよだのと——實に驚くぢやありませんか！ わたしはもう身慄ひがつくやうでしたが、それでもやつぱり撒き散らしてをりました。かと思ふと、また出し抜けに、これといふ譯もないのに、露西亞全國の人に向つて、五行か六行印刷したものですよ。『速かに教會を鎖し、神を撲滅せよ。結婚制度を破壊し、相續權を撲滅し、すべからく刃をもつて立つべし。』とこんな事ばかり並らべたものです。その後はどうだつたか、てんで覺えてもをりませんよ。ところが、この五行ばかりの紙つ切れのために、すんでの事にやつつけられるところでした。ある聯隊で、

將校連に散々ぶちめされましたが、まあ有り難い事に、赦してくれました。また去年カラワーエフに、佛蘭西で拵へた賈(あ)の十留札を渡した時などは、危くふん捕まらないばかりでした。まあいゝ鹽梅に、丁度その時分カラワーエフが、酔つ拂つて池で溺れ死んだので、わたしの仕業を見抜く暇がなかつたのですよ。こゝではギルギンスキイの所で、婦人共有(フイシヤルライ)の自由を宣言しました。六月にはまた——郡で紙撒きをしました。何でもまたやらされるさうでございます……ピョートルさんが出し抜けにわたしを掴まへて、お前は何でも言ふ事を聞かなくちやならんぞと、言ひ聞かして下さいましたのでね。もう前から脅かしてゐらつしやいますよ。ねえ、あの日曜日の苛めやうと言つたら、本當にまあどうでせう！ ニコライさん、わたしは奴隷です、蟲けらです。が、但し神ではありません。そこが詩人ヂェルジャーギンと違ふ所です。しかしわたしの収入といつたら、實際ご存じの通りでございますからなあ！」

ニコイはしじう好奇の色を浮かべながら聞いてゐた。「僕のまるで知らない事があつた。」と彼は言つた。「もつとも君ならどんな事だつてし兼ねないよ……ねえ君、」彼はちよつと考へてかう言ひ出した。「もしなんなら、あの連中に——どの連中か分かるだらう——あの連中から言つたらいゝだらう。つまりリプーチンが出たら目を言つたのだ。實はスタヴローギンにも後ろ暗い事があるかと思つたので、密告と言つて脅かして、もつと金を絞らうと考へただけなんだ、とこんな風にね……分かつたかい！」

「ニコライさん、若旦那、一たいわたしの身にはそんな危険が迫つてるのでせうか？ わたし

はそれをお訊ねしようと思つて、一生懸命ご光來を待つてをりましたので。」

ニコライはにたりと笑つた。

「彼得堡なぞへは、たとへ僕が路用を上げたにしろ、決して行かしてくれやしないよ……あ、もうマリヤの所へ行かねばならん時刻だ。」

彼は椅子を立つた。

「ニコライさん、マリヤの事はどうなりますので？」

「今まで幾度も言つた通りさ。」

「一たいあれは本當でございますか？」

「君はまだ本當にしないのかい？」

「ぢや、あなたは穿き古した靴のやうに、わたしを抛り出してお了ひになるのですか？」

「さあどうするか。」とニコライは笑つた。「さあ、放し給へ。」

「一つ如何でございませう。わたしが暫く入り口に立つてをりませう……ひよつと立聽きするものがないとも限りませんからね……何分ちつぽけな部屋でございますから。」

「それは思ひつきだ。一つ入り口に立つてくれ給へ。その傘をさすといふ。」

「あなたのお傘……わたしにそれだけの値うちがありませんか？」と大尉は甘つたるい口調で言つた。

「誰だつて傘ぐらゐの値うちはあるさ。」

「一句でもつて人間の権利の最小限を喝破なさいましたな……」

けれども、彼は機械的に口を動かしてゐるに過ぎなかつた。彼は今夜の報告にすっかり押し潰されたやうになつて、まるで途方に暮れて了つたのである。けれど、入り口へ出て傘を擱げるや否や、彼の變り易い狡猾な頭には、再びいつもの氣休めがごそ／＼動き出した。あの男ずるい事をして俺を騙してゐるのだ、もしさうとすれば、俺は何も恐れる事はない、かへつて向うがこつちを恐れてゐるのだ。

『もし狡い事をして、俺を騙してるとすれば、その魂膽はどういふ所にあるのだらう？』といふ疑問が、彼の頭を掻き撈るのであつた。結婚の發表などは、馬鹿げた話しに思はれた。『もつとも、あんな突飛な變人だから、何を仕出來すか分かりやしない。人を苦しめるために生きてゐるんだからな。いや、しかしあの日曜日の恥曝しな一件から、先生自身びく／＼してるとすれば、――しかも、これまでに覺えがないほど、びく／＼してるとすればどうだらう？ さうだ、だから、わざ／＼こんなところまで駆けつけてさ、自分でご披露に及ぶなんて、人を胡麻化さうとしてる。つまり、俺が喋りやしないかと思つて、おつかないのさ。おい、しつかりしなくちやいかんぜ、レビヤードキン！ 自分で披露する氣である癖に、何のためにわざ／＼よる夜なか、こそ／＼と隠れて來るんだらう？ もし恐れてをるとすれば、それはほかぢやない今だ、この今といふ時なのだ。この三四日の間が恐ろしいのだ……おい、しくじつちやいけなげ、レビヤードキン！』

『ふん、ピョートルさんをだしに使つて、脅かしやがる。おゝ、油斷がならんぞ、おゝ、油斷

がならんぞ。いや、全くどうも油断がならんぞ。ついふらくくと、リプーチンの奴に喋つてしまつたもんだからな。本當にあの連中、一たい何を企らんでやがるんだらう、今まで一度だつて分かつた事がない。また五年前のやうにこそ、始めやがつた。一たい俺が誰に密告したといふんだ？「うか／＼と誰かに手紙を出しはしなかつたか？」だつてよ。ふむ！ して見ると、ついうかうかと云つたやうな體裁で、手紙を出しても構はんと見える。事によつたら、入れ智恵を付けてるのかも知れんぞ？「君が彼得堡へ行かうといふのも、つまりそのためなんだらう」と來た。こん畜生、俺はひよいとそんな夢を見ただけなんだが、あいつはもうその夢を解いてくれた！ まるで、自分から行け行けとけしかけてるやうだ。こいつは確かに二つに一つだ。あんまり悪く巫山戯たので、少々こわくなつたか、それとも自分では少しも恐れないで、たゞ俺にみんなを密告しろと喉しかけてるか、どつちか一つなんだ！ おゝ、油断がならんぞ、レビヤードキン、どうかしくじらんやうにしてくれ！……」

彼は夢中になつて考へ込んだので、立聴きする事も忘れてしまつた。もつとも、立聴きするのは難かしい事だつた。境は分の厚い一枚扉になつてゐるうへ、話し聲も非常に低くつて、たゞ不明瞭な音が洩れて來るに過ぎなかつた。大尉は、べつと唾を吐いて、またもの案じ顔に外へ出て口笛を吹きにかゝつた。

三

マリヤの部屋は大尉の占領してゐる方に比べると、二倍くらゐ大きかつた。しかし、道具類は同様に荒削りの、粗末なものだつた。けれども、長椅子の前にある卓には、けぼ／＼しい色をした布を掛けて、その上には火をともしたラムプが置いてあつた。床には一面に立派な絨氈を敷きつめ、寢臺は部屋の端から端まである、長い緑いろの帷で仕切つてあつた。そのほか卓の傍には、大きなふつくらしした肘椅子が据ゑてあつたが、マリヤはそれに腰を掛けなかつた。片隅には、前の住まると同じやうに聖像が安置され、その前には燈明がともつてゐた。卓の上には依然として、必要缺くべからざる品々が並らべてあつた——歌留多、小鏡、唱歌本、おまけに味つき麵麩まで揃つてゐる。そのほか、べた／＼と色をつけた、繪入りの本が二冊あつた。一つは通俗むきの旅行記の抜粹で、少年の讀み物に編纂されたものだし、いま一つは軽い教訓的な、主として古武士の物語りを集めた、降誕祭や學校むきに出來たものである。それからまだ、いろんな寫眞を貼つたあるばむもあつた。なるほど大尉の言つたやうに、マリヤは客の來訪を待つてゐたが、ニコライが入つて行つた時には、長椅子の羽根枕に凭れながら、半ば横になつて眠つてゐた。客は音のせぬやうに入つて、戸を閉めると、そのまゝ動かないで、眠れる女を見廻し始めた。

マリヤがお洒落をしてると言つたのは、大尉がちよつと嘘をついたのである。彼女は、あの日曜にガラペーラ夫人の所へ行つた時と同じ、黒っぽい着物をつけ、髪もやつぱり小つぽけた鬘に束ねて、うしろ頭に載つけてゐるし、長いかさ／＼した頬も、やはりあの時と同様に剃き出したつた。ガルペーラ夫人から贈られた黒の襟巻は、丁寧に疊んで長椅子の上に置いてあつた。相變

らず彼女は毒々しく白粉を塗り、ベニ胭脂をつけてゐた。

ニコライが入つてからまる一分も経たないうちに、マリヤは自分の體に注がれた男の視線を感じたやうに、不意に目を醒まして瞳を見開き、大急ぎで身を反した。しかし客の心にも、何か奇怪なあるものが起つたに相違ない。彼は依然として一つ所に——戸の傍に突つ立つたまゝ、身動きもせず、突刺すやうな目つきで、言葉もなく執拗く彼女の顔を見つめるのだつた。或ひはこの目つきが、度を越えて嚴めしかつたかも知れないが、或ひはまた、その中に嫌悪の色——といふより、寧ろ女の驚きを樂しむやうな、意地悪い表情が浮かんだのか知れない。(しかしこれはマリヤの寝起きの目に、さう映つたばかりかも知れぬ。)とにかく、何やら期待するやうな一分間、が過ぎたとき、哀れな女の顔には、とつぜん極度の恐怖が現はれた。そして、一脈の痙攣がその上を走り過ぎると、彼女は両手をわな／＼と顫はせながら差し上げた。と、まるで物に驚いた子供のやうに、不意にわつと泣き出した。もうちよつとすてて置いたら、彼女は大聲に喚き出したかも知れぬ。しかし、客は我に返つた。一瞬にして、彼の顔つきは一變した。彼は如何にも愛想のいゝ、優しい笑みを浮かべつゝ、卓へ近寄つた。

「失禮しました。出し抜けにやつて来て、お目ざめを驚かせましたね、マリヤさん。」と彼女の方へ手を差し出しながら、彼はかう言ひ出した。

優しい聲の響きは、相當の効果を齎した。彼女は何やら思ひ出さうと努力するやうな風つきで、やはりおづ／＼と男を眺めてゐたが、それでも驚愕の色は消えて了つた。おづ／＼と手も差し伸

べた。たうとう臆病氣なほゝ笑みはその唇に動き始めた。

「いらつしやいませ、公爵。」何となく奇妙な目つきで相手を見つめながら、彼女はかう囁いた。

「大方わるい夢でも見たんでせう？」と彼は愛想よく、いよ／＼優しくほゝ笑みかけながら、言葉を續けた。

「わたしがあゝの事を夢に見たのを、どうしてご存じなのでございますか……」

かう言つて、彼女は不意にまた身慄ひしながら、一あし後ろへよろめいた。そして、わが身を守らうとでもするやうに、片手を前へ突き出しつゝ、またもや泣き出しさうな顔つきになつた。

「氣を取り直しなさい、もう澤山ですよ。何を恐れることがあるもんですか。一たいあなたは僕に氣がつかなかつたのですか？」とニコライは宥めにかゝつたが、今度は長いあひだ氣を落ちつかせる事が出来なかつた。

彼女はその憫れな頭の中に、依然として惱ましい疑惑と、重苦しい想念を抱いたまゝ、なに物かに想到しようと努めつゝ、無言に相手を見つめてゐた。おつと目を伏せてゐるかと思ふと、急にすべてを捕へるやうな視線を、ちらりと男に投げかけるのだつた。が、たうとう氣を落ち着けたと云ふよりも、寧ろ何か決心したらしい様子で、

「どうぞお願いですから、わたしの傍にお坐り下さい。後でよくお顔を見せて頂きたいのですから。」明らかに、何か新しい目的を思ひついたらしく、彼女はかなりしつかりした調子で、か

う言つた。「ですけれど、今はもう構はないで下さいまし。わたしあなたのお顔を見は致しません。下の方を向いてをります。ですからあなたも、わたしが自分でお願ひするまでは、わたしを見ないで下さいまし。さあ、お坐り下さいませんか。」彼女は寧ろ自烈たさうに、かう言ひ足した。

見たところ、新しい感覚がだん／＼烈しく、彼女の心を領して行くらしかつた。

ニコライは腰を下ろして待ち受けてゐた。かなり長い沈黙が襲うた。

「ふむ！ わたしはどうもかういふ事が、何もかも不思議に思はれてなりません。」腹立たしげにさへ聞こえる調子で、彼女は出し抜けにかう呟いた。「わたし本當に悪い夢にうなされてたのですけれど、どうしてあなたがあんな恰好をして、わたしの夢に出ていらしたのでせう？」

「え、もう夢の話しなんかやめませう。」と彼は女が止めたのも構はないで、くるりとその方へ振り向きながら、もどかしさうにかう言つた。またしても先ほどと同じ表情が、その目を掠めたやうに思はれた。彼の目に映つたところでは、彼女はいく度も男の顔を見ようと思つたけれど、一生懸命に強情を張つて、おつと下を向いてゐるらしかつた。

「ねえ公爵、彼女はとつぜん聲を高めた。「ねえ公爵……」

「なぜあなたはそつちを向いて了つたのです。なぜ僕を見ないので。こんな喜劇めいた眞似をして、どうする積りなんです？」と堪り兼ねて彼はかう叫んだ。

しかし、彼女はまるで耳に入らぬ様子で、

「ねえ公爵、」彼女は三度目にまたかう繰り返した、不愉快な心配らしい澁面を作りながら。「あなたがあのとき車の上で、結婚を披露すると仰しやつたとき、わたしもうこれで祕密がお了ひになるのかと思つて、本當にびつくりして了ひました。今はもうまるで分かりませんけれど、わたし始終さう考へもしましたし、また自分の目でもはつきり見えます——わたしはてんで不向きな女でございます。お化粧をするくらいは出来ませう。お客をお招きする事もやつぱり出来るでせう。なんの、お茶に人を呼ぶくらゐ、大して難しい事ぢやありませんからねえ。殊に召使の者もある事ですもの。けれども、やつぱりわきの方から、妙な目つきでじろ／＼見る事でせうよ。わたしは日曜の日にあの家で、いろんな事を見抜いて參りました。あの綺麗なお嬢さんは、始終わたしの方ばかりじろ／＼見てゐられました。取り分け、あなたが入つていらした時など、なほさら酷うございました。だつて、あのとき入つていらしたのは、あなたでございませう、ねえ？ またあの娘のお母さんなどは、たゞもう滑稽な上流の老婦人ですよ。うちのレヴィヤードキも、なか／＼やりましたね。わたし嘔き出すまいと思つて、いつも天井ばかり見てをりました。あすこの天井は模様入りだから、いゝ鹽梅でしたわ。あの人のお母さんは、修道院の院長さまにでもなるよりほか、仕様のない女です。わたしあの女が怖うございますの。黒い襟巻などくれましたけれどね。あの時あの女たちはみんながかりで、思ひもよらぬ方からわたしを試験しました。わたし別に怒りはしませんけれど、わたしあの時ぢつと坐つたまゝ、とてもこの女たちの親類にはなれない、とかう考へました。そりや伯爵夫人に必要なのは、たゞ精神的な資格だけござい

ます——なぜつて家事むきの方には、召使が澤山をりますからねえ。それからまた外國の旅びとをもてなすために、なにか社交的な愛嬌もいりませう。けれど、それにしても日曜の日に、あの女たちはみんな愛想を盡かしたやうに、わたしの顔を見てみました。たゞ一人ダーシャだけは、天使のやうな人です。わたしね、もしひよつとあの女たちが、わたしの事をなにかうっかり悪く云つて、あの人を悲しませはしないかと、それを心配してゐるのでございます。」

「なにも怖がる事はありません、心配しちやいけません。」とニコライは口を歪めた。

「もつとも、あの人がわたしの事を、少しくらゐ恥づかしく思つたつて、それはわたし何ともありません。だつて、かういふ場合はいつでも恥づかしいと云ふより、氣の毒な心持ちの方が勝ちますものね、もつとも、それは無論人に依りますけれど。全くわたしの方が、あの人達を氣の毒がるべきで、あの女たちがわたしを氣毒がるすじのない事は、あの人がちやんとご存じでございますもの。」

「あなたは恐ろしくあの女たちに腹を立ててるやうですね、マリヤさん？」

「誰、わたし？ いゝえ、」彼女は率直な微笑を浮かべた。「決してそんな事ありません。わたしはあるとき、皆さんの様子を見てをりましたが、あなた方はみんなてんでに腹を立てて、みんながやゝ／＼言ひ合つてゐつらしやる。仲直りはなさるけれど、眞底から打ち明けて笑ひ合へないんですもの。あれだけお金がありながら、楽しみと言つたら幾らもない——わたしかう思ふと厭になつて了ひました。けれども、わたしはいま自分よりほか、たれも氣毒でなくなりました。」

「ちよつと人から聞きましたが、あなたは僕の不在中、兄さんと二人つきりで、随分いやな思ひをして暮らしたさうですね？」

「一たいまあ誰があなたにそんな事を言つたのでせう？ 出たら目ばかり、今の方がずつと厭ですよ。今はよくない夢ばかり見てをります。よくない夢ばかり見るやうになつた譯は、あなたがこゝへいらしたからでございます。本當にまあ、あなたは何のために、姿をお見せになつたのでせう。お願ひですから、聞かせて下さいな。」

「あなたはもう一ど僧院へ行きたかありませんか？」

「ほうら、わたしはあの人達がまた僧院を勧めるだらうと、前から蟲が知らせてゐた？ あなたの僧院なんか別に珍しかありませんよ！ それに、何だつてそんなところへ行くのです、何のために今さら入つて行くのです？ 今はもうほんの一人ぼつちなんですよ！ 三度目の生活を始めようなんて、わたしにはもうおそ過ぎます。」

「あなたはどうしたのか、酷く腹を立ててゐますね。もしや僕の愛が醒めやしないかと思つてそんな事を心配してるんぢやありませんか？」

「あなたの事なんか、わたしちつとも心配しちやありません。わたしかへつて自分の方から、誰かに愛想を盡かしはしないかと、それを心配してるくらゐなんですよ。」

彼女はさも輕蔑したやうに薄笑ひを洩らした。

「わたしはあの人に對して、きつと何か大變な間違ひをしたに相違ない。」出し抜けに彼女は

獨り言のやうにかう言ひ足した。「たゞ、どんな間違ひなのか、それ一つだけ分からない。これがいづまでも心がゝりなのです。いつもくこの五年間、夜晝なしに、何かあの人に間違ひをしたのではないかと、そればかり心配してゐました。わたしはもうしよつちう、坐つて坐つて坐り抜きながら、あの人に對する自分の大きな過ちを、ぢつと考へてをりましたが、案の定、それが本當だと分かりました。」

「一たいどう分かつたんです？」

「たゞあの人の方から、どうつて事はあるまいと、それが氣づかひなのでございます。」相手の問ひには答へようともせず（まるで聞かなかつたかも知れぬ）、彼女は語り續けた。「それにしてもあの人、あんな連中の仲間になる筈はありません。伯爵夫人は、わたしを馬車に乗せてくれましたけれど、わたしを取つて食ひたいくらゐに思つてゐます。誰も彼もみんな、ぐるになつてゐるのです。けれど、一たいあの人までがさうなのでせうか？ あの人まで心變りしたのでせうか？（彼女の下頤と唇はぶる／＼慄へ出した。）ねえあなた、あなたは七つの寺で呪はれた、グリーンシカ・オトレーピエフ（僞王子を名乗りて王位を奪つた青年、歴史上の人物）の話をお讀みなさいましたか？」

ニコライは押し黙つてゐた。

「だけど、わたしもうあなたの方へ向いて、あなたの顔を見ますよ、」不意に決心したらしくかう言つた。「あなたもわたしの方を向いて、わたしの顔を見て下さいな。ぢつと一生懸命にね。わたしもう一遍たしかめて見たいんですから。」

「僕はもうずつと前から、あなたの方を見てゐますよ。」

「ふむ！」マリヤは一心に見入りながらかう言つた。「あなたは随分お肥りになりましたねえ……」

彼女はまだ何か言はうとしたが、不意にまた（もうこれで三度目である）先ほどと同じやうな

驚愕が、彼女の顔をへし曲げた。彼女は再び手を目の前に突き出しながら、一あし後へ跟おぼろめいた。

「一體あなたはどうしたのです？」ほとんど忿怒の發作を感じながら、ニコライはかう叫んだ。

けれど、この驚愕はほんの一瞬間だつた。彼女の顔は何かしら疑り深さうな、氣持ちの悪い、奇妙な微笑に歪められた。

「公爵、お願ひですからちよつと立つて、入つて見て下さいませんか。」と彼女は突然きつとした、思ひ込んだやうな聲でかう言つた。

「入つて見るつてどうするんです？ どこへ入るんです？」

「わたしはこの五年間、あの人、がどうして入つてらつしやるだらうと、そればかり心に描いてをりましたの。さあ、すぐに立つてあちらの部屋へ行つて、戸の陰へ隠れてゐて下さいまし。わたしはまるでなんにも當てにしてないやうな風をして、本を手につけて、坐つてをります。そこへあなたが五年の旅をすまして、思ひがけなく入つてらつしやる……それがどんな風か見たうございませぬ。」

ニコライは獨り心の中で齒咬みしながら、何か譯の分からない事をぶつ／＼呟いた。

「澤山だ。」と彼は掌で卓を叩きながらかう言つた。「マリヤさん、お願ひだから、僕の言ふ事を聞いて下さい。後生だから、ありつたけの注意を集中して下さい、もし出来ることなら……何と言つても、あなたはさぶの氣違ひぢやないんだから！」彼は怵へ兼ねて、かう口走つた。「僕はあす二人の結婚を發表しようと思つてゐます。あなたは決して立派な邸で暮らすのぢやありません。そんな考へは捨ててお了ひなさい。あなたは一生、僕と一緒に暮す氣がありますか。しかしこゝからずうつと遠い所なんです。それは瑞西の山の中なんです。そこにちよつとした場所がありますね……心配することはありません、僕は決してあなたを捨てもしなければ、氣ちがひ病院へも入れやしません。僕も無心をしないで暮らすだけの金がありますから。あなたの傍には女中が一人つく筈です。だから、あなたは一つ仕事をしなくもいゝのです。あなたの望みは何であらうと、出来る事でさへあれば叶へて上げます。お祈りするもいゝでせう、どこなと好きな所へ出て見るのもいゝでせう。とにかく、何でもしたい事はさして上げます。僕はあなたに觸らないことにしますから。僕もやはりその場所から、一生うごかない積りです。もしお望みなら、一生涯あなたと口を利かないでゐませうし、またお望みに依つては、あの當時ペテルブルグの裏長家でしたやうに、毎晩あなたの身の上話を聞かせて貰つてもいゝです。またお好みとあれば、本を讀んで聞かせても上げませう。しかしその代り、一生ひとつ處にゐなければなりませんよ。それも淋しい場所なんです。行きたいですか。決心がつかますか？ 後悔しやしませんか？ 涙や咀ひで僕を惱ましはしませんか？」

彼女は異常な好奇の色を浮かべて聴き終つた。そして、長いこと黙つて考へてゐた。

「そんな事はみんなありさうもない話しよ。」たうとう彼女は馬鹿にしたやうな、氣難かしげな調子で言ひ出した。「そんな事したら、わたし四十年もその山の中で、暮らすやうになるかも知れないもの。」

彼女は笑ひ出した。

「仕方がない、四十年も暮らさうぢやありませんか。」ニコライは恐ろしく顔を顰めた。

「ふむ！……わたしどうしたつて行きやしない。」

「僕と一緒に？」

「わたしがあなたと一緒に行く氣になるなんて、一たいあなたは何者です？ こんな人と一緒に四十年も坐つてるなんて——よくも圖々しくやつて來たもんだ！ 本當にこの頃はどうしてみんなさう呑氣になつたもんだらう！ いや、鷹が梟になつて了ふなんて、そんな事のあらう筈がない。わたしの公爵はこんな人ぢやない！」彼女は得々と勝ち誇つたやうに頭を反らした。彼の顔にはさつと曇りがかゝつたやうに見えた。

「何だつてあなたは僕を公爵などと呼ぶんです、それに……一たい誰だと思つてるんです？」と彼は早口に聞いた。

「え？ まあ、あなたは公爵ぢやないんですか？」

「一度もそんな身分になつた事はありません。」

「ぢや、あなたはいきなりわたしに向かつて臆面もなく、公爵でないつてことを白状なさるんですか！」

「一度もそんな身分になつた事がないつて、ちやんと言つてるぢやありませんか。」

「おゝ、どうしよう！」と彼女は両手を鳴らした。「あの人の敵はどんな事でもし兼ねないと、覺悟はしてゐたけれど、こんなづう／＼しい仕打ちは思ひも寄らなかつた！ 一たいあの人は生きてらつしやるのか知ら？」と彼女はもう前後を忘れて、ニコライに詰め寄りながら、かう叫んだ。「お前はあの人を殺したのか殺さないのか、白状しておしまひ！」

「お前は僕を誰と間違へてるんだ？」と彼は顔を歪めながら、跳び上つて席を離れた。

けれど、もう彼女を威嚇することは出来なかつた。彼女は勝ち誇つたやうな態度で、
「一たいお前は何者だ、どこから飛び出したのだ！ わたしはさつきこゝに坐つてゐたが、一たいこの目くら梟がわる企みを底まで感づいてゐた！ わたしはさつきこゝに坐つてゐたが、一たいこの目くら梟がどうして入つて来たやら、本當にびつくりして了つた。駄目だよ、お前さん、お前さんは芝居が下手だ、レビヤードキンよりもつと拙い。どうか伯爵夫人に、わたしから宜しく言つておくれ。そして、これからはお前なんかより、少し氣の利いた者を寄越すやうに言つておくれ。お前はあの女に傭はれたんだらう、白状おし。あの女のお情けで、臺所に置いて貰つてゐるんだらう？ お前の小細工なんぞは、ちやんと見え透いてゐる。お前の仲間なんか、一人残らず承知してゐる！」
彼は女の二の腕を——肘の少し上の邊をしつかり掴んだ。彼女は面と向かつて、から／＼と高

笑ひした。

「似てるよ、お前は、恐ろしく似てるよ。事に依つたら、あの人の親類かも知れないね——油斷のならない人達だ！ たゞわたしの戀人は——輝くばかり立派な鷹なのだ、公爵なのだ。ところがお前は梟だ、小商人だ！ わたしの戀人は氣さへ向けば、神様を拜む事も出来るけれど、氣が向かなければ、見向きもしない人なのだ。ところが、お前なんぞはシャートシカに（あの人は可愛い人だ、わたしの好きな懐かしい人だ）——頬つぺたを撲りつけられるくらゐの人間だ。うちのレビヤードキンが聞かしてくれたよ。それに、お前はあの時、どうしてあんなにびく／＼しながら入つて来たんだえ？ 誰に脅かされたんだえ？ わたしが床の上に倒れた時、お前はわたしを支へてくれた。その時お前の下司びた顔が目に入ると、まるで蟲けらが胸へ這ひ込んだやうな氣がした。違ふ、あの人ぢやない、と思つた。わたしの鷹は、あんな貴族の令嬢の前だつて、わたしの事を恥づかしいなどと思やしない！ あゝ、どうしよう！ わたしは五年の間といふもの、『どこか山の向うの方にわたしの鷹が暮してゐる、空高く飛びながら太陽を仰いでゐる……』かう考へたばかりで、しあはせだつた。白状おし、賈公爵、たくさん貰つたんだらう？ 大金に目がくれて、承知したんだらう？ わたしなんか、鏝一文だつてお前にやりやしない。はゝは！ はゝは！」

「うーん、この白痴女め！」なほも強く女の手を押へながら、ニコライは齒をぎり／＼鳴らした。

「おどき、賈公爵！」と彼女は命令口調で叫んだ。「わたしは公爵の妻です、お前の刀など恐れはしない！」

「刀！」

「あゝ、刀だよ！ お前の衣囊かぶの中に刀がある。お前はわたしが寝てゐるとお思ひだらうが、わたしはちゃんと見てゐた。さつき入つて来た時に、お前は刀を引き出したのだ！」

「お前は何を言ふのだ、可哀さうに、何といふ夢をお前は見てゐるのだ！」とかう喚いて、彼は力任せに女を突き放した。女は肩と頭をうんと長椅子に打ちつけた。

悪
彼は一目散に駆け出した。けれども、マリヤはすぐさま起き上がつて、びつこを引きながらその後から駆け出した。早くも入り口まで飛び出した彼女は、仰天して度膽をぬかれたレビヤードキンに力いっぱい抱き止められたまゝ、高らかな笑ひを交へた甲高い聲で、彼の後から外の闇へ向けて喚いた。

「グリーンシカ・オトレーピエフ！ 悪魔！」

四

『刀、刀！』道も選まず、ぬかるみや水溜りの中を大股に歩きながら、彼は癒し難き憎悪の念をもつて、かう繰り返した。とき／＼大聲に笑ひたくて堪らなくなつたが、なぜか一生懸命に笑ひを抑へつけた。先ほどフェーヂカに出會つた橋の上、しかもちやうど同じ所まで来て、彼は始

めて我に返つた。やはり同じフェーヂカがこゝで彼を待つてゐて、今度も彼の姿を見ると、帽子を取り、愉快さうに齒を剥きながら、すぐ何やら早口に、面白さうにまくし立て始めた。ニコライははじめの中、立止まらうともしないで歩き續けた。またしても後から纏まとはりつく浮浪漢の言葉に、暫くはまるで耳を借さうともしなかつた。

とつぜん彼は、ある想念に打たれて、ぎよつとした。ほかでもない、彼はまるでこの男の事を忘れてゐた。しかもちやうど『刀、刀』と、絶え間なく心に繰り返してゐるとき、少しも思ひ出さなかつたのである。彼はいきなり浮浪漢の襟髪を取つて、今まで怵おそへ怵おそへた癩癩を、一度に破裂させたやうな勢で、力任せに彼を橋板に叩き附けた。こちらは始めちよつと手向ひしようとしたが、殆どそれと同時に、ニコライが自分を襲つたのは、たゞ一時の出来心に過ぎないけれど、その腕力に比べると自分などは、ほんの藁しべのやうなものだと悟つたので、少しも手向ひしないでおとなしく、ぢつと押し黙つてゐた。浮浪漢は兩膝を突いて、地びたへぐいと押しつけられ、兩手を後ろざまに振おち上げられながら、自分の身の上になにか危険が迫つてゐるなどとは、てんから考へてもゐないらしい風で、平然と大團圓を待つてゐた。

彼の睨んだ目は狂はなかつた。ニコライは自分の巻いてゐる襟巻を左手ではづして、囚とらを後ろ手に縛り上げようとしたが、急になぜかその手を放して、向うへ突き飛ばした。こちらはくろりと跳ね起きて、振り返つた。短い、巾の廣い靴屋の使ふ小刀が、どこから出したのか、突然その手中に閃めいた。

「小刀なんか棄ててしまへ。隠さんか、早く隠さんか！」ニコライはいら立たしげな手つきをしながら、かう命令した。と、小刀は取り出された時と同じ速さで、再び影を消して了つた。

ニコライはまたもやもとの無言に返つて、後をも見ずにさつさと歩き出した。しかし執拗な浮浪漢は、それでも彼の傍を離れなかつた。もつとも、今度は前のやうに喋らないで、恭々しげに一步の間隔さへ保ちながら、後からついて来るのだつた。かうして二人は橋を渡り終つて、向う岸へ出た。そして、今度は左へ曲がつて、やはり細長いがらんとした裏通りへ出た。これを通つて行くと、さつきのホゴヤーヴレンスカヤ街よりも、町の中心へ出るのに近道だつた。

「おい、貴様はこの間どこか郡部の方の教會へ、泥棒に入つたさうだが、あれは一たい本當なのか？」と出し抜けにニコライはかう聞いた。

「實のところ、わつしは初めお祈りするつもりで寄つたので。」まるで何事もなかつたやうな口調で、浮浪漢はもの／＼しく懇懇にかう答へた。いや、もの／＼しいと言ふより、ほとんど勿體ぶつた調子だつた。

さきほどの『なれ／＼しい』碎けたところは痕方もなくなつて、理由もなく侮辱されながら、しかもその侮辱を忘れるだけの度量を持つた、眞面目な事務家らしい態度が、うかゞはれるのであつた。

「全く神様の導きであそこへ入つた時には、」と彼は言葉を續けた。「まあ有難い、まるで天國のやうだ、とかう思ひました！ 一たいあの一件も、わつしの頼りない境涯から起つた事なので

ございます。この世の中では、他人の助けがなくちや、本當にどうする事も出来ませんからねえ。ところが正直のところ、あれは骨折り損でございました。悪いことをして、神様の罰が當りましたんで。助祭の革紐だとか、振り香爐だとか、何だとかかだとか言つて、みんなで僅か十二留ドゥエナしか儲からなかつたのでございます。ニコライ行者の下顎が純銀だといふことでしたが、これが一文にもなりません。鍍金なんださうで。」

「番人を殺したらう？」

「と言つて、つまりその番人とぐるでやつたところ、それからもう夜明け近い頃、河の傍で二人の間に口論がおつ始まつたのでございます。どちらが袋を背負つて行くか、と云ふ論なので。その時つい罪な事をしてしまいました。ちよつくらこの世の重荷を軽くしてやりました。」

「もつと殺すがいゝ、もつと泥棒するがいゝ。」

「ピョートルさんも丁度それと同じ事を仰しやいました。まるでそつくり同じ言ひ方で、わつしに勧めて下さいましたよ。全く人を助けると云ふことにかけてちや、けちで不人情な方でございますからねえ。それに、わつし共を土から創つて下すつた天の神様を、これつから先も信じようとししないで、何もかも獸一匹の末にいたるまで、自然が造り出したものだ、などと仰しやる。そればかりか、この世の中で情け深い人の助けがなかつたら、どうにもかうにも仕方がないつてことを、とんと會得してゐらつしやらないんですからね。あの方にいろんな講釋をすると、まるで羊が水でも見てゐるやうな風つきで、本當にもう呆れるほかはありませんよ。ところがねえ、且

那、今お訪ねになりましたレビヤードキン大尉ですが、あの人はまだフィリップスの家に住まつてゐる時分から、どうかすると、一晩ぢう戸を開けつ放しにして置いて、自分はまるで死人みたいに酔つ拂つてゐるぢやありませんか。そして、どの衣囊かぶからもどの衣囊かぶからも、金がばら／＼床へ轉がり出てをりますんで。この目で見る事もちよいちよいありますよ。何分わつし共のやうな身の上ぢや、人様の助けなしには、どうにも仕様がございませんで……」

「え、この目で見た？　ぢや、夜中に入りでもしたのかい？」

「入つたかも分かりませんが、それは誰も知らない事なんで。」

「どうして殺さなかつたのだ？」

「なに、胸の中で算盤を撥いて見て、氣を長く持つことに決めたのでございます。なぜつて、百や百五十の金はいつでも取れるといふ事が、しつかり分かつた以上、もう少し待つて、千か千五百の金を引き出した方がいゝ、とかう云ふ氣にならずにやゐられないぢやありませんか。わつしは確かにこの耳で聞いたのですが、いつでもレビヤードキン大尉は酔つ拂つた紛れに、恐ろしくあなたを當てにしてゐるやうな事を申してをりました。かういふ譯で、どんな料理屋だつて、どんな下等な酒屋だつて、あの男がこの事をおほつびらで喋らないところは、町ぢうに一軒もないくらゐでございます。で、わつしもこの話しをいろんな人の口から聞きまして、やつぱり旦那さまに深い望みをかけるやうになりましたので、わつしは旦那さまの事を、親身の父親ていおやか兄貴のやうに思つて、お話したのでございます。ピョートルさんなぞの耳には、決して入れる事ぢやあり

ません。いんえ、誰一人にだつて知らせやしませんよ。そこで、旦那さま、三留ばかりお恵み下さいますでせうか、いかゞなもので？　本當にもうわつしの心の謎を解いて、眞底のところを知らせて下さつても、よささうなもんぢやございせんか。何分わつし共は人様の助けがなくちや、どうにもやつて行けませんのでねえ……」

ニコライは大きな聲でから／＼と笑ひ出した。そして、細かい紙幣きつで五十ループリばかり入つた金入れを衣囊かぶから取り出すと、束の中から一枚ぬき取つて、浮浪漢に投げ出してやつた。それから一枚、また一枚……フェーヂカは宙にそれを受け留めようと、飛び廻つた。紙幣きつはひらひらと泥の中に飛び散つた。彼は『えゝつ、えゝつ！』とさけびながら、紙幣きつの後を追ふのだつた。ニコライはたうとう一束すつかり投げつけて了ふと、やはりから／＼と笑ひ續けながら、今度はもう一人きりで、裏通りをすた／＼と歩き出した。浮浪漢は後に残つて、ぬかるみの中を四つん這ひに這ひ廻りながら、風に吹き散らされて、水溜りの中に浮ぶ紙幣きつを捜してゐた。そして、まゝ一時間ばかりも闇の中で、『えゝつ、えゝつ！』と叫ぶ、引き千切つたやうな聲が聞こえるのだつた。

第三章 決闘

翌日午後二時、豫想されてゐた決闘は成立した。事がかうまで速かに決せられたのは、是が非でも闘はねばならぬといふ、ガガーノフの一徹な要求に基くものであつた。彼は敵の行爲が會得できなかったので、もう前後を忘れるほど狂憤して了つた。もう一月ばかり敵を侮辱し續けて來たのに、さらに何の手ごたへもない。どうしても相手の勘忍袋の緒を切らすことが出来なかつた。しかし、決闘の申し込みはどうしても、ニコライの方からさせなければならなかつた。彼自身の方で決闘を申し込むやうな、直接の口實をもたなかつたからである。心の奥底に潜めてゐる實際の動機、つまり四年前父に加へられた侮辱のために、スタヴローギンに對して抱いてゐる病的な憎悪は、どういふ譯か自分でも肯定するのが憚られた。殊にニコライが二度までも、率直な謝罪の手紙を寄越してゐる以上、かういふ事はとうてい口實とする譯に行かないのを自認してゐた。彼は心の中で、ニコライを恥知らず、臆病者と決めてしまつた。實際、シャートフからあんな無禮を加へられながら、どうして平然と忍んでゐられるかと、不思議で堪らなかつたのである。たうとう彼は、暴慢比類なき例の手紙を送ることに決心した。そして、これが遂に相手のニコライをして、決闘を申し込ませる動機となつたのである。

前日この手紙を出した後、ガガーノフは熱病やみのやうないらくした心持で、決闘の申し込

みを待ち設けながら、時には望みを抱き、時には絶望したりして、希望實現の可能の程度を考量して見るのだつた。彼は萬一の場合に備へるため、前の晩から介添人を用意して待つてゐた。それはほかでもない、學校時分から無二の親友として、つね々々敬愛してやまぬマヴリーキイ・ドロズドフだつた。かういふ譯で、翌朝九時頃にキリーロフが、依頼を受けて訪れた時には、もうすべての準備は整つてゐた。ニコライのあらゆる謝罪の言葉も、かつて類のないやうな讓歩も、すぐさま一言の下に、恐ろしい憤激をもつて斥けられて了つた。マヴリーキイは、前の晩はじめて事のいきさつを聞いたばかりなので、かうした前代未聞の條件を耳にすると、驚きのあまり口を開いて、さつそく和睦を主張しようとした。けれど、彼の心を悟つたガガーノフが、椅子に腰掛けたまゝ、ぶる／＼身を慄はせ始めたのを見て、急に口を噤み、何も言はない事にした。實際、親友としてあんな事を約束しなかつたら、彼は即座に身を退いて了つた筈なのである。けれども事件の終りに當つて、何か方法が立つかも知れぬといふ望みに繋がれて、彼はとにかくその場に居残つた。

キリーロフは決闘の申し込みを傳へた。スタヴローギンの提出した一切の條件は、些かの異議もなくそのまま即座に受納された。尤も、たゞ一つ補足が加へられた。しかも、非常に殘忍なものだつた。ほかでもない、もし第一發で何ら決定的な結果が生じなかつたら、またもう一ど手合せをしよう、二度目にもこれと云ふ結果を見なかつたら、三度目の手合せをしようといふのだつた。キリーロフは顔を顰めて、三度目といふ點に就いて讓歩を申し込んだが、何の効果もなかつ

た。で、とう／＼『三度までは構はないが、四度目はどうあつても駄目』と云ふ條件つきで賛成した。これには先方も讓歩した。

かういふ風でその日の午後二時、ブルイコーフで決闘が成立した。それは一方からはスクワレーシニキイ、いま一方からはシュピグリンの工場に挟まれた、郊外の小さな森の中である。昨夜の雨はすつかり霽つてゐたが、じめ／＼と濕つぽい風の吹く日だった。低い濁つたちぎれ／＼の雲が、冷たい空を忙しげに流れ、木々の梢は時に強く時に弱く、ごうつと深みのある音を立てて騒ぎ、根の方はぎし／＼軋んでゐた。何とも言へぬ侘びしい日だった。

ガガーノフとマヴリーキイとは、洒落た散歩馬車に乗つて、指定の場所へ到着した。二頭立ての馬は、ガガーノフが自分で馭してゐた。そのほか一人の下男がついて来た。それと殆ど同時に、ニコライとキリーロフもやつて来た。しかし、この二人は馬車でなく、馬に乗つて来たのである。やはり一人の下男が騎馬で伴をしてゐる。キリーロフは今まで、一度も馬に乗つた事がないのだが、右手に拳銃ピストルの入つた重い箱を抱へながら、大膽な態度で昂然と鞍に跨がつてゐた。この箱を下男に持たすのが厭だつたのである。で、左手だけで手綱を支へてゐたが、不馴れなために絶えず巻いたり、引つ張つたりするので、馬はぶる／＼と首を振りながら、今にも棒立ちになりさうな様子を示したが、騎者のりては少しも驚く風がなかつた。

生來うたぐり深い性質たぢで、すぐに烈しい侮辱を感じるガガーノフは、彼らが騎馬でやつて来たのを、また一つの新しい侮辱と解釋した。それは敵が負傷の場合、乗せられて歸るべき馬車の必

要を感じてゐないとすれば、もう自分の勝利を信じ切つてゐるのだ、とかういふ意味なのであつた。彼は忿怒の餘り、顔を黄色くしながら馬車を出たが、我ながら両手がわな／＼と慄ふのを感じ、この事をマヴリーキイに話した。ニコライの會釋には返しもしないで、そつぽを向いて了つた。二人の介添人は籤を抽いた。拳銃ピストルはキリーロフの方が當つた。やがて境界線が引かれて、闘手は兩方に立たされた。そして、馬車や馬や従僕は、三百歩ばかり後の方へ追ひやつて了つた。遂に武器は装填され、二人の闘手に渡された。

わたしは物語の先を急がなければならぬので、詳しく描寫してゐる暇がないのを悲しむが、それでも要所々々の敘述を、全く抜きにしては行かない。マヴリーキイは妙に沈み込んで、心配さうな風だつた。が、その代りキリーロフはどこまでも落ち着き拂つて、どこを風が吹くかと云ふやうな顔つきだつた。そして、一旦ひき受けた義務の履行に關しては、細かいところまで正確を守つてゐたが、もう目の前に迫つてゐる運命的な事件フエグナルの成行きに就いて、すこしも慌てたやうな風がないばかりか、殆ど好奇心らしいものさへ見えなかつた。ニコライはいつもより少し蒼い顔をして、外套に白い毛皮の帽子といふ、かなり軽い服装をしてゐた。彼はだいたい疲れれてゐるらしく、とき／＼眉を顰めながら、自分の不愉快な氣持を、少しも隠さうとしなかつた。しかし、この瞬間ガガーノフは、誰よりも一ばん目立つてゐた。従つて彼の事だけ全然べつに、一言しない譯に行かないのである。

わたしは今まで一度も彼の外貌を述べる機会がなかつた。彼は色白で背の高い、平民仲間ではゆる「脂肥りのした」いかにも満ち足りたらしい紳士で、年は三十三、疎い^ト亜麻色の毛をした、かなり美しい輪廓の顔だちだつた。彼は大佐で軍務を退いたが、もし將官になるまで勤務を續けたら、將官といふ背景の下に、一さう堂々たる感じを與へたらうし、また立派な戦場の指揮官となることが出来たかも知れない。

この人物の性格の描寫上、逸することの出来ないのは、彼の軍務を退いた動機である。それはほかでもない、四年前ニコライのために、父が俱樂部で恥辱を受けて以來、長い間しうねく彼を惱ました家門の名折れといふ一念だつた。このうへ勤務を續けるのは、良心に對しても恥づかしい破廉恥なことに思はれた。自分が職に止まるのは、聯隊はじめ同僚の顔に泥を塗るに均しい、とかう信じて疑はなかつた。そのくせ同僚仲間では誰一人として、この出来事を知る者はなかつたのである。尤も、彼はずつと以前、この侮辱事件の起らない先から、全く別な理由で軍務を退かうと思つた事もあるが、この時までできつぱりと決し兼ねてゐた。奇妙な話だけれど、彼が軍務を退かうとした最初の原因、といふより寧ろ動機は、一八六一年二月十九日の農奴開放令だつた。

ガガーノフは縣内でも屈指の富裕な地主で、しかも開放令の發布の後も、大した損害は蒙らなかつたのだし、彼自身もこの施設の人道的意義を承認し、改革に依つて生ずる經濟的利益をも、

了解するだけの頭腦はあつたのだが、それでも開放令の發布後、急に自身が個人的侮辱を受けたやうに感じ出した。それは何かかう無意識的な感情だつたが、はつきりしないだけ、かへつて痛烈に感じられた。尤も、父親の死ぬるまでは、どうとも斷乎たる處置を取る決心がつかなかつた。しかし、彼得堡ではその『高潔な』思想のために、諸名士の間にも名を知られるやうになつて來た。彼はかういふ人達と、なるべく關係を絶たないやうに努めてゐた。彼は自分といふものの中に入り込んで、そこにぢつと閉ぢ籠もつてゐるやうな人だつた。いま一つの特徴とも言ふべきは、自分の家柄の古いのと、血統の正しいのを、恐ろしく自慢にする事だつた。彼は、そんな事に眞面目な興味を抱いてゐる、奇妙な露西亞貴族の仲間に屬してゐた。かういふ貴族は、今でも露西亞に生き残つてゐる。

が、それと同時に、彼は露西亞歴史が大嫌ひで、全體に露西亞の習慣を醜惡なものとして考へてゐた。主として、富裕な名門の子弟のみのために設けられた、特別な軍事學校に籍を置いてゐる少年時代に（彼はこの學校で教育を終始するの光榮を有してゐた）、一種詩的な人生觀が彼の心に根を張つたのである。彼は城とか、中世紀の生活とかいふものが、むやみと好きになつた。尤も、それはたゞ歌劇式の方面ばかりで、騎士氣質と云つたやうなものだつた。彼は莫斯科帝國時代の皇帝が、貴族に體刑を課する權利をもつてゐた事實を、西歐の歴史に比較して顔を赤くした。そして、恥づかしさのあまりに泣き出したほどである。

自己の勤務に就いてはなみ／＼ならぬ智識を有し、義務の遂行上はなはだしく嚴格な、いくぶ

ん鈍重な氣味のあるこの男も、内心なか／＼の空想家だつた。ある人の確言するところに依ると、彼は辯口の才をもつてゐて、集會の席で演説するくらゐは平氣だといふ事だつた。しかし、この三十三年間といふもの、彼はたうとう沈黙を貫き通した。近ごろ出入し始めた彼得堡の社交界でも、彼は並はづれて倨傲な態度を持してゐた。外國旅行から歸つたニコライと、始めて彼得堡で出會つたとき、彼は殆ど氣も狂はんばかりだつた。

いま決闘の場に立ちながらも、彼は恐ろしく不安な心持ちに襲はれてゐた。ひよつとしたら、事が不成立に終りはしまいか、といふやうな氣持ちがして堪らないので、僅かばかりの猶豫も、彼を惑亂の渦卷へ投げ込むのだつた。キリーロフが決闘開始の合圖を與へる代りに、とつぜん口を切つて喋り出したとき、病的な印象がその顔にあり／＼と浮かんた。尤も、彼の言葉は當人が公然といつてゐる通り、たゞの形式に過ぎなかつたのである。

「僕は單に形式上一言して置きます。もう拳銃も手に握られて、いよく合圖をしなければならぬ今この瞬間に、いかゞでせう、最後にもう一度いひますが、和解することは不可能でせうか？　これは介添人の義務ですから。」

今まで無言でゐたマヴリーキイさへ、まるで申し合せでもしたやうに、突然キリーロフの考へに賛成して、同じやうな事を言ひ出した。彼は昨日以來、自分があまり意氣地なく、緩慢な態度を取つたのを、苦に病んでゐたのである。

「僕も全然キリーロフ君の説に同意します……決闘の場所で和解できないと云ふ思想は、單に

佛蘭西式の偏見に過ぎません……それに、僕は侮辱がどこにあるか、それが第一わからないです。君は何と思ふか知らないが、僕は前からこの事が言ひたかつたのです……何といつても、言葉を盡くして、謝罪の意を申し入れてゐるんですからね、さうぢやありませんか？」

彼は顔ぢう眞つ赤にした。今までこんな言葉數多く、こんなに昂奮して口を利いた事は、滅多にないのであつた。

「僕はあらゆる方法を盡くして、謝意を表するといふ自分の提言を、もう一度こゝで確めて置きます。」ニコライも大急ぎでかう口を入れた。

「一たいそんな事が出来るもんですか？」忿怒のあまり足を踏み鳴らしながら、ガガーノフはマヴリーキイに向つて、兇猛な聲でかう叫んだ。「マヴリーキイ君、もし君が僕の敵でなくて、介添人だとすれば、一つあの男に言つて聞かして下さい（と彼は拳銃でニコライの方をさして見せた。）——そんな讓歩はたゞ侮辱を増すばかりです！　あの男は、僕に腹を立てるなんて不能だと思つてやがる！……あの男は僕を相手にした場合には、決闘の場所を去る事なんぞ、少しも恥辱と思つてゐないんだ！　一たいあいつは僕を誰だと思つてるんだらう。君たちの見てゐる目の前で……君はそれでも僕の介添人ですか！　君は僕の丸が當らないやうにと思つて、僕に癪癢を立てさせてばかりゐるんです。」

彼はまたもや足を踏み鳴らした。唇からは唾が飛んでゐた。

「交渉は終りました。さあ、號令を聽いて下さい！」とキリーロフはありたけの聲を出して叫

んだ。「一！ 二！ 三！」

『三』の聲と共に、闘手は互に敵を目ざして進み始めた。ガガーノフはすぐ拳銃を上げて、五足目か六足目に火蓋を切った。そして、ちよいと歩みをとめたが、しくじつたなと見定めると、また早足に境界線の方へ近寄った。ニコライも同じく歩み寄つて、拳銃を上げたが、何だか恐ろしく高い處へ筒先を向け、ろく／＼狙ひもしないで引き金を下ろした。それから手巾はんかちを取り出して、右手の小指を繻帯した。その時はじめて、ガカーノフも全然しくじつた譯でない、といふ事が分かつたのである。丸は小指の關節の軟肉を掠めただけで、骨には少しも觸らず、たゞちよいとした擦り傷が出来たばかりである。キリーロフは、もし敵手同志がこれで満足しなければ、決闘はまだ續行すると宣言した。

「僕は次の事實を明言する。」再びマヴリーキイの方を向きながら、ガガーノフはしや嘎れ聲で怒鳴つた。(もう喉がすつかり乾いて了つたので)。「この男は(と、またしてもスタヴローギンの方を指さして)この男はわざと空に向けて射つたのです……故意にやつたのです……これは實に重ね重ねの侮辱だ！ あいつは決闘を成立させまいとしてるのだ！」

「僕は規則にさへ反かなければ、どうなと勝手な射ち方をする権利を持つてゐます。」ニコライはきつぱりと言つた。

「いゝや、持つてゐない！ よく説明してやつて下さい、よく説明して！」とガガーノフ喚びた。

「僕は全然スタヴローギン君の意見に同意です。」とキリーロフは宣告した。

「何のためにあいつは僕に用捨をするのだ？」人の言葉は耳にもかけず、ガガーノフは猛り立つた。「僕はいつのお情けなんかに預りたくない……唾でも引つ掛けてやりたいくらゐだ……」

僕は……」

「僕は立派に誓ひます、僕は決してあなたを侮辱する積りぢやなかつたのです。」とニコライはいら／＼しげにかう言ひ出した。「僕が上を向けて射つた譯は、もう今後人を殺したくないからです。相手があなたであらうと、またほかの誰かであらうと、對人的差別は持つてゐません。實際、僕は侮辱を受けたものと思つてゐないのに、それがあなたのお氣に觸るのを、残念に思ひます。しかし、自分の權利に干渉する事は、誰にも赦す譯に行きません。」

「それほど血を見るのが恐ろしいなら、どういふ譯で僕に決闘を申し込んだのだ、それを聞いて下さい。」依然としてマヴリーキイに向つて、ガガーノフは喚き立てた。

「どうして君に申し込みをせずにあられますか？」とキリーロフが口を入れた。「君は何一つ耳を借さうとしないんですもの、ほかに君を振りほどく方法がないぢやありませんか？」

「ただ一つ君の注意を促して置きますが、努力と苦悶と戦ひつゝ、事の成り行きを考察してゐたマヴリーキイが、やつとかう口を切つた。「敵手が前もつて、空へ向けて發射すると明言してゐる以上、事實、決闘を續行することは出来ないぢやありませんか……微妙な……しかも明瞭な理由に依つて……」

「僕はいつとも空へ向けて發射するとは、決して明言しやしなかつたです！」もうすつかり我慢が出来なくなつて、スタヴローギンはかう叫んだ。「あなたは僕が何を考へてるか、僕がこのつぎどういふ風に發射するか、少しもご存じないので……ぼく決闘を制限するやうな事は、何一つ言やしなかつたです。」

「さういふ事なら、手合せはまだ續けてもよろしい。」マヴリーキイはガガーノフに向つてかう言つた。

悪

「諸君、めい／＼自分の位置に立つて下さい！」とキリーロフが號令した。

再び兩敵手は近づいた。ガガーノフはまたもや失敗を繰り返し、スタヴローギンはまたもや上へ向けて射つた。果たして空中へ發射したかどうか、それに就いては議論の餘地もあり得たのである。もしわざと仕損じたのだと、當人が白狀しなかつたら、ニコライは正當に發射をしたと、斷言することが出来たかも知れない。彼は露骨に拳銃を空中へ向けたり、立木を狙つたりしたわけではない、とにかく敵を狙つたやうには見受けられた。が、實際はやはり、帽子のうへ二尺ばかりの邊を狙つたのである。殊に今度の二回目はまだ下の方を狙つて、前より一さう眞實らしく見せた。けれど、もうガガーノフの疑ひを解く事は、とうてい出来なかつた。

「またか！」と彼は齒咬みをした。「なに、どうだつて構ふもんか！ 僕は申し込みを受けてるんだから、當然の権利を行使する。僕はもう一度うつつ積りです……え、どうあつても。」

「君は十分その権利をもつてをられます。」キリーロフは斷切るやうにかう言つた。

靈

マヴリーキイはなんにも言はなかつた。三ど双方へ引き分けて、號令を掛けた。ガガーノフはこんど仕切りのすぐ傍まで行つて、線の上から十二歩へだてて、狙ひ始めた。しかし、彼の手は正確な發射に成功するべく、餘り烈しく慄へたゐた。スタヴローギンは拳銃を下ろしたまゝ、身じろきもせずに相手の發射を待つてゐた。

「あまり長すぎる、あまり狙ひが長すぎる！」とキリーロフは烈しい語調で言つた。「お射ちなさい！ お射ちなさい！」

しかし、發射の音は響き渡つた。そして、今度は白い帽子が、ニコライの頭からけし飛んだ。狙ひはかなり正確で、帽子の山のだいぶ低い所が打ち貫かれてゐた。もしいま二分ほど低かつたら、もう萬事了してゐるところだつた。キリーロフは帽子を拾つて、ニコライに渡した。

「お射ちなさい、敵を引き留めちやいけません！」マヴリーキイは極度の昂奮にかう叫んだ。スタヴローギンは發射の事を忘れたやうに、キリーロフと一緒に帽子を調べてゐたのである。

スタヴローギンはぎくりとして、ちらとガガーノフを見やめた。そして、いきなりそつぽを向くと、今度は些かの遠慮もなく、わきの方の森へ向けて射ち放した。決闘は終つた。ガガーノフは打ち挫かれたやうに棒立ちになつて居た。マヴリーキイが傍へ寄つて、何か話しかけたが、こちらはまるで何も分らないやうな風だつた。キリーロフは歸りしなに帽子を取つて、マヴリーキイにちよつと會釋した。しかし、スタヴローギンは先ほどの禮節を忘れて了つた。森へ向けて一發放すと、仕切りの方を向いて見ようとせず、キリーロフの手へ拳銃を押し込んで、さつさと

馬の方へ歩き出した。その顔は憤怒の色を現はしてゐた。彼は押し黙つてゐた。キリーロフも無言であつた。二人は馬に乗つて、驅け足で走り出した。

三

「何だつてあなたは黙つてゐるんです？」もう家の近くまで来た時、キリーロフは自烈たさうに聲をかけた。

「何用です？」こちらは危く馬から下り落ちさうになつて、かう答へた。馬が不意に後足で突つ立つたのである。

スタヴローギンはぢつと心を押し静めた。

「僕はある……馬鹿を侮辱したくないと思つたんだが、やつぱり侮辱するやうになつて了つた。」と彼は低い聲で言つた。

「え、あなたはまた侮辱しました。」キリーロフはずばりと言ひ切つた。「それに、あの男は馬鹿ぢやありませんよ。」

「しかし、僕は出来るだけの事をした。」

「さうぢやありません。」

「ぢや、どうすればよかつたのです？」

「決闘を申し込まなければよかつたのです。」

「もう一遍ほつぺたを打たせるんですか？」

「え、打たせるんです。」

「まるで譯が分からなくなつて来た！」とスタヴローギンは毒々しげに言つた。「何だつてみんな僕に對して、ほかの者からはとうてい望めないやうな事を、期待してゐるだらう？ 何のためにはほかの者が忍び得ないやうな事を忍び、ほかの者が負ひ切れないやうな重荷を、好んで引き受けなくちやならないんだらう？」

「僕はあなたが自分で、重荷を求めてゐるものと思つてゐました。」

「僕が重荷を求めてゐるつて？」

「さうです。」

「君……それを見たんですか？」

「さうです。」

「それがそんなに目立ちますか？」

「さうです。」

二人は暫く黙つてゐた。スタヴローギンは何か氣がかりらしい顔つきをしてゐた。彼は何かのシヨックを受けたやうな風だつた。

「僕が狙はなかつたのは、人を殺したくなかつたからに過ぎない。ほかに譯はありません、全く。」まるで辯解でもするやうに、彼はせか／＼と心配さうに言つた。

「ぢや、人を侮辱する必要はなかつたのです。」

「一體どうすればよかつたんです？」

「殺したらよかつたのです。」

「君は僕があつた男を殺さなかつたのを、残念に思つてゐるんですか？」

「僕は残念な事なんか一つもありません。僕はあなたが、本當に殺す積りだとばかり思つてゐました。あなたは自分で何を求めているか分からないのです。」

「重荷を求めているんですよ。」スタヴローギンは笑ひ出した。

「あなたは自分で血を流すのが厭な癖に、どうしてあの男に殺人的行爲を許したのです？」

「もし僕が申し込まなかつたら、あの男は決闘の方法によらないで、たゞいきなり僕を殺したでせうよ。」

「それは君の知つたことぢやありません。それに、或ひは殺さなかつたかも知れませんよ。」

「たゞちよつと擲りつけるだけですか？」

「それはあなたの知つたことぢやありません。重荷を背負つてお行きなさい。でないと、あなたの功業がなくなつて了ひます。」

「そんな功業なんかへつぺつだ。そんなものを誰からも求めようと思ひません？」

「僕は求めておるでかと思つてゐましたよ。」キリーロフは恐ろしく冷然と言ひ放つた。

二人は邸の中へ馬を乗り入れた。

「寄りませんか？」とスタヴローギンは勧めた。

「いや、僕は家で……左様なら。」

彼は馬から下りて、自分の箱を小脇に抱へた。

「少くも、君だけは僕に腹を立ててゐないでせうね？」とスタヴローギンは手を差し伸べた。

「どう致しまして！」キリーロフはわざ／＼引返して、手を握つた。「僕の重荷が樂なのは、生れつきのためだとすれば、あなたの重荷はなか／＼骨が折れるでせう。さうした生れつきだから、何もさうひどく恥ぢることはありません、たゞ少しばかり……」

「僕は自分がつまらん男だといふことを知つてゐます。だから、敢て強者を氣取らうともしない。」

「全く氣取らない方がいゝです。あなたは強者ぢやありません。お茶でも飲みにいらずにやい。」

ニコライははげしい困惑を感じながら、自分の居間へ入つて行つた。

四

入ると早速、侍僕のアレクセイから、ブルグーラ夫人が馬車に馬をつけさせて、たゞ一人出かけた事を聞いた。夫人はニコライがはじめて——八日間の病氣の後、はじめて——馬上の散策に出たのを非常に満足に思つて、長年のしきたり通り、『新しい空気を吸ひに』出かけたのである。

『なぜと申して、奥様はこの八日間、新しい空気を吸ふといふことが、どんなに効験のあるものか、すっかり忘れてゐらつしやまいしたので。』

「一人で出かけられたのか、それともダーリヤさんと一緒なのか？」とニコライは忙しげに老僕を遮つたが、『ダーリヤさまはお加減が悪いとかで、お伴をことはつて、今お居間の方にゐらつしやいます。』といふ答へを聞いて、恐ろしく顔を顰めた。

「おい、爺や、」突然こころを決したものの如く、ニコライはかう言ひ出した。「けふ一日、あの女を見張つててくれないか。そしてもしあの女が俺の所へ来るやうな風があつたら、早速ひき留めて、かう言つておくれ——少くもこの三四日、あの女に會ふ事が出来ないつてね……俺があの女に頼むのだ……その中に時が來たら、俺の方で呼ぶからつてね——いゝかい？」

「さやう申しますで。」アレクセイは目を伏せながら、聲に憂ひの響きを帯びさせてかう言つた。

「しかしあの女が自分から、俺の所へ來ようとしてゐるのが、はつきり分かつた時でなくちやいけないよ。」

「ご心配あそばしますな。決して間違ひはございません。今までこゝへお見えになる時には、いつもわたくしが仲に立つてをりました。いつもわたくしに世話をしてくれといふ、お頼みでございましてので。」

「知つてるよ。しかしとにかく、自分でやつて來る時だけだよ。一つお茶を持つて來てくれ。」

出来る事なら、少しも早く。」

老僕が出て行くと均しく、その瞬間にまた同じ戸が開いて、闕の上にダーリヤが姿を現はした。彼女の目ざしは落ち着いてゐたが、その顔は蒼白かつた。

「お前どこから來たの？」とスタヴローギンは思はず叫んだ。

「わたしはすぐそこに立つてゐましたの。あれが出るのを待つて、こちらへ入らうと思ひまして。わたし、あなたがあれに云ひつけてらしたことも、ちゃんと聞いて了ひました。あれがいま出て行つた時、わたしは右手の壁の突き出たところに身を隠したので、あれも氣がつかかなかつたのでございます。」

「僕はずつと前から、お前と手を切らうと思つてたんだよ、ダーシヤ……當分……暫くの間ね。僕はお前から手紙を貰つたけれど、ゆうべお前を呼ぶことが出来なかつた。僕は自分でも、お前に手紙が書きたかつたんだが、まるで物を書くことが出来ないのだ。」と彼は自烈たさうに——といふより、寧ろ忌はしげにかうつけたした。

「わたしもやつぱり、手を切らなくちやいけないと思ひましたの。奥様が二人の關係を、たいへん疑つてらつしやいますので。」

「なあに、勝手に疑らしとくさ。」

「だつて、奥様にご心配かけてはすみません。ぢや、今度はおしまひまで？」

「お前はどうしてお了ひまで待つ氣なの？」

「ええ、わたしさう信じてゐます。」

「世の中に了ひのあるものは一つもないよ。」

「でも、これには了ひがあります。その時は、わたしを呼んで下さいまし。わたしすぐに参ります。では、左様なら。」

「一たいどんなしまひがあるんだね？」ニコライはにつと笑つた。

「あなたお怪我をなさいませんでしたね、そして……血なぞ流しはなさいませんでしたか？」しまひに關する問ひには答へないで、彼女はかう訊ねた。

「馬鹿なことさ。僕は誰も殺しはしなかつた、心配しなくていよ。明日と言はず今日の中に、萬事みなから聞かされるだらうよ。僕は少々加減が悪いのだ。」

「わたしもう行きますわ。ときに、あの結婚披露は今日でございませうか？」と彼女は思ひ切りの悪い調子で言ひ足した。

「今日ぢやない、また明日でもない。明後日もどうか分らない。みんな死んで了ふかも知れないんだからね。結局その方がいよのさ。さ、行つてくれ、いよ加減にして行つとくれ。」

「あなたはあのもう一人の……氣の違つた娘さんの一生を、亡ぼしはなさないでせうね？」
「氣ちがひ娘どもの一生はどちらも亡ぼしはしない。が、正氣な女の一生は亡ぼして了ふらしい。それほど僕は卑劣で醜惡な男なのだ。ダーシャ、本當に僕はお前のいはゆる『いよくのお了ひ』に、お前を呼ぶかも知ないよ。さうすると、お前は正氣な女だけれど、やつて来てくれる

だらうね。一たいお前はどうして自分の一生を亡ぼさうとするのだ？」

「結局わたし一人が、あなたのお傍に残るんでございませうわ、わたしちゃんと分かつてゐます。そして……それを待つてますわ。」

「ところで、もし結局お前を呼ばないで、お前から逃げを打つたら？」

「そんな事のあらう筈がございません、きつと呼んで下さいませ。」

「さういふ言葉には、僕に對する輕蔑が多分に含まれてるよ。」

「輕蔑ばかりでないつて事は、お分かりであらうしやる癖に。」

「ぢや、とにかく輕蔑は含まれてるんだね？」

「そんな積りで言つたのぢやありません。神さまが證人でございませう。わたしは、あなたがいつになつても、わたしに必要をお感じなさらないやうにと、祈つてゐるのですけれど。」

「その言葉に對して、酬ゆるところなかるべからずだ。僕もやつぱりお前の一生を、亡ぼしたくないのは山々なんだがなあ。」

「どう致しまして、あなたはどうしたつて、わたしの一生を亡ぼすことなぞ、お出来にならないう筈でございませう。それはご自分で誰よりもよくご存じの癖に。」とダーリヤは早口にきつぱり言つた。「もしあなたと一緒になれなければ、わたしは看護婦になつて、病人の世話でもするか、本屋になつて福音書でも賣つて歩くかしますわ。わたしは誰にもせよ、人の妻になる事など出来ません。わたしはかういふ家にも住むことが出来ません……あなたすつかりご存じの癖に……」

「いや、僕はお前が何を望んでるか、今まで一度も察する事が出来なかつたよ。僕はどうもね、お前が僕に持つてる興味は、ちやうど年功を経た看護婦が、なぜかほかの病人と比較して、ある一人の病人に特殊の興味を抱く、あれに似てゐると思ふ。もつといふ譬喩を借りて言へば、よその葬式につき歩く巡禮のお婆さんが、ほかのものより少し小綺麗な死骸をすく心持ち、まあ、それくらゐのものだらうと思はれるよ。何だつてお前はそんな妙な目をして、僕を睨むんだね？」

「あなたは大變からだがお悪いのでせう？」一種特別な表情で相手の顔に見入りながら、彼女は同情の籠もつた調子でかう聞いた。「まあ、本當に！ こんな體でありながら、わたしが傍にゐなくてもいゝなんて！」

「まあ、お聞きよ、ダーシャ、僕はこのごろ幻覺ばかり見てるんだよ。ある小悪魔こあくまがきのふ橋の上で、僕の戸籍上の結婚の束縛を取りのけて、下手な襪襦を出さないやうにするために、レビヤードキン大尉とマリヤを殺せと言つて、僕にさんくゝ勧めるぢやないか。その手つけとして、三ループリ請求したけれど、この荒療治の儲けは、少くとも千五百留を下らないつてことを、明らかに匂はしてゐたよ。どつだ、なかゝ勘定の達者な悪魔ぢやないか！ まるで帳つけ番頭のやうだ！ はゝ！」

「ですが、それは幻覺に相違ないと、固く信じてゐらつしやいますの？」

「おゝ、違ふよ、それは幻覺でも何でもありません！ それはなに、懲役人のフェーヂカだ、懲役から逃げ出した強盜だよ。しかし、それはどうだつて構はない。え、お前はそれから僕がど

うしたと思ふ？ 僕は紙入れにありつた金の、すつかりその男にくれて了つたのだ。だから今その男は、僕が手つけ金を渡したものと、思ひ込んでるだらうよ！」

「あなた夜中にその男にお會ひになつて、そんな事を勧められたのですつて？ まあ、あなたはすつかりあの連中の網に巻き込まれてゐらつしやるのが、お分かりにならないのでございますか！」

「なあに、勝手にさせて置くさ。ときにね、ダーシャ、お前の舌の先にはある一つの問ひが引つかかつて、もぞ／＼してゐるぢやないか。お前の目つきでちやんと分かるよ。」毒々しい立ちしげな薄笑ひを浮かべつゝ、彼はかうつけたした。

ダーシャはぎよつとした。

「問ひなんか少しもありません、疑ひなんかまるで持つてをりません。まあ、黙つてゐらつしやいませ！」まるで質問を拂ひ落さうとでもするやうに、彼女は心配らしくかう叫んだ。

「つまりお前は僕がフェーヂカと會ひに、居酒屋か何處かへ出かけないと信じ切つてるかい？」

「あら、あんな事を！」と彼女は手をぱちりと鳴らした。「どうしてそんなにわたしをお苦しめなさるんですの？」

「いや、ばかな洒落を言つて悪かつた、赦しておくれ。僕はきつとあの連中から悪い癖がうつたんだね。實は僕ゆうべから、やたらに笑ひたくて堪らないんだ。始終ひつ切りなしに、長い間むやみに笑ふんだ。まるで笑ひの發作でも起つたやうに……やつ！ お母さんが歸つて來たぞ。」

僕はお母さんの馬車が玄關で止まると、音を聞いただけですぐ分かる。」

ダーシャは彼の手を取った。

「神様、どうぞこの人から悪魔を防いで下さいまし……ね、呼んで下さいな、少しも早く呼んで下さいな！」

悪

「ふん、僕の悪魔が何だ！ たゞ、小つぼけな、汚ならしい、瘰癧やみの小悪魔に過ぎないんだよ。おまけに、鼻つ風邪まで引いてさ、とにかく出来損ひのお仲間なのさ。ところが、ダーシャ、お前はまだ何だか言ひ出し兼ねてるんだらう？」

彼女は苦痛と詰責の表情で男を見つめた後、くるりと向きを變へて、戸口の方へ進んだ。

「おい、」と彼は毒々しい、ひん曲つたやうな微笑を浮かべながら、彼女の後から聲をかけた。

「もし……まあ、その……手つ取り早く言へば、もし……お前わかるだらう……つまり、もし僕

が假りに居酒屋へ出かけてだね、その後でお前を呼んだとすれば——お前はそれでも来てくれる

かね、居酒屋の後でも？」

彼女は振り返りもしなければ、返事もしないで、両手で顔を隠しながら出てしまつた。

「居酒屋の後でもやつて来る！」ちよつと考へた後、彼はかう呟いた。と、氣難かしげな輕蔑の色が、その顔に現はれた。「看護婦！ ふん……尤も、俺にもさうしたものが要るかも知れんて。」

靈

第四章 一同の待期

—

決闘の顛末は、早くも社交界に傳はつた。しかし特に注意すべきは、この事件が人々に與へた印象だつた。一同はまるで申合せたやうに、一も二もなく、ニコライに對する同情を表はさうと努めた。もと彼の敵だつた多くの人も、思切りよく、我こそニコライの親友と名乗りを上げた。

社交界の意見が、こんなに思ひがけなく變化した重なる原因は、これまでかつて意見を述べた事のない貴婦人が公然と表白した、正鵠を穿つた數語である。この人が忽ち町の上流社交界に異常な興味を抱かせるやうな、深い解釋を下したのである。丁度あの出来事の翌日は、縣の貴族團長夫人の命名日と云ふので、町ぢりの人が同家へ集つた。ユリヤ夫人も席に列なつてゐた。といふより、一座の采配を振つてゐた。夫人と一緒に、リザゼータも来てゐたが、彼女は目ざめるやうな美しさと、度はづれにうき／＼した表情に、輝くばかりであつた。しかし今夜は、これがかへつて貴婦人たちの誰かれに、迂散くさく思はれたのである。ついでに言つて置くが、彼女とマヴリキーとの婚約は、もう疑ふ餘地もなかつた。罷職にはなつて居るが、極めて勢力のある一人の將軍が（この人のことは後に話す）その晩、冗談半分に訊ねたとき、當のリザゼータは、自分が許婚の女だといふ事を、まつ直ぐに肯定したくらゐである。ところがどうだらう？ 町の貴婦人のうちで、この婚約を本當にするものは、一人もなかつた。一同は相變らず執拗に、何かのロー

マンスを想像してゐた。瑞西で行はれたといふ一種運命的な、内輪の祕密の存在を想像し、またなぜかユリヤ夫人が、それに關係してゐるものと信じてゐた。なぜみなの方がかうまで執念ぶかくあんな風説、といふより寧ろ空想に固執してゐるのか、またどういふ譯で是非ともこの事件に、ユリヤ夫人を結びつけたがるのか、それはちよつと説明しにくいことである。夫人が入つて來ると同時に、人々は期待に充ちた奇妙な目つきで、彼女の方を振り向いた。

斷はつて置くが、出來事あまり新し過ぎるのと、それに附隨したある事情のために、その晩人々は、いくぶん大事を取りながら、高聲を憚るやうに話し合つた。それに、官憲の措置に就いても、まだ何ら知るところがなかつた。しかし、世間に知れてゐる限りでは、決闘の當事者は兩方とも、警察の手を煩はすやうなことはなかつた。例へばガガーノフが少しも妨害を受けないで、早朝ドゥホゾの領地へ向けて發つたといふことは、みんなに知れ渡つてゐた。とは言へ、むろん一同の者は、誰か一番に公然と口を切つて、社會一般の焦燥を満足させるものはないかと、それのみを待ち焦れてゐたが、あてにされてゐたのは、前に述べた將軍だつた。果たしてそれはあまりでなかつた。

この將軍は町の俱樂部でも元老株だつた。地主としては金持ちの方でなかつたが、ちよつと類のないものの考へ方をする人で、舊式な處女崇拜家だつた。この人は皆がまだ大事を取つて、小さな聲でひそ／＼話してゐるやうな事を、將軍らしい重味を持たせながら、人の大勢あつまつた席で、公然と言つてのける事が好きだつた。つまり、この點が社交界に於けるこの人の、特殊な

役廻りのやうになつてゐた。今度も彼は殊さら言葉尻を引きながら、甘つたるい調子で言ひ出した。この習慣は、たぶん外國を旅行する露西亞人か、さなくば農奴開放後一番ひどく零落した、以前の地主あたりから借用したものだらう。スチエパン氏などは、地主の零落の度がひどければひどいほど、舌つ足らずみたいな發音をしたり、甘つたるく言葉尻を引き伸ばしたりする、と言つた事さへある。尤も、彼自身も甘つたるく言葉尻を引伸ばしたり、舌つ足らずみたいな發音をしてゐたが、自分のあらには氣がつかないのだつた。

將軍はいかにも一見識ありさうなものの言方をした。そのうへ彼はガガーノフとは、何か遠い親屬關係になつてゐるばかりか（尤も仲たがへして、訴訟騒ぎまでしてゐるので）、かつて自分でも二度ばかり決闘して、一度などは奪官のうへ、高架索へ左遷されたことさへあつた。誰かふと、ブルグーラ夫人が『病後』二度までも外出を始めた、と言つた。尤も、直接夫人のことを言つたのではなくて、スタヴローギン家の養馬場で仕立てられた、灰色の四頭立ての馬についてゐる、見事な馬具の噂をしたのである。そのとき將軍はとつぜん口を開いて、自分は今日、『若いスタヴローギン』が馬で行くのに出會つた、と言つた。一同はびつたり口を噤んだ。將軍は一つ舌を鳴らして、下賜になつた黄金の煙草入を、指の先でくる／＼廻しながら、急にかう言ひ出した。

「わしは二三年こゝにゐなかつたのが、残念です？……いや、實はその、カルスバードに行つとりましたのでな。ふん……わしはこの青年に非常な興味を感じてゐるのですよ。あの當時いゝろんな噂がありましたからなあ。ふん……一體あの男が氣違ひだといふのは、事實ですか？

當時、誰かそんな事を言つとりましたらう。ところが出し抜けに、妙な事が耳に入るぢやありませんか。ある大學生がこゝであの男を、従妹たちの目の前で侮辱した、するとあの男は卓の下へ逃げ込んだ、とかいふ噂でしたよ。ところがまた昨日ヴィソーツキイから聞けば、スタヴローギンはあの……ガガーノフと決闘した、しかもそれはたゞ相手を振り放したいがために、氣ちがひ同然な男の筒先へ、額を突きつけたといふ。ふん……それは二十年代(二十八年)の近衛氣質かたぎにありさうなことですか。あの男はこの町のどこかへ出入りしてをりますか？」

將軍は答を待構へるやうに口を噤んだ。社會の焦燥は遂にはけ口を與へられた。

「これより以上、簡單明瞭な事はありませんわ。」一同がまるで號令でも掛けられたやうに、一せいに自分の方へ視線を向けたので、ユリヤ夫人はいら／＼しながら、とつぜん聲を勵ました。

「スタヴローギンがガガーノフと決闘して、大學生の侮辱に酬いなかつたのが、そんなに不思議な話でせうか？ だつて、自分の家の奴隷だつた男に、決闘を申し込む譯に行かないぢやありませんか！」

それは意味ぶかい言葉だつた。實際、簡單明瞭な考へだつたけれど、それが今まで誰の頭にも浮かばなかつたのである。この言葉は、なみ／＼ならぬ結果を呼び起した。すべての醜い話、すべての蔭口めいた噂、すべての瑣末な世間話めいた方面は、どこか隅の方へ押しやられて了つて、別様な意義が高く掲げられた。今まで一同から誤解されてゐた人物の、新しい一面が照らし出されたのだ。それはほとんど理想的に嚴正な理解を持つた人物である。一人の大學生、もう今は奴

隷でも何でもない教育ある人間から、死にも價する侮辱を受けながら、彼はこの侮辱を蔑視した。それは侮辱を與へた當人が、わが家のもとの奴隷だからである。世間では大騒ぎして、蔭口を叩いてゐる。輕率な世間は生面いづつを打たれた男を、侮蔑の目をもつて眺めてゐる。けれども彼は、眞正な理解をもち得るまでの發達を遂げないで、しかもそれを喋々する世間の輿論を、蔑視してゐるのだ。

「それなのに、イワンさん、わたしはお互に眞正な理解を説いたり、論じたりしてゐるんですよ。」と一人の年取つた俱樂部員は、高潔な自己譴責の發作に驅られて、相手のものにかう言つた。

「さうですよ、ピョートルさん、」と相手のものは愉快さうに相槌を打つた。「それで、若い連中の事を云々してゐるんですからなあ。」

「この場合、若い連中が問題ぢやないんですよ、イワンさん。」別な一人が横合から口を挟んだ。「この場合、若い連中が問題ぢやない、一個の明星です。決してそんじよそこの若い連中の仲間ぢやありません。この事實はかういふ風に解釋すべきです。」

「またさういふ人が必要なんですよ。人材が乏しくなつて了ひましたからねえ。」

しかし何より肝腎なのは、この『新人』がなほそのほかに、『眞正銘の貴族』であつて、おまけに縣内一番の富裕な地主といふ事實だつた。かういふ人がどうして一世の支柱となり、國士としての活動をせざるにあられよう、と言ふのだ。尤も、わたしは前にちよつと事のついでに、わが

國の地主の心持ちを語つて置いた筈である。

一同は夢中になつて了つた。

「あの男はその大學生に決闘を申し込まなかつたばかりか、かへつて手を後ろへ引つ込めましたよ。これを特にご注意ください、閣下。」ともう一人が指摘した。

「また新法律で改正された裁判所へ、突き出さうともしなかつた。」別な一人がかうつけ足した。

悪

「改正裁判所が貴族たるあの人の個人的侮辱に對して、金十五ルーブリ也の料金を、相手に宣告してくれるにも拘らずですかね、へーへー！」

「いや、それなら、わたしが改正裁判所の秘密を教へませう」とある一人はのぼせあがつて、

「もし誰か泥棒なり詐欺なりをして、それを明白に突留めて見現はされたら、隙のあるうちに大急ぎで家へ駆け出して、母親を殺すに限りますよ。早速なにもかも辯明してくれて、傍聴席の貴婦人達は絹麻の手巾を振り立てますから——いや、全くの眞理ですよ！」

靈

「眞理、眞理！」

同時にまた様々な噂の種も出ずには濟まなかつた。ニコライとK伯爵との關係も、人々の記憶に蘇つた。今度の改革に對する伯爵の非公式な、とは云へ峻厳な意見は、世間に知れてゐた。また最近に到つて、いくぶん弛緩したけれど、その華々しい政治的活動も、あまねく知れわたつてゐた。ところが、こんど急にニコライが、K伯爵令嬢の一人と婚約したといふ噂を、疑ふ餘地も

ない事實のやうに世間で言出した。その癖、かういふ噂の起つた正確な動機は、誰ひとり説明が出来なかつたのである。例のリザゼータに關する、奇怪な瑞西の出來事に至つては、婦人連もぼつたり話しをしなくなつた。ついでに言つて置くが、ドロズドワ^{おや}母子も、今まで怠つてゐた訪問を、この時すつかり果たして了つた。でリザゼータのことなども、自分の病的な神経を『見得にしてゐる』ごくあり觸れた娘としか見なくなつた。ニコライが着いた日の卒倒騒ぎも、今ではただあの大學生の見苦しい振舞にびつくりしたもの、と云ふ風に解釋して了つた。もと一生懸命に^{フアンクスマツク}怪 奇な色彩をつけようと努めたあの出來事さへ、今は強ひて散文的なものとして取り扱ふやうになつた。妙な跛の女が居たことなどは、すつかり忘れて了つて、口に出すのさへ恥ぢるほどになつた。

「たとへ跛の女が百人あるにもせよ、誰だつて若い時分の事だもの！」人々はかう思つた。

また母に對するニコライの敬虔な態度も擔ぎ出された。そのほか、人々はいろ／＼と彼の美點を捜し出して、四五年前ドイツの諸大學で獲得した彼の學識を、心から感心して語り合ふのだつた。ガガーノフの行爲に至つては、まるで『敵と味方の區別のつかない』拙いやり方と云ふ事になつて了つた。ところでユリヤ夫人は、非常な洞察力をもつた人といふ、斷乎たる定評を下されたのである。

かういふ具合で、いよく當のニコライが社交界へ姿を現はした時には、一同はこの上もない無邪氣な、眞面目な態度で彼を迎へた。彼にそゝがれた一同の眼の中には、極めて性急な期待が

讀まれたのである。しかしニコライは直ぐさま、嚴正な沈黙の中に閉ぢ籠もつて了つた。勿論、それは、べちやく／＼いろいろな事を喋り散らすより、遙かに世人を満足させたに相違ない。手短かに言へば、何もかも巧く行つたのだ。彼は町の流行兒はやりっことなつた。この縣の社交界は、誰でも一たん顔を出した以上、もうどうしても逃げ隠れする譯に行かぬ。で、ニコライも以前通り、洗煉された技巧で、縣内のありとあらゆる習慣を遵奉し始めた。尤も、人々はあまり彼を愉快な人とは思はなかつたが、『なに、いろ／＼苦勞をして來た人だもの、ほかの連中のやうには行かない。何か考へる事もあるだらうさ』と言つた。四年前あれほど憎んでゐた高慢な態度も、傍へ近寄れないほど無愛想な様子も、今はかへつて世間の氣に入つて、尊敬を受けるやうになつた。

誰より得意になつたのは、ブルグラー夫人である。リザエーダに對して抱いてゐた空想の崩れたために、夫人がひどく落膽したかどうかは、ちよつと言ひにくい。それには勿論、家名といふ矜持プライドも手傳つてゐる。たゞ一つ不思議な事に、ニコラスが本當にK伯爵の家で『選擇』をしたといふ事を、夫人は急に固く信じ始めた。しかし一さう奇怪なのは、夫人のこれを信じるに至つた理由が、世人の耳にすると同じ途上風説に過ぎないといふ一事である。直接、ニコライに聞くのは恐ろしかつた。尤も、二三日我慢し切れなくなつて、彼が母親に十分うち解けてくれないのを、遠まはしに責めて見たけれど、彼はにたりと笑つたのみで、依然沈黙を續けてゐた。沈黙は同意の符號しるしと解釋された。ところが、どうした事か、かういふ事情にも拘らず、夫人は片時もあの跛を忘れることが出来なかつた。彼女の事は、まるで石ころか悪夢のやうに胸に痞つかへて、奇怪な幻

影が謎のやうに夫人を惱ました。しかも、これがK伯爵の令嬢に關する空想と、同時に隣り合つて、夫人の心に宿つてゐるのであつた。しかしこの事は後で話すとしよう。言ふまでもなく、社交界ではブルグラー夫人に對して、再びなみ／＼ならぬ用心ぶかい尊敬を示し始めた。けれど、夫人はあまりそれを利用しようとしないうで、ごくたまにしか外出しなかつた。

とは言へ、彼女は表向きに知事夫人を訪問した。勿論、ユリヤ夫人が貴族團長の夜會で陳べたかの意味深長な言葉に魅了され、擒とらになつた點では、彼女をもつて第一に指を屈しなければならぬ。あの言葉は、夫人の胸から幾多の憂悶を去り、かの忌はしい日曜以來彼女を苦しめてゐた様な疑問を、一舉にして解決してくれた。

『わたしはあの女を誤解してゐた！』と夫人は言つた。そして、持ち前の一本氣な性質から、いきなりユリヤ夫人に面と向つて、『わたしはあなたにお禮を言ひに來ました。』と言ひ放つたほどである。ユリヤ夫人はすつかり悦よろこに入つたが、それでも嚴然たる態度を崩さなかつた。彼女はそころ非常に自分の價値を意識し始めた。むしろ少々度を越すくらゐだつた。例へば、彼女は様々な話の中で、自分はステュパン氏の事業に就いても、また學者としての名聲に就いても、今まで少しも聞くところがないと言ひ切つた。

「尤も、わたしエルホーゼンスキイの息子さんには、出入りもさせてゐますし、可愛がつてもあります。あの方は無分別ではありませんが、何分まだお若いのでございますからね。けれど、なかなかしつかりした知識を持つてゐらつしやいますよ。何と言つても、時代に後れた舊式の批評家

などとは違ひますからね。」

「ブルワー夫人はすぐさま大急ぎで、スチエパン氏は今までかつて批評家だつたことはない。それどころか、一生を自分の家で過ごしたのだ、と辯解した。たゞあの人がある有名になつたのは、社會的活動の第一歩を踏み出した時の、四圍の状況のためなので、『この状況は全世界に知れ過ぎるくらい知られて』ある。近頃になつてからは、西班牙歴史の方でも知られてゐるし、今も獨逸大學の現狀に就て何か書かうとしてゐるし、それからまだドレスデンの聖母マドンナの事も、何やら書くつもりらしい、などと陳べた。手短かに言へば、彼女はユリヤ夫人に、スチエパン氏をこき下ろされたくなかつたのだ。」

「ドレスデンの聖母マドンナですつて？ それはシクスチンの聖母の事ですか？」ブルワー・ペトロ
「ヴァナ、わたしあの畫の前に二時間ばかり腰かけて見ましたが、たうとう失望して歸りました。わたしなんにも分かりませんでした。そして、すっかり驚いて了つたのでございますよ。カルマジーノフさんも、やつぱり分からないと言つてらつしやいます。今ではみんな——露西亞人でも英吉利人でも、何の値うちもない作だと言つてをります。あんな喧しく嘔鳴り立てたのは、老人連ばかりでございますよ。」

「つまり、流行が變つたのですね。」
「ですけれど、わたし露西亞の若い人達も輕蔑してはいけない、と思ひますの。みんなが、あの連中は共產主義者だ、と言つてゐますが、わたしの考へでは、あの人達をもつと寛大に扱つて、

もつとあの人達を尊重しなくちやならない、と思ひます。わたし今なんでも讀みますの——どの雑誌でも、どの宣言文でも、自然科学の本でも——何でも取り寄せてをりますの。なぜつて、わたし達だつてもういゝ加減、自分がどこに住んでゐて、誰を相手にしてゐるかつて事を、知つてもいゝ時分でございますからね。一生自分の空想の高嶺に住んでる譯には參りません。かういふ結論に到着しましたので、わたしは若い人達を手なづけて、それでもつて危い瀬戸際で引きとめよう、とかういふ規則を立てましたの。ねえ、ブルワーさん、わたしたち上流社會の人間は、善良な感化力と優しい態度でもつて、性急な老人連に無限の淵へ追ひやられてゐる青年を、危い瀬戸際で引き留めることが出来るのでございます。ときに、あなたのお蔭で、スチエパン様の事を伺つて、いゝ鹽梅でした。あなたはいゝ事を思ひつかして下さいました。事に依つたら、あの人にはわたしの文學會を、後援して下さいさるかも知れませんね。實はね、わたし豫約申込みの方法で、娛樂デーを計畫してゐるのでございます。収入は縣内の貧しい保母に寄付する筈ですの。さういふ保母は、露西亞全國に散らばつてゐますが、この一郡内だけでも六人からになります。そのほか電信技手をしてるのが二人に、大學へ通つてゐるのが二人あります。ほかの者も勉強はしたいのでせうが、學資がないのでございます。ブルワーさん、露國婦人の運命は恐ろしいものでございますよ！——これがいま大學制度問題にもなつてゐますし、國會の討議に付せられた事さへあります。全くこの奇妙な露西亞といふ國では、何でも勝手な事が出来るんですからねえ！——かういふ譯でして、いま申した上流社會の親切な態度と、人手を借りぬ直接な暖みのある斡旋で、この

偉大な事業に正しい方向を與へる事も、出来るのでございます。あゝ、露西亞の國には、光輝ある人格の所有者が少いのでせうか。いえ、そんな事はありません。たゞさういふ人が、てん／＼ばら／＼になつてゐるのでございます。ですから、一つみんなで力を協せて、もつと／＼強い勢力にならうぢやありませんか。で、つまり、こんな風に計畫してゐるのでございます。お晝は文學講演會のやうな催しにして、その後でちよつとした食事を出します。それから、暫く休憩時間として、夜は舞踏會を開くつもりでございます。始め活人晝で夜會の幕を開けようか、と思つたのですけれど、あまり費用が大きくなるやうでしたから、まあ一般の公衆の得心が行くやうに、四班舞踏を一つ二つ挟む事にしました。これはある二三の文學上の流派を象徴つた、特色のある面や衣裳を附けて踊るのでございます。この趣味のある趣向は、カルマジーンフさんが貸して下さつたのです。わたしはいろ／＼と、あの人に助けて貰つて居ります。ところでねえ、あの人はまだ誰も知らない最近の作を、今度の會で朗讀する事になつてゐるのでございます。向後あの人筆を折つて、もう何も書かないと言つてをられます。で、この最後の創作は、公衆に對する告別の辭になるのでございます。この優れた作物は『メルシイ』といふ題です。えゝ、佛蘭西語の題です。けれど、あの人はその方が愛嬌がある、優美だと仰しやいましたね……わたしもやつぱりさう思ひますの、かへつてわたしの方から勧めたくらゐるのでございます。いかゞでせう、ステパン様も何か朗讀して下さいませうね……尤も、あまり長くないものが宜しうございます。そして……あまり難かしい議論めいたものでも困ります。そのほかピョートルさんと、もう一

人誰やらが、何か朗讀をして下さる筈でございます。いづれピョートルさんがお宅へお寄りして、プログラムを申し上げるでせう。いえ、それよりも、いつそわたし自分でそれを持つて、お宅へ伺ふ譯に参りませんでせうかしら。」

「ねえあなた、わたしにもその名簿に、寄付の申し込みを書かして下さいませう。わたしステパンさんにさう言ひまして、自分でも一生懸命に頼みませう。」

ブルグラー夫人はすつかり魅了されて、家へ歸つた。彼女はもう押しも押されぬ、ユリヤ夫人の味方だつた。そしてどういふ譯か、恐ろしくステパン氏に腹を立ててゐた。こちらはちつと家に引つ込んだまゝ、可哀さうに、なに一つ知らなかつたのである。

「わたしあの女に惚れ込んでしまひました。本當にどうして今まで、あの女のことを思違ひしてゐたのか、自分ながら合點が行かないくらゐですよ。」夕方せはしさうに立ち寄つたピョートルと、息子のニコライに向つて、夫人はこんな事を言ひ出した。

「それにしても、あなたは家の親爺と仲直りしなくちやいけませんよ」とピョートルは勧めた。「親爺はすつかり落膽してゐますよ。だつてあなたはあのお爺さんを、まるで臺所へ追つ拂ふやうな事をしてゐらつしやるんですものね。昨日なども、あなたの馬車に出會つたとき、丁寧にお辭儀をしたのに、あなたはふいとそつぽを向いてお了ひになつたでせう。實はね、僕らは親爺をお一つ擔ぎ出さうと思つてゐるのです。ちよつと當にしてゐる事がありましたね。親爺だつて、また何か役に立つ事もあるでせうよ。」

「え、あの人に何か朗讀をさせなくやらないのです。」
 「僕はその事ばかり言つて譚ぢやありません。ところで、けふ僕は親爺の所へ寄つて行かうと思つてたのですが、ぢや、その事を話して置きませうね？」
 「それはお心任せに。けれどあなたは、どんな風にしようと思つてらつしやいますの。」と夫人は決し兼ねたやうにかう言つた。「わたし自分であの人と相談するつもりで、日と場所を決めようと思つてたんですがねえ。」

夫人は烈しく眉を顰めた。

「なんの、日を決める必要なんかありません。僕が手つ取り早く言つて置きませう。」

「ぢや、さう言つて頂きませうか。まあ、それでもやつぱり、わたしが會見の日を決めるつもりであると、一口いひ添へて下さいな。ぜひ忘れないでね。」

ピョートルは薄笑ひを浮かべながら、駈け出した。今わたしの思出す限りでは、このごろ彼はたれに向つても、概して突慥貪で、いら／＼した無遠慮な口の利き方をしてゐた。けれど妙な事に、みんなそれを大目に見てゐたのである。それに、全體としてこの男に對しては、特別な見方をしなければならぬ、と云つたやうな意見が公認されてゐた。こゝでちよいと斷はつて置くが、彼はニコライの決闘事件に就いて、なみ／＼ならぬ憤懣を示したのである。彼にして見ると、この事は寢耳に水だつた。この話を聞いたとき、彼は眞蒼になつて了つた。或ひはいくぶん、自尊心を傷つけられたやうに思つたのかも知れない。なぜと言つて、彼がこの事を初めて耳にしたのは、やつと翌日になつてからで、もうその時は町ぢうに噂が擴つてゐたからである。

「あなたは決闘する権利など少しもなかつたんですよ。」もう五日も経つて、偶然俱樂部でスタヴローギンに出會つた時、彼は叫くやうにかう言つた。

なほ一つ奇妙なのは、ほとんど毎日ブルグラー夫人の所へ寄つてゐたピョートルが、この五日間、一度もスタヴローギンに會はなかつた事である。

ニコライは『まるで何の事だか分からない』と云つたやうな氣のない目つきで、ぢつと言葉もなく相手を見つめて居たが、そのまゝ立ち止まらうともせず、歩みを運んだ。彼は俱樂部の大廣間を横切つて、酒場の方へ行かうしてゐたのである。

「あなたはシャートフの所へも行きましたね……そして、マリヤさんの事も發表しようと思つてゐるんですね。」と彼はその後を追つて走りながら、妙に落着きのない手つきで相手の肩を抑へた。

ニコライはいきなり肩からその手を振り落して、物凄く顔を顰めながら、くるりと後を振り向いた。ピョートルは奇妙な引き伸すやうな微笑を浮かべながら、ぢつとその顔を見守つた。それはほんの一瞬間だつた。ニコライはさつさと向うへ行つて了つた。

二

彼は早速ブルグラー夫人の家から、『親爺』の所へ駈け出した。彼がこんなに急いだのは、ただ

以前うけたある侮辱に對して、腹いせをするためのみであつた。わたしはついその日まで、この侮辱一件を少しも知らなかつたが、實はこの前ピョートルが訪ねて來た時（それは先週の木曜日だつた）、ステュパン氏は自分の方から喧嘩の火蓋を切つた癖に、たうとう息子を棒切れで追出して了つたのである。當時、彼はこの事をわたしに隠してゐた。しかし今ピョートルが、いつもの癖で子供らしいくらゐ高慢な薄笑ひを浮かべて、じろくくと隅から隅まで探り廻すやうな、氣持の悪いほど好奇心の勝つた目つきで、いきなり部屋の中へ駆け込むや否や、ステュパン氏はこつそりとわたしに合圖をして、この部屋を出て行くなといふ意を傳へた。かういふ譯で、わたしも今度こそ二人の話しを、始めから了ひまで聽いて了つた。で、はじめてこの親子の本當の關係が、目の前に暴露されたのである。

ステュパン氏は圓椅子クシエトカの上に、長くなつて坐つてゐた。例の木曜日以來だいぶ瘠せて、顔色まで黄がかつて來た。ピョートルは思ひ切つてなれくしい様子で、父親の傍に腰を下ろした。しかも、子として父に對する禮儀の要求するより、ずつと餘計に場所を塞ぎながら、兩足を尻の下に敷いて圓椅子クシエトカの上に坐り込むのだつた。ステュパン氏は無言のまゝ威を示しながら、少しわきの方へ片寄つた。

卓の上には、一冊の本が開いたまゝ置いてあつた。それはチエルヌイシェーフスキイの小説『何をなすべきか?』であつた。悲しい哉、わたしはこゝでこの親友の奇怪な、狹量な態度を、是認しない譯に行かない。ほかでもない、自分はこの隱遁生活を脱して、最後の一戦に勝負を決

しなければならぬといふ空想が、彼の魅惑された腦裏にだんく強く根を張つて來たのである。彼がこの小説を手に入れて研究してゐるのは、たゞく怒號叫喚せるやからと衝突の避け難くなつた時を慮つて、あらかじめ敵の態度と論法を、敵自身の『經典』カテヒシスによつて究めた上、この戰鬥準備で彼ら烏合の衆を、みごと夫人の眼前に覆くつがしてくれようといふ作戰である。わたしはそれを見抜いてゐた。あゝ、この本がどれくらゐ彼を苦しめた事だらう！ 彼はときく夢中になつて、それを抛り出しながら、いきなり椅子を飛び上がつて、まるで前後を忘れたやうに部屋ぢう歩き廻るのだつた。

『この著者の根本思想が間違つてないといふことは、それはわたしも是認する。』と彼は熱に浮かされたやうな調子で、わたしに言ひ言ひした。『しかし、それだけになほ恐ろしくなる！ 思想は同じくわれくのものだ。正真正銘われくのものだ。君、われくが初めてこれを繙いて、育てたのだ。われくが準備したのだ——さうさ、あいつ等はわれくの後から出て來たくせに、なんの自力で新しい事が言へるものか！ しかしまあ、これは何といふ表現だらう、何といふ曲解だらう、何といふ冒瀆だらう！』と彼は指で本をはぢきながら叫んだ。『一たい我々はかういふ結果を目ざして努力したんだらうか？ 本來の思想は、まるで見分けも何もつきやしない！』

「文化の空氣を呼吸してるの？」卓から本を取つて標題を讀みながら、ピョートルはにやりと笑つた。「疾うからさうすべき筈だつたんだよ。もしなんなら、僕もつと氣の利いたのを持つて來て上げよう。」

スチエバン氏はまたもや威を示しながら、無言を守つてゐた。わたしは片隅の長椅子に腰かけてゐた。

ピョートルは早口に來訪の理由を説明した。勿論、スチエバン氏は一方ならず驚いて、異常な憤懣を混じた驚愕の表情で聽いてゐた。

「一たいあのユリヤがそんな事をあてにしてるのかい——わたしが出かけて行つて、朗讀するなんて？」

「と言つても、あの人達は何もそんなに、お父さんを必要としてゐる譯ぢやないんだよ。それどころか、ほんのちよつとあなたにお愛想を見せて、それでブルグーラ夫人のご機嫌を取らうといふだけなのさ。しかし勿論、この朗讀を斷はるなどといふ、そんな失禮なことは出来ないよ。それに僕なんか、自分でもやつて見たいやうに思はれるがなあ。」彼はにやりと笑つた。「お父さんみたいな老人達は、誰でも地獄の火みたいなの野心が勃々としてゐるんだから。しかしね、とにかく退屈にならないやうに氣を付けて下さい。大方なんだね、西班牙史か何かだらうね。何にしても、三日ばかり前に一ど僕に讀ませて下さい。でない、きつと眠くなるやうなものに相違ないから。」

あまりにも露骨で、粗暴で、しかも性急なこの皮肉の調子は、明らかに前もつて企んだものだった。まるでスチエバン氏に對しては、これ以外もつと婉曲な表現や、觀念をもつて話し合ふ事は、たうてい不可能だといふ風つきだつた。スチエバン氏は依然として、侮辱に氣を留めないや

うにと努めてゐた。しかし續いて報じられた出來事は、いよく出でて、いよく恐ろしい印象を與へたのである。

「え、あの女まで、あの女まで自分でこの事を傳言するやうに……あなたに命じたのですか？」と彼は蒼くなつてかう訊ねた。

「いや、本當は二人でよく打ち合わせるために、日にちと場所を決めようと言つてゐるのさ。あなたが二人の感傷、こつこの名残だあね。何しろ二十年間、あの女のご機嫌を取つてたものだから、思ひ切つて滑稽な癖を教へ込んで了つただけけれど、心配しなくてもいよ。今はもうまるで違つて了つた。あの女も自分の口から、今では『物を見透す』やうになつたと、口癖のやうに言つてるからね。僕はいきなりあの女にかう言つて聞かせてやつた。あなた方の友情なんものは、まるで何の事はない、泥水の吐き合ひつこだつてね。あの女はね、お父さん、いろんな事を話して聞かせましたぜ。ふう、本當にお父さんは長年の間、まるで下男奉公をして來たんだねえ。全くお蔭で顔を赤くしちゃつた。」

「わたしが下男奉公をしてたつて？」スチエバン氏はたうとう我慢し切れなくなつた。

「もつと悪いくらゐだよ。お父さんは寄食者だつたんだ、つまり押しかけの下男だつたんだ。働くのは大儀だし、金は誰しも欲しいからね。今はあの女もそれをすつかり悟つて了つたのさ。少くも、お父さんの事であの女の聞かせた話しは、實に戦慄すべきものだつた。ねえお父さん、あの女に宛てたお父さんの手紙では、僕すつかり腹を抱へて笑つちやつたよ。氣まゐりも悪いし、

厭らしくあるしさ。しかし、とにかく、あなた方は墮落してるんだ。極端に墮落してるんだ。恩恵といふやつの中には、永久に人を墮落させるやうな物が含まれてるが、お父さんはその好適例だね！」

「あの女がお前にわたしの手紙を見せたつて？」

「一つ残らず。尤も、そんなものを一々讀んでる暇なんか、勿論ありやしないけれどね。ふう、だがお父さんも恐ろしく手紙を書き潰したもんだなあ。おほかた二千通以上あるよ……ところでね、親爺さん、僕の考へでは、あの女があなたと結婚する氣になつた時が、ほんの一瞬間くらいあつたらしいね。それをお父さんが間の抜けた事やつて、取り逃して了つたのさ！僕は勿論お父さんの見地に立つて話してるんだよ。しかし、それでもまだ今よりはよかつた。今はほんの慰み者の道化か何ぞのやうに、『他人の罪業』と結婚させられようとしてるんだからね、しかも金のためにさ。」

「金のために？ あの女が、あの女が金のためにと言つたのか！」スチエパン氏は病的にかう喚いた。

「でなきやどうだと言ふの。一たいお父さんどうしたんだ、僕は寧ろあなたを辯護したんぢやないか。實際それがお父さんに取つて、唯一の辯明法だからね。あの女は自分でもちやんと飲み込んだよ——あなただつて、ほかの人と同様に金が必要だつたし、またその點は恐らく正當だらうからね。僕はね、あなた方が利益交換を基礎として暮らしてゐたのを、二二ヶ四と言ふより明

瞭に證明してやつた。つまり、あの女は資本家だし、お父さんはお傍つきの感傷的な道化だつたのさ。尤も、金の事だつたら、たとへお父さんがあの女を、牡山羊のやうに搾つたからつて、決してあの女は腹を立てやしない。たゞ二十年もあなたを信用したのが、いま／＼しいんだ。あなたが高潔々々であの人を騙し込んで、あの長いあひだ嘘ばかりつかしたのが、腹が立つんだ。あのひと自分で嘘をついたのは、決して自覺しやしない。しかし、そのためにお父さんは、一倍ひどい目に會はなきやならないのだ。だがどうしてお父さんは、いつか總勘定をする時が来るつて事をさつたんだらう、それが僕には合點が行かない。何と言つても、あなたにだつて幾らか智恵があつたんだからなあ。僕はあなたを養老院へ入れるやうに、昨日あの女に勧めたのさ。まあ、安心なさい、體裁のいゝ所へ入れるんだよ。腹の立つやうな事はありやあしない。あの女も多分さうするだらうよ。お父さんが二週間まへ又縣へ向けて、僕に寄越した一番しまひの手紙を覚えてる？」

「まさかお前あれを見せやしないだらうな？」スチエパン氏は慄然として跳上がった。

「へ、どうして見せずにゐるんですか！ まつさきに見せちやつたよ。つまり、あの女がお父さんの才を羨んで、お父さんを利用しようとしてるだの、例の『他人の罪業』の事だのを知らせて寄越した、あの分でさあ、しかしお父さん、あなたの自惚の強いにも驚いて了ふね！ ぼく腹を抱へて笑つちやつたよ。とにかく、全體お父さんの手紙は退屈千萬なもんだ。あなたの句法と來たら堪らないからね。僕はしよつちう讀まないで打つちやつとくのだ。一通なんぞは今だ

に封を切らないで、ごろく／＼してゐるくらゐだよ。一つ明日お返ししよう。けれどあの、あの一番しまひの手紙と來たら、もう完全の極致だ！ 實に笑つちやつた、腹を抱へて笑つちやつた。」

「悪黨、悪黨！」とステュパン氏は喚いた。

「ちよつ、呆れちやつたね、あなたとは話しも出來やしない。ねえ、あなたはまた前の木曜日みたいに怒り出すの？」

ステュパン氏は氣色を變へて身を伸した。

「何だつてお前は俺に向つて、そんな言葉づかひが出来るんだ？」

「へえ、どんな言葉使ひなんだらう。簡單で明瞭な言葉づかひぢやないか？」

「やい悪黨、一たい貴様は俺の子なのかどうなのだ、まつ直ぐに白狀しろ！」

「そんな事は、お父さんの方がよく知つてる筈ぢやないか。尤も、父親といふものはこんな場合、えて目が眩み易いものだけれど……」

「黙れ、黙れ！」ステュパン氏は全身をわな／＼と慄はした。

「そうら、お父さんはまたこの前の木曜日のやうに、怒鳴つたり惡體をついたりして、杖を振り廻さないばかりの勢ひだが、僕はあなたのために、證據書類を捜し出して上げたよ。ものめづらしさに、ゆうべ一晩が／＼で鞆の中を掻き廻したのさ。尤も、別にどうと言つて取り留めた事はないから、安心していゝよ。例の波蘭人に宛てたお母さんの手紙だがね、お母さんの性質から判断して見ると……」

「もう一こといつて見ろ、俺は貴様に頬打ちを食はしてやるから！」

「あゝいふ人だ！」突然ピョートルはわたしの方へ振り向いた。「ねえ、僕等はもう先週の木曜日から、こんな風になつてゐるんですよ。今日はそれでも、あなたが立ち會つて下さるから、僕は大いに嬉しいです。まあ、考へて見て下さい。まづ最初の事實はかうなのです。親父は、僕が母の事をあんな風に言ふつて、怒つてゐるんですが、僕がさうするやうに仕向けたのは、親父自身なんです。僕がまだ中學生時分に、親父は彼得堡で一晩に二度くらゐづゝ、僕を揺すぶり起して、一生懸命に抱き締めるのです。そして、まるで女の腐つたみたいに泣きながら、毎晩々々どんな事を話して聞かせたか、まあ、あなた想像がつかますか。つまり今のやうに無作法千萬な、母の昔話しぢやありませんか！ 僕は親爺の口から、始めて耳にしたやうな始末なのです。」

「おゝ、俺はあの時もつと高遠な意味で、さういふ話しをしたのだ！ おゝ、貴様は俺の心持ちが少しも分からなかつたのだ。貴様は少しも、まるきり少しも分からなかつたのだ。」

「しかし、お父さんの話しは、僕のよりもつと下劣だつたらう。實際、下劣だつたらう、白狀しなさい。實はね、僕そんな事どうだつて構やしないんだよ。僕はあなたの身になつて言つてるので、僕自身の見地にもどれば、僕は少しも母を責めようと思はない。その點はご心配ないやうに。あなたはあなた、波蘭人は波蘭人さ。どつちだつて同じ事さ。お父さんが伯林でへまな目に會つたからつて、何も僕の知つた事ぢやないからね。それに第一あなたなんぞに、氣のきいたことが出來つこないぢやなか。一たいこんな事ばかりしてゐても、それでもあなた方は滑稽な人間

でないと言ふの！ それに、僕があなたの子だらうと、またさうでなからうと、そんな事はどつちだつて同じぢやないか？ 實はね、」彼はまたもやし抜けに、わたしの方へ振り返つた。「親爺は一生涯、僕のために一留^{ハルツ}の金も使はず、十六の年までまるで僕を知らなかつたばかりか、その後になつて、僕の財産をすつかり横領して了つた癖に、今さらとなつて、やれ一生僕の事で心を痛めたとか、何とか喚いて、僕の前で役者めいた所作をするぢやありませんか。僕はブルバ^ラ夫人と違ふからね、飛んでもないこつた！」

彼は立ち上がつて、帽子を取つた。

「おれは今後おれの名をもつて貴様を咀つてやる！」スチエパン氏は死の如く眞蒼になつて、わが子の頭上^{つらやう}に手を差し伸べた。

「人間もまあどこまで馬鹿になるか方圖が知れん！」とピョートルは呆れて了つた。「ぢや左様なら、古物先生、もう二度とあんたの所へ來やしないから。論文はなるべく早く届けるんだよ、忘れないやうにね。そして出来ることなら、ばか／＼しい理窟は抜きにして、事實、事實、事實と、からいふ風に頼みますよ。そして、何よりも簡單でなくちや困る。さやうなら！」

三

尤も、これにはまだ別な動機もあつたのだ。實際、ピョートルは父親に少し當てがあつたのだ。わたしの考へるところでは、彼は老人を極度の絶望に導いて、その上である種の騒ぎを引き起さ

うと、目論でゐるらしかつた。これは彼に取つて、ゆく／＼別な目的に役立つのだつた。しかしこの事はまた後で話さう。かういふ風の目論見や計畫は、彼の頭に山ほど積んでゐた——が、勿論それはみんな途徹もない、夢のやうなものばかりだつた。彼の狙つてゐる犠牲は、スチエパン氏のほかにもう一人あつた。全體として、彼の犠牲は一人や二人でなかつた。これは後で分かつた事なので。しかし、この犠牲だけは彼も特別あてにしてゐた。ほかでもない、當のフォン・レムブケー氏である。

アンドレイ・アントーヌイチ・フォン・レムブケーは、自然の恩寵をほしいまゝにしてゐる種族^{ツルギ}に屬してゐた。この種族は、露西亞では年鑑を繰つて見ると、何十萬と數へるほどの人數を含んでゐて、自覺こそしてゐないかも知れないが、その全人員をもつて、嚴正に組織化せられた一つの聯盟を形づくつてゐるのだ。勿論この同盟はことさら計畫したものでもなければ、人爲的に工夫したものでもなく、一つの種族全體が何の契約も條文もなく、一種の精神的義務團體といふやうな意味で、自然と結合してゐる現存のものであつて、時や場所や状況のいかんを問はず、常に聯盟加入者の相互扶助を目的としてゐる。レムブケーは幸ひにして、比較的縁故や財産の多い家の子弟で充された、露西亞の高級な學校の一つで、教育を受けることが出來た。この學校の生徒は卒業後たゞちに、何か國務機關の一つに入つて、かなり重要な職にありつくのだつた。レムブケーは工兵中佐の叔父を一人と、麵麩屋の叔父を一人もつてゐたが、この貴族的な學校へもぐり込んで見ると、自分に似たやうな境遇にゐる同種族の者を、だいぶ見つけ出した。

彼は快活な學生だつた。成績は少し鈍い方だつたが、みんなに好かれた。もう上の級では多數の青年が（それはおもに露西亞人だつた）、見やう見真似で、思ひ切り高遠な現代の諸問題を論じて、今に學校を出たら、一切の懸案を解決して見せるぞと、そればかり待ち兼ねてるやうな風つきであるのに、レムブケーは依然として、のんき千萬な惡戯を仕事にしてゐた。彼はいろんな突飛な事を仕出かして皆を笑はした。尤も、その冗談も大して奇才に富んでゐる譯でなく、たゞ猥雑なと云ふだけの事だつたが、彼はそれを自分の使命のやうに心得てゐた。例へば講義の席で、講師が彼に何かの質問を向けた時、何かから奇てれつな音をさして鼻汁をかんで、友達や講師を笑はして見たり、または共同寢室で卑猥な活人畫の眞似をして、一同の喝采を買つたり、鼻ばかりでフラー・ヂアブロ（十九世紀に於けるナポリの巨盜、オベラ「オーベル」の主人公）の開幕奏樂をかなり上手に演奏したり、すべてかう云つた風の類だつた。また彼はわざ／＼身汚い恰好をして、しかもどういふ譯か、それを一種の伊達のやうに考へる癖があつた。

卒業の一年前あたりから、彼はちよい／＼露西亞語の詩を書き始めた。肝腎な自分の種族の言葉は、露西亞に於ける同族の多數と同じやうに、ごく非文法的な知識しかもつてゐなかつた。この詩作の傾向は、ある一人の陰鬱な、何かにへしつけられたやうな級友を、彼に接近せしめる動機となつた。この級友はさる貧しい露西亞將官の息子で、級では未來の文豪視されてゐた。未來の大文豪はレムブケーに對して、保護者のやうな態度を取つた。ところが、學校卒業後三年ばかり経つた時である。この陰氣な級友は、露國文學のために勤めを抛つて、ぼろ／＼の靴を自慢

さうに街かしながら、秋も更けた時候に夏外套を着て、寒さにがち／＼と齒を鳴らしてゐたが、偶然にも馬（ネーデルラント）の橋（ネーデルラント）の袂で、以前の被保護者「レムブカー」に出あつた（當時、學校で彼のことをさう呼んでゐたのである。）ところが、どうだらう？ 彼は一目みたとき、人違ひではないかと思つたほどである。彼は呆氣に取られて立ち止つた。彼の目の前には、一點の隙もない服装をした青年が立つてゐるではないか。立派に手入れが行き届いて、赤みがかつた光澤を帯びた頬鬚、鼻眼鏡、漆塗りの靴、眞新しい手袋、ゆつくりしたシャルメル仕立ての外套、さうして折り鞆まで小腋に抱へてゐる。レムブケーは舊友に愛想のいゝ言葉をかけて、住所を知らせ、またいつか晩にでも訪ねるやうに言つた。聞いて見ると、名前までがたゞの『レムブカー』ではなく、フォン・レムブケーだとの事であつた。

舊友は早速たづねて行つた。しかし、それはたゞ／＼面當てのためかも知れない。どうしても正面玄關とは言へない美しからぬ階段には、それでも緋羅紗が敷いてあつた。玄關番が彼を出迎へて、名を訊ねた。上の方で鈴が高々と鳴り響いた。客は贅を極めた住ひを想像してゐたが、入つて見るとわが『レムブカー』は、横の方の小さな一間に陣取つてゐた。それはうす暗い古めかしい部屋で、くすんだ緑色の大きなカーテンで二つに仕切つてあつた。椅子類は布張りではあるが、その布がくすんだ緑色の思ひきつて古いものだつた。細長い窓には、やつぱりくすんだ緑いろの卷帷がかゝつてゐた。フォン・レムブケーは自分の保護者たる、だいぶ遠縁の一將官のもとに寄寓してゐたのである。彼は愛想よく客を迎へた。その態度は物々しく慇懃で、しかも同時に

垢抜けがしてゐた。文學の話も出たけれど、度を越えない範圍内に止められた。白い襟飾ネクタイをした侍僕が、何だか妙に薄いお茶に、小さなこつ／＼した丸い菓子を添へて持つて來た。舊友はわざと意地悪くゼルツェル水を所望した。望みの品は出されたけれど、少々手間どつた。しかもレムブケーは、わざ／＼侍僕を呼び寄せて、ものを云ひつけるのが極きまりの悪いやうな風だつた。彼は客に向つて、何か一口食事をしてはどうかと勧めたが、客がそれを辭退して、たうとう歸つて行つた時は、いかにも嬉しうな様子だつた。手つとり早く言へば、レムブケーは出世の第一歩を踏み出して、自分と同族とは言へ、地位のある將軍のもとに寄食者きしよくとなつてゐたのである。そのころ彼は將軍の五番目の娘に焦がれてゐた。そして相手の方でも、やはり彼を憎からず思つてゐたらしい。しかしそれでも、アマリヤは年頃になると、たうとう老將軍の昔馴染の、年取つた工場持ちの獨逸人にやられて了つた。レムブケーは大して悲觀するでもなく、紙細工の劇場を拵へた。幕が上がる時、役者が出て來て、手で身振りをする。棧敷には見物が坐つてゐるし、奏樂隊オーケストラは機械仕掛けで、ワイオリンを弓で擦るし、樂長は指揮棒を振り廻した。土間では伊達男や將校連が喝采する——これがすべて紙で出來てゐたのだ。すべて、レムブケー自身の考案であり、かつ仕事だつた。彼はこの劇場の製作に六箇月かつた。將軍はわざ／＼内輪同志の夜會を開いて、この劇場を觀覽に供した。新婚のアマリヤをませて五人の將軍令嬢、新郎の工場主、それに大勢の夫人令嬢が、めい／＼相手の獨逸男を引き連れて出席したが、みな一生懸命に劇場を點檢して、その出來ばえを褒めた。その後で舞踏が始つた。レムブケーはすつかり満足して、間も

なく悲しみを忘れて了つた。

幾年か過ぎて、官界に於ける彼の地位も定まつた。彼は相變らず自分の同族を長官に頂いて、常に有利な位置で勤務をつゞけた。そして、遂に年の割りにしては、華々しい官等にまで漕ぎつけた。彼はもうだいたい前から結婚を望んで、注意ぶかく目を配つてゐた。一ど上官に内緒で、自作の小説のある雑誌の編輯局へ送つたことがある。たうとうそれは掲載されなかつたけれど、その代り立派な汽車を拵へて、またもや素的な代物しろものが出來あがつた。群集が鞆かぶとを持つたり、袋サックを持つたり、子供や犬をつれたりして、停車場から出たり、汽車へ入つたりしてゐる。車掌や驛夫があちこち歩き廻つてゐるうちに、やがて鈴ベルが鳴り、信號が與へられて、列車がそろそろと動き出す。この込み入つた細工のために、彼はまる一年つぶした。

しかし、それでもやつぱり、結婚しなければならなかつた。彼の交友の範圍はかなり廣かつた。主として獨逸人仲間だつたが、露西亞人の交際社界にも出入してゐた。勿論、上官の筋を傳つて行くので。遂に彼が三十八の聲を聞いたとき、遺産まで譲り受けることが出來た。麵麩屋の叔父さんが死んで、彼に一萬三千留の財産を、遺言で残してくれたのである。もう問題は地位の點一つになつた。尤もフォン・レムブケー氏は、勤務上かなり華々しく榮達をしたにもかゝらず、極めて慾のない性質ちぢぢだつた。彼は自分の權限に委まかされた、官用薪材の受け入れとか何とか、さういつた風の小甘い汗の吸へさうな主任の地位で、一生満足してゐたかも知れない。ところが忽然として、今まで豫期してゐたミンナとかエルネスチーナ(共に獨逸娘のあ)の代りに、思ひがけなくユ

リヤ・ミハイロヴナといふ代物しろものが引つかかつたのである。彼の榮達は忽ちにして、いま一段の向上を見ることとなつた。克明で慾のないレムブケーも、自分だつても少し自尊心を持つていゝ譯だ、と感じるやうになつた。

ユリヤ夫人は、昔風に勘定すると二百人の農奴のほかに、りうとした保護者をもつてゐた。一方から見ると、レムブケーは美男子で、ユリヤは四十を越してゐる。注意すべきことには、自分がユリヤの未來の夫だと感じるにつれて、レムブケーは次第に、彼女を眞剣で戀するやうになつた。結婚當日の朝、彼はユリヤに詩を贈つた。かういふことがごとく彼女のご意になつたのである、その詩までが……。實際、女の四十と云へば冗談ではない。間もなく彼はお定まりの官等と、お定まりの勳章を貰つて、それからこの縣へ任命されて來たのである。

この縣へ赴任するとき、ユリヤ夫人は自分の夫に就いて、一生懸命策をめぐらしたのである。彼女の意見に依ると、彼もまんざら無能な人物ではなかつた。客間へ入るすべも知つてゐるし、初対面の挨拶をする法も心得てゐる。深遠な思想でもありさうに、人の言ふことを傾聴して、自分では何一つ言はずに黙つてゐることも、極めて慇懃に氣取つてゐる術すべも知つてゐるばかりでなく、演説の一つもする事が出来る。そして、色んな思想の切れつばしや缺けらさへ蓄へてゐて、今の世で必要缺くべからざる、最新の自由思想の光澤つやも被せおほせてゐる。たゞ何と言つても心配なのは、何だかあまり感受性の鈍いことと、長いあひだ絶えず立身出世の方法に汲々とした結果、無性に安息の要求を感じはじめたことである。夫人は自分の名譽心を、夫に注ぎ込みたくて堪ら

なかつた。ところがどうだらう、夫は思ひがけなく紙細工の教會を拵へ始めたではないか。牧師が出て來て説教をはじめると、人々は恭しく手を前に組んで、お祈りをしながら聽いてゐる。一人の夫人は手巾ハンカチで目を拭いてゐるし、老人は鼻をかんである。一番しまひに風琴オルガンが鳴るといふ趣向だが、これも費用を厭はずに、わざ／＼瑞西へ注文して取り寄せたのである。

ユリヤ夫人はこの事を知るが早い、一種の恐怖さへ感じながら、その細工を一さい取り上げて、自分の箱の中へ鍵をかけてしまひ込んだ。その代り、彼女は小説を書くことを許したが、それも内緒にといふ條件つきだつた。それからと云ふもの、夫人はたゞ自分一人のみを當にするやうになつた。が、悲しいことに、それがかなり輕はずみで、おまけに度といふものがなかつた。運命はあまり長く彼女を老嬢オールドミスの境遇に止めてゐたので、今はいろんな考へが後から後からと、虚榮心の強い、しかも幾分いら／＼した彼女の腦中に、浮かび出るのだつた。彼女にはいろいろな思わくがあつた。彼女は是が非でも、縣の政治を切つて廻はしたかつた。いまにもすぐ多くの人に取り巻かれないといふのが、彼女の空想だつた。彼女はさつそく方針を確定した。レムブケーは幾分ぎよつとしたが、しかしすぐに官吏特有の直覺で、自分は何も縣知事の職を恐れるには當たらない、といふことを悟つて了つた。初めの二月三月はなか／＼巧く行つた。ところが、そこへピョートルが割り込んで、何かから奇妙な具合になつて來たのである。

ほかでもない、小エルホーエンスキイは、そも／＼の始めからレムブケーに對して、不遜の態度を示したばかりでなく、何か一種奇怪な優越權すら握つたかのやうであつた。そしてつねづね